ー山彙に發するクスコクキム(Kuskokwim)河地方を調査し、從來世に知られざりし「インヂアン」の一族を發見して之に「クスコワガムート」(Kuskowagamuten)の名を與へたり。

一千九百八年アメリカ合衆國地質調査所の探檢隊はアラスカに於て大に活動せり、南東アラスカに於てライト(C. W. Wright)はヒールス公島の鑛山地方を踏査し、モッフィト(F. H. Moffit)、クノップ(Adolph Knopf)、カップ(S. R. Capps)、キザースブーン(D. C. Witherspoon)、ラフォレー(R. M. La Follet)は銅河地方を探査し、グラント(Grant)はキリアム公海峽を調査し、アットウード(W. W. Atwood)はコントロラー灣及びクック灣を訪ひ(一九〇六)、南東部及び內部を調査し(一九〇七)たる後、南西アラスカに於けるヘレンヂーン(Herendeen)灣、ウンガ(Unga)島及びマタヌスカ(Matanuska)炭田を旅行し、ユーコン流域にはバグリー(J. W. Bagley)、プリンドル(L. M. Prindle)、カッツ(F. J. Katz)、コバート(C. C. Covert)、エルスワース(C. E. Ellsworth)及びマドレン(A. C. Maddren)等の活動あり、セワルド(Seward)半島に於ける探檢はスミス(P. S. Smith)及びキンドル(E. M. Kindle)之を繼續し半島の水誌はヘンショー(F. F. Henshaw)之を探究せり。

合衆國 第十九世期に入りてはアメリカ合衆國の中央及び地方政廳より派遣せられし探檢者少なからず、ルキス(Lewis)及びクラーク(Clarke)はミズーリ及びイエローストーンに沿ひて進み、コロンビア河に從ひて太平洋岸に出で(一八〇三—〇五)、パイク(Zebulon M. Pike)はミシシッピの流域、西部「プレーリー」コロラド及びニューメキシコのロッキー山脈等を調査し(一八〇五—〇七)、ロングス(Stephen H. Longs)は上流ミシシッピ及びセントローレンスの流域に赴き、コルヂレラ山系の內部に於ける地方は一千八百二十四年より毛皮採集者の入込む所と成りしが、ボンヌビイユ(B. L. E. Bonneville)(一八三二—三六)、フレモン(J. C. Fremont)はミシシッピの上流地方、ユター高原等を踏査し(一八四二—四五)、スタンスバリー(Howard Stansbury)(一八四九—五〇)の諸探檢家は少なからざる効績を殘せり、而してミズーリ及び南赤河地方に於けるフェザーストーンハウフ(G. W. Featherstonhaugh)(一八三四—三五)、ミシシッピ地方に於けるシウールクラフツ(H. R. Schoolcrafts)(一八三二)、ニコレット(J. N. Nicollet)(一八三六—

ルキス

パイク

四〇)、オーエン(D. D. Owen)(一八三七——四七)、ホキトニー(J. D. Whitney)(一八四七—五〇)等は地質旅行者として名あり。

「プレーリー」及びロッキー山脈の南部に就きてアベルト(W. Abert)及びペック(G. Peek)(一八四五)、キスリセヌス(A. Wislicenus)(一八四六)、クーク(G. Cooke)(一八四六)、エモリー(W. Emory)(一八四六——四七)等あり、ワーナー(W. H. Warner)(一八四七——四九)はカリフォルニアの沿岸山脈幷にシエラネバダの北部を調査し、マーシー(R. B. Marcy)は赤河の南部(一八五一——五二)、ホイップル(C. W. Whipple)は西コロラドの高地を調査せり(一八五三——五四)而してスチフェンス(J. J. Stevens)及びキリアムソン(R. S. Williamson)等は西部の沙漠シエラネバダ及びオレゴン山脈の通路を(一八五三——五五)、イベス(J. C. Jves)はコロラド河を研究せり(一八五七——五九)、ネブラスカ及びダコタの「プレーリー」に於けるワーレン(G. K. Warren)及びヘードン(V. Hayden)(一八五七)、西部カンサスに於けるジョンストン(J. E. Johnston)(一八五七)、ユター幷にネバダに於けるシムソン(J. H. Simpson)(一八五八)カナダの國境に於けるカメル(A. Campbell)(一八五七——六一)等亦留意すべき人なりとす。

其の後キング(Clarence King)等は北緯四十度の線に沿ひて(一八六七——七二)ホイーラー(George M. Wheeler)等は西經百度の線に沿ひて(一八七一——七九)、各調査する所あり、ヘードン(F. V. Hayden)等(一八六七——七八)の事業及び合衆國地質及び地理測量會(United States Geological and Geographical Survey)の建設(一八七九)も當地方の事情をして明瞭ならしむるに與りて力ありき、一千八百七十九年よりはミシシッピ、一千八百八十四年よりはミズーリの觀測始まり生物學的、人種學的の探査も次第に歩を進め政府の地質——地理調査も大なる効果ありたり。

右の外に旅行家探檢者ありてペンシルバニア及びカロライナのアパラチア山脈に於けるミショー(F. A. Michaux)(一八〇二——〇三)、ギヨー(Arnold Guyot)(一八六〇——九〇)を始めとし、キリアムス(J. L. Williams)のフロリダに於ける(一八二五)、ブロームム(Chr. Bromme)のアパラチアの東斜面に於ける(一八三二)探檢あり、キード(Wied)公はオハイオ及びミズーリ地方に(一八三二——三三)、ライエル(Ch.

Lyell)はミシシッピ流域に旅行し(一八四一——四五)、ワグネル(Moritz Wagner)及びシェルツェル(Karl Scherzer)も同地方に赴けり而してナッタル(Nuttall)(一八一〇以來)、オーヅボン(Audubon)(一八一〇以來)、カトリン(Catlin(一八三二以來)、レーメル(Ferd. Römer)(一八四五)、オルムステト(F. Olmsted)(一八五六)、ウード(A. Uhde)(一八六〇)、ヅーデン(G. Duden)(一八二四——二七)、ムイル(J. Muir)、ルコント(Joseph Leconte)、ジャンルコント(John B. Leconte)(一八九五)等も各貢献する所あり、デービス(W. M. Davis)は新イングランドに(一八九六)、タール(R. S. Tarr)(一九〇〇)はニューヨークに就きて講究せり。

第二十世期に入りてはニュージャーシーの北部に於けるベーリー(W. S. Bayley)メーン州に於けるクラップ(F. G. Clapp)、コロラドのサンジュアン(San Juan)地方に於けるクロス(Whitman Cross)、オレゴンに於けるデラー(J. S. Diller)、カリフォルニアに於けるヂクソン(R. B. Dixon)の外、フィラー(M. L. Fuller)はシンシナ地方に、ギルバート(G. K. Gilbert)はサクラメント河に、バンハイズ(C. R. Van Hise)はユタ、コロラド及びスペリオル湖地方に赴き、ジョンソン(Wilson Johnson)等はニューメキシコ、ユタ、アリゾナを探檢したり。

一千九百五年ネバタの沙漠調査は夏季日蔭に於ても五十四度四分の高温に達する處あるを知り、又高山調査はホイットニーの高さを四四一八米突と測定して當國の最高峰たる名譽を與へたり。

アメリカ合衆國教育局はブランチャード(Raphael Blanchard)をしてケベック、モントリオール、トロント、ヴィラキュース(Syracuse)、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントン、シカゴ、サンフランシスコ、ハバナ及びメキシコに旅行してフランス的影響等を調査せしむる所あり、ブレー(Bray)はテクサス州に植物學的調査を行ひ、ラマレー(F. Ramalay)はカリフォルニア州の北東部に於ける植物學的探檢に就いて報告を與へ、ダネス(J. Dares)は南カリフォルニアのサンヒャシント(San Jacinto)山脈の地質に就いて研究し、合衆國地質調査所は死谷(Death Valley)を新に調査して最深點は海面下二七六呎なるを知れり。

一千九百七年ファーガッソン(S. P. Fergusson)はニューハンプシャイアのワシントン山脈に向ひて旅行し以て氣象の調査に從事し、フィードレル(M.me Fiedler)は

バリー商業地理協會より派遣せられて當國に經濟地理的旅行を爲し、フィシャー(E. F. Fisher)はバーモント(Vermont)のミストリバー(West River)に於ける河段丘の研究を行ひ、フローロングス(E. L. Furlongs)はカルフォルニア殊にシャスタ(Shasta)郡の洞穴を探査し、ジョンソン(D. W. Johuson)はニューメキシコ、アリゾナ、ユター地方を調査し、マックカーディー(George Grant Mac Curdy)はコンネチカットに考古學的探檢を行ひ、メリル(George P. Merril)はアリゾナのフラグスタフ(Flagstaff附近に於けるヂアブロ(Diablo)「カニオン」に地質學的調査を試み、ポリス(P. Polis)は合衆國の東部及びカナダに氣象學的旅行を爲し、マックヅーガル(Mac Dougal)はサルトン(Salton)湖の調査を行へり。

チャールス シューチルト(Charles Schuchert)はニュージャーシー、メリーランド、バージニア及び西テンネッシーに化石の採集及び地質の調査を行ひ、スミス(J. Perrin Smith及びバーツヂル(J. Culver Hartzell)はネバダの西部幷に中部に旅行したり、此の外、北カロライナ、ジヂオージア、アラバマ、ミシシッピ、等の諸州の地質調査に從事せしもの少からず。

バウエル(L. A. Bauer)は甞て行ひし磁氣觀測の報告を公にし、コロラド州の國民公園なるメサヴルデ(Mesa Verde)の岩屋に就いてはフィウクス(J. Walter Fewks)の研究あり、マッククリントク(Mac Clintock)はカナダとモンタナとに跨りて居住する黑足「インヂアン」を調査し、ヤシー(W. D. Matthew)はネブラスカを探査し、スミス(Harlam J. Smith)はワイオミングの北部に考古學的旅行を試みシルベスター(A. H. Sylvester)はオレゴン州のカスケード山脈に於けるフード(Hood)山を調査して再び其の活動せるを認めたり。

メキシコ　新探檢は先づフンボルト(Alexander von Humboldt)(一八〇三)に依りて行はれ、ブルカルト(Joseph Burkart)はタンピコ(Tampico)サンブラス(San Blas)間の地質調査を行ひ(一八二五—二四)、ドルフス(Dollfus)及びモンッラー(Montserrat)(一八六二)の後、ラッツル(Fr. Ratzel)(一八七七—一八七五)、チールマン(V. Thielmann)(一八七六)、ダルグン(Dahlgren)(一八七七)、ラート(V. Rath)(一八八三)、レンク(Lenk)(一八八七)、ハイルプリン(A. Heilprin)(一八八九—九〇)、ザッペル(Sapper)(一八九三)、ファリングトン(O. Farington)(一八九九)、デッケルト(E. Deckert)(一八八四、一八八九、一八九九)等の旅行あ

り、而してハンツス(Xantus)(一八五八)、ブラウン(Browne)及ガブ(Gabb)(一八六七)、メリル(Merrill)(一八八三)、アイゼン(Eisen)(一八九四)等は下カリフォルニア半島を、ミルスポー(Millspaugh)(一八九五)幷にマーサー(Mercer)(一八九三)はユカタン半島を踏査し、チャルネー(D. Charnay)は古代都市の遺墟を探り(一八五八)、バンデリー(Bandelier)(一八八〇)、マラー(Maler)(一八九五)殊にセーラー(E. Seler)も少からざる効果を擧げたり、此の後パチエコ(Carlos Pacheco)、レアル(F. Leal)、カスチリオ(A. de Castillo)、アギレラ(J. G. Aguilera)、オルドネス(E. Ordoñez)、ペニアフエル(Penafiel)、クバス(Garcia Cubas)、エリケス(Zayas Eriquez)等ありてメキシコの地理學的事項の世に紹介せられしもの少なからず。

第二十世期に入りてはヒル(R. T. Hill)及ホベー(E. O. Hovey)は西インヂアンを研究し(一九〇五)、プロイス(Th. Preusz)は同地方のインヂアンを調査し、カルベルト(Philip P. Calbert)の地質調査を行くるあり(一九〇六)、コバルビアス(Abel Dias Covarrubias)、バウエル(A. L. Bauer)等の磁氣觀測を爲せるあり、ペリニー(Maurice de Perigny)のペテン(Peten)幷にユカタン地方に進けるあり。

中央アメリカ 大西洋岸はバスチダス(da Rodrigo de las Bastidas)(一五〇一)及コロンブス(一五〇三)の兩人に依りて最巡航せられ、バルボア(Vasco Nuñez de Balboa)は地峽部の西に一新海を發見して南海(太平洋)と名づけたり(一五一三)、而してクーバはソリス(Diaz de Solis)及ビンソン(Vicente Yañez Pinson)に依りて其の島地なるを決定せられ(一五〇八)、フロリダはレオン(Ponce de Leon)の發見する所と成り(一五一三)、ユカタン半島の海岸はコルドバ(Hernandez de Cordoba)幷にアラミノス(Antonio de Alaminos)(一五一七)の探査の後、ピネダ(Alonso Alvarez Pineda)ありて其の沿岸を調査せり(一五一九)。

中央アメリカの探檢は凡そ一千八百五十年より行はれ、其の北部に於ける古代文化、西岸に於ける火山の研究を目的とせしを以て大西洋岸の踏査は一般に頗る後れたり、而してスキエー(E. G. Squier)(一八四八—五一)、ワグネル(Moritz Wagner)及シヘルツヘル(Karl Scherzer)(一八五三—五四)、ゼーバハ(Karl von Seebach)(一八六三—六五)の後、ドルフス(A. Dollfus)及モンツヘラー(Montsesrat)はサルバドル幷にグアテマラの火山を調査して殊に著はれ(一八六六—六七)、ヨ

ダチ(Agostino Codazzi)はチリキ(Chiriqui)地峽を(一八五四)、フランチウス(A Von Frantzius)はコスタリカの植物を研究し、ガブ(W. Gabb はコスタリカの地質を調査し(一八七三)、チール(A. Thiel)(一八八一——八四)ボーバリウス(C. Bovallius)殊にピッチエー(H. Pittier)の効績に小ならざるものあり。

ニカラグアに就きて價値多き報告を與へたるものはメノカル(Menocal)なるが(一八八五)、ミエリシ(B. Mierisch)は大西洋岸に二回(一八八九—一八九三)の旅行を試みハイルプリン(A. Heilprin)等はニカラグア湖を研究せり、ホンヂュラスはチャールス(C. Charles)、ザッペル(Carl Sapper)等の踏査なきに非ざるも探檢不充分なり、而してイギリス領ホンヂュラスの內部は一千八百七十八年以來事情明らかと成り、フォーラー(H. Fowler)(一八七八——七九)の橫斷あり、ミルラー(W. Miller)、ゴルヅヲーシー(W. Goldsworthy)も亦探檢に從事せり、又サルバドル及びグアテマラは一千八百七十八年より一千八百八十二年までロックストロー(E. Rockstroh)の活動舞臺たりし處なり、ストル(Otto Stoll)(一八七八——八三)、シャルネー(Désiré Charnay)及びモードスレー(A P. Maudslay)(一八八〇——八三)、ゼーラー(Seler)(一八

九七)等も亦グアテマラに赴けり。

此の如く中央アメリカに於ける旅行者は多きも其の全部に亘りて探査せるはザッペル(Carl Sapper)なり、同人は北グアテマラの住處たるコバン(Coban)を發し(一八八八)附近の地より西部の火山地方に赴き、中部グアテマラ及びチャパスを過ぎ、一八八九)、グアテマラの大西洋岸、イギリス領ホンヂュラス、等に赴き(一八九一)、南グアテマラに進み、太平洋岸及びホンヂュラス、を探査し(一八九二)タバスコ(Tabasco)及びチャパス(Chiapas)に入り(一八九三)、ユカタン(一八九四)、サルバドル及び西ホンヂュラスを探査し(一八九五)、更にイギリス領ホンヂュラス(一八九六)、南グアテマラ、サルバドル、ホンヂュラス及びニカラグア(一八九七—九八)コスタリカ、チリキ(Chiriqui)等を調査し(一八九九)、ホンヂュラス及びニカラグアの大西洋岸を巡察し(一九〇〇)、前後十二年を費して中央アメリカの地理を研究したり。

アンチル　キューバがエスパニアの所領たりし頃は、探檢不充分なりしが、合衆國領と成りてよりヘース(C. Willard Hayes)、ボーガン(T. Wayland Vaug-

hun)、スペンサー(A. Spencer)等の旅行あり、ジャマイカはソーキンス(J. G. Sawkins)及びブラウン(C. B. Baown)、一八六九)、ヒル(R. T. Hill)(一九〇〇)等之を調査したり、ハイチに就きてはガブ(Charles Gabb)の探査(一八六九——七一)ありしに拘らず尙ほ不明の處多かりしが、スチュアート(R. Stuart)(一八七八)及びチッペンハウエル(G. Tippenhauer)(一八九二——九三)、トバゴを探檢せる(一八九二)エッグルス(H. Eggers)(一八八七)等ありて稍〻地理の知られたるものあり、ポートリコに關する吾人の知識はエレブ(P. T. Eleve)、シーフェルス(W. Sievers)、ヒル(R. T. Hill)に依りて與へられたり。

小アンチル諸島の調査亦等閑に附せられたるが、バルバドス(Barbados)、アンギリヤ(Anguilla)の二島は例外なり、而して後者を探檢せるはソーキンス(Sawkins)、マクリュア(Maclure)とす、又グアダルプの調査はバレー(J. Bulley)之を行ひ、スペンサー(J. W. Spencer)は小アンチル列島に關して小なからざる事業を爲し、ヨール(G. P. Wall)及びソーキンス(J. G. Saukins)はトリニダードを研究し、アルバ(Aruba)、クラサオ(Curacao)、ボネール(Bonaire)はマルチン(Karl Martin)の調査する所と成れり(一八八四——八五)。

一千九百三年ボーチモア地學協會のシャタック(G. B. Shattuck)はバハマ諸島に航して地質、潮汐、等を調査し、一千九百六年ドイツ人プラテ(Plate)はナッソー(Nassau)を中心として本群島の地質を探査せり、キッケンタル(W. Kükenthal)及びハートマイヤル(Robert Hartmeyer)の兩人も動物學的探檢を西印度諸島に試みき。

B 南アメリカ

コロンブスが新陸地を發見せしより南アメリカに赴くもの漸く出で、オヘダ(Alonso de Hojeda)、ナチ(Juan de la Cosa)、アメリゴ、ベスプッチ(Amerigo Vespucci)等は同地の北岸を探檢し、ピンソン(Vincente Yañez Pinson)はアマゾナ、オリノコ兩河口間を探り、コサ、等はダリエン灣に達したり。

一千五百年一月二十六日ピンソンはブラジルを發見せしが、此の年四月二十二日カブラル(Pedralvarez Cabral)も亦同地に到り、同年レイ(Diego de Lepe)なるものもブラジルに赴きたり而して有名なるアメリゴ、ベスプッチは四回四一

九九二回、一五〇一〇二、一五〇三—〇四の探検を試み、ソリスはセンロク岬よりラプラタまで航海して巨流を發見し(一五一五)、マガリアネス(Fernando de Magallanes)は嘗に南アメリカの東岸を探検せるのみならず、南岸の海峽に其の名を止めて太平洋に出で所謂世界週航を行ひたり。

南アメリカ西岸の探検に就きて、グエバラ(Guevara)號はマガリアネス海峽より始めてテウアンテペク港に入りしが(一五二六)、カマルゴ(Alonso de Camargo)なるもの一千五百四十年沿岸の第一回探検を試み、バルチビア(da P.dro de Valdivia)はチレーに入りてサンチアゴを建設し一五四〇、バステネ(Juan Baptista Pasten.)メンドサ等も此の地方の知識をして廣からしめたり而してフエゴ島、スターテン島、ホーン岬等はドレーク(Francis Drake)(一五七八)、デービス(John Davi.)(一五九二)、ルメール(Le Maire)及びシヨーテン(Schonten)(一六一六)等に依りて次第に其の狀態を明らかにせられたり。

之より更に南アメリカ内部の探検を記さんか、ピサロ(Pizaro)がペルー、アルマグロ(Almagro)がチレーを征服しつつありし間に、ベナルカサル(Sebastian Benalcazar)はエクアドル及びコロンビアに入りて、マグダレナ河を溯れるケサダ(Gonzalo de Quesada)、コロ(Coro)より來れるフエーデルマン(Nikolaus Federmann)とボコタ高原に相會したるが(一五三九)、先之ダルフィンジヤー(Ambrosius d' Alfinger)はコロよりサンタマリアのシエラネバダ及びペリハ(Perija)のコルヂレラに旅行し(一五二八—三二)、一千五百三十六年よりボゴタのコルヂレラの東斜面及びオリノコ西部の支流を調査したり、次いでホーヘルムート(Georg Hohermuth)並にハツテン(Philip von Hutten)はアマゾナの支流たるヤプラ河畔に達したり(一五三六—三七)、此の頃オレヤナ(Francisco de Orellana)なるものアマゾナ河を航下してクバグア(Cubagua)島に達し以て熱帶南アメリカの水系を紹介したり(一五四〇)、而してウルスア(Pedro de Ursua)(一五六〇)が殺戮せられし後、アギレ(Lope de Aguire)はリオネグロ並にオリノコを利用してベネズエラの海岸に出で、ラレー(Sir Walter Raleigh)はオリノコ河口を決定せり、又南アメリカ三巨流の一たるラプラタは漸次下流より探検せられて第十六世期の中葉には水源まで明らかにすることを得、一千六百年の頃にはホンヂウス

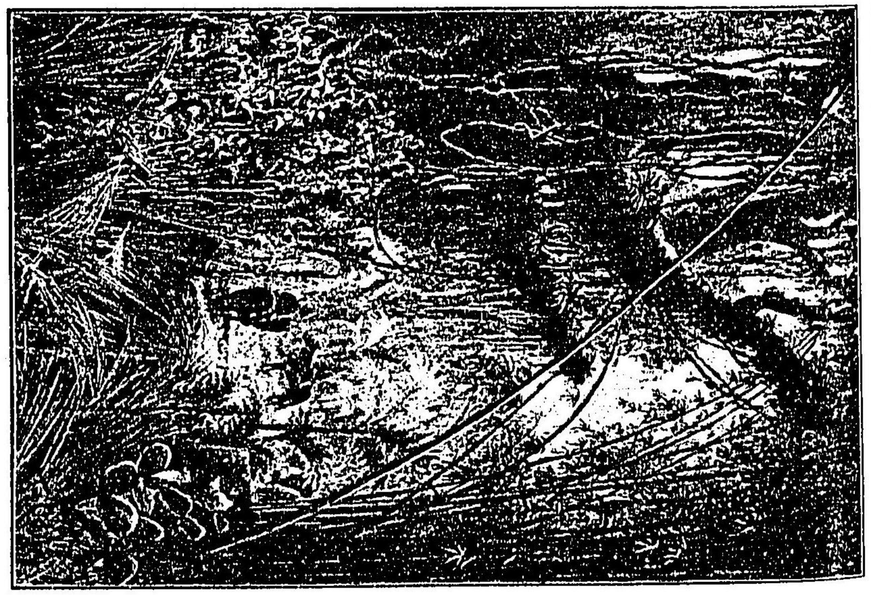
カマルゴ
バルチビア
ピサロ
アルマグロ
ベナルカザル
オレヤナ

(Jodocus Hondius)は北アメリカ南アメリカの稱を用ひたり。

一千五百五十年より一千八百年に至る二百五十年間にはフイエー(Louis Feuillée)は大陸の西岸を調査し(一七〇七——一二)ブーゲー(Pierre Bouguer)コンダミーヌ(Charles Marie de la Condamine)等はエクアドルに於て緯度を觀測し(一七三六——四二)ブーゲーは其の後マグダレナ、コンダミーヌはアマゾナを下り、ルイス(Ruiz)及びパボン(Pavon)は東部ペルー及びボリビア、チレーに植物學的調査を試み(一七八一——八八)ファルクネル(Pater Falkner)はパタゴニアのリオネグロよりナウエルヌアピ(Nahuel Nuapi)に進み(一七七五)フエドマ(Francisco Viedma)はリオサンタクルスを溯りてアンデスに達し(一七八二)モンテロ(J. de Morateda y Montero)はチロエ島を訪ひ(一七八六——八八)しが如きことなきに非ずと雖も著しき探檢を見ず、然らば一千八百年頃より南アメリカを探査して一大効績を殘せるものは誰なるか有名なる**フンボルト**其の人なり。

フンボルト(Friedrich Heinrich Alexander von Humboldt)(1769—1859)はオーデル河畔のフランクフルト非にゲッチンゲン大學に於て研究し、オランダ、ベルジック、イギリスに旅行

アレクサンデル・フンボルト(A. Humboldt)



ルガンラの森林(北西アメリカ)

せる後、フライブルグ(Freiburg)の鑛山學校にて研究を續けたり、一千七百九十二年より數年間バイロイト(Bayreuth)附近のステーベン(Steben)にて鑛山技師たりしが、一千七百九十七年シュワイツ、イタリア、フランスに旅行せんが爲に職を辭し、パリーに於てボンプラン(Aimé Bonpland)なるものと交を結び而して同人と共に南アメリカ井にメキシコを探檢したり(一七九九——一八〇四)、其の上陸點はベネズエラのクマナ(Cumana)にして之よりカラカスに赴き「リアノス」を過ぎてオリノコに向ひ、カシキアレ河に達し、一千八百年アンゴスツラ(Angostura)を過ぎてクマナに歸れり、其の十一月クーバ島に航して數月間本島を研究し、一千八百一年コロンビアのカルタヒナ(Cartagena)に進み、マグダレナ河を溯りてボゴタに達し、カツカ河の谷に從ひて旅行し、エクアドルの火山を研究し、一千八百二年キトーよりペルーに、翌年メキシコに向ひアカプルコよりベラクルズに出でハバナ、フィラデルフィアを經て一千八百四年ボルドーに歸着せり、一千八百九年より一千八百二十七年までパリーにありしが、其の後はベルリンに永住することとせり、一千八百二十九年ロシア皇帝の招きに應じてシベリア井にカスピ海に科學的旅行を試みたる後餘命をベルリンに送れり、著書多きが中に新大陸熱帶航海、中央アジア、新大陸地理史の批判、殊に傑著宇宙(Kosmos)(一八四五——五八)あり、近世地理學界の一偉人たり。

ブラジル エシュエーグ(L. W. von Eschwege)はサンパウロとミニアス、ジェラエス地方を(一八一一——一四)、マキシミリアン伯はバイア及びリオ間の海岸井に

其の内部を探檢し(一八一五——一七)、セントヒレール(Geoffroy Saint—Hilaire)(一八一六——二二)、ポール(Pohl)及びナッテレル(Natterer)は動物學探究を行ひ、スピックス(J. B. Spix)及びマルチウス(Ph. Martius)はブラジル内部の大部即ちミナスジェラエス、バイア、ペルナンブコ、ピアウイ(Piauhy)、マラニョ(Maranho)、サンフランシスコ河の流域、等を踏査したり(一八一七——二〇)。

フランスの博物學者ドルビニー(A. D. d'Orbigny)はリオデジャネイロ、ラプラタ、チレー、ボリビア、等の地方に赴けるが(一八二六——三三)、カステルノー(F. de Castelnau)は中央ブラジル、アンデス山脈、パラグアイの水源、等を調査し(一八四三——四七)、ハルフェルド(Halfeld)はサンフランシスコ河を溯り(一八五二——五四)、アベラルマン(R. Avé=Lallemant)はブラジルの南部及び北部を(一八五八——五九)、チッチ(J. J. von Tschudi)は中部ブラジルを(一八五七——六一)探檢せるが、此の外ブルマイステル(H. Burmeister)(一八五〇——五二)、エルス(J. W. Wells)(一八七三——七五)、エーレンライヒ(P. Ehrenreich)(一八八五)、等も活動し、南部ブラジルにも少なからざる旅行者あり、中部ブラジルに關してもアダルベルト(Adalbert)はヒング河を溯り(一八四二)、カール(Karl von den Steinen)等は其の水源を究め(一八八四)同流域に於けるインヂアンの研究はマイイエル(Hermann Meyer)の二回の旅行(一八九五——九六、一八九八——九九)に依りて其の歩を進め、クードロー(H. A. Coudreau)は中央ブラジルの河流を取調べたり(一八九五——九七)、而して聯邦首府を内部の高地に建設せんが爲にブラジル政府が行ひたる調査は地理學上に多少の光明を與へき(一八九二——九三)。

アマゾナ河はスピックス及びマルチウス、ペッピク(E. Pöppig)(一八三一——三二)、スミト(Smyth)及びロヰ(Lowe)(一八三五——三六)、カステルノー(Castelnau)(一八四七)、ワリス(A. R. Wallace)(一八五二)、等の探査の後、一千八百六十二年より系統ある調査行はるることと成れり即ち一千八百六十二年より一千八百六十四年まではブラジル人アセベド(Acevedo)及びピント(Pinto)之を行ひしが、ハンドレス(W. Chaudless)はアマゾナ(一八六二)、プルス(Purus)(一八六四——六五)、アクル(Acre)(一八六六)、ユルア(Jurua)(一八六七)、ベニ(Beni)(一八六九)、等を探檢し、間もなくオートン(James Orton)はペルー及びエクアドルに於けるアマゾナの支流を研究し

ッカー(Tucker)はウカヤリ(Ucryali)河系を明にすることに盡力し(一八六八——七四)、ヱルテマン(Wertheman)はタンボ(Tambo)、ザマネス(Samanez)はエネ(Ene)を探り、ライス(W. Reisz)幷にスチューベル(A. Stübel)はウアヤガ(Huallaga)を航してアマゾナに入り、其の谷の高さに就きて價値多き説明を與へたり(一八七五)、此の頃チャーチ(G. E. Church)はマディラ及びプルスを(一八七五——七六)、ブラウン(E. B. Brown)はアマゾナ及び其の支流を、セルフリヂ(Selfridge)はマディラを調査し(一八七八)、マディラの上流の狀態頗る明瞭となりしが、アマゾナ北岸の支流に就きてもレイエス(Reyes)(一八七五)、シムソン(A. Simson)殊にクルヴォー(Jules Crevaux)はイサ(Ica)の水源を究め、ヤプラを下りて南アメリカ地中海の二支流に關する新知識を與へ(一八七九)、又ベネズエラ=ブラジルの境界委員はリオネグロ幷にリオブランコ(Rio Blanco)を探査し(一八八〇——八二)、クードロー(H. A. Coudreau)はタパヒョス、ヒング、アラグアヤ、トカンチン、等の諸流を探檢し十二新河、六新湖を世に紹介し、ヤムンダ(Yamunda)河の探究を南緯零度三十三分まで行ひたり(一八九六——九九)、マイヤー(H. Mlyer)はヒングの水源に關する探

檢を完了したり(一九〇〇)。

此の如くにしてアマゾナの河系の大體を知るに至りしが、バイエル(Richard Payer)のナポ河(一八九〇)及びヤウアペリー(Jauapery)河(一九〇一)に於ける航行の如きは最も世に知られたり、此の外にモロナ(Morona)及びパスタサ(Pastaza)に於けるキーネル(Ch. Wiener)(一八八一)、エーレンライヒ(一八八九)等なり、又マドレデヂオス(Madre de Dios)に關しては、ラブル(Pereira Labre)(一八九七)、バンド(J. M. Pando)(一八九二——九三)等あり、フィスカラルド(E. Fiscarrald)はベニ(Beni)河とウカヤリ河とを連絡し(一八九四)、カミセア(Camisca)及びテリアリマヌ(Terjali-Mane)を溯れり(一八九八)。

一千九百四年にはコホ(Theodor Koch)がアマゾナの上流地方に於て人類學的探査を試みたり。

ブラジル=ペルーの國境遠征隊はユルア(Yurua)河の水源より河口(三二八三粁)までを調査し、ツーメー(Paul Loumer)はブラジルに經濟地理的研究を試み、ファウセット(H. Fawcett)はボリビア——ブラジル境界確定の爲めアクレ(Acre)に

赴き、クロネ(Ricardo Krone)はイグアペ(Iguape)、ヒリリカ(Xiririca)及びスポロンガ(Sporonga)に於ける二十二洞の調査を行ひ、サルヤン(Saljan)及びパメル(Fr. Pamer)はヒング旅行を企て、サンパウロ州の地理及び地質委員はパラナ(Parana)の支流たるチエテ(Tiete)、アクアペヒ(Aquapehy)等を探検し、又ワード(Robert De C. Ward)は氣象學及び地理學的旅行を爲し、キッセンベルト(Wilhelm Kissenberth)はアラグアヤ—トカンチンス(Araguaya-Tecantins)に人種學的調査を行ひ、クラウゼ(Fritz Krause)はアマゾナスの南に於て同樣の研究を試み、ロンドン(Candids Rondon)はマットグロッソ(Matto Grosso)よりアマゾナスまで電線を架設するの際沿道の探檢を爲し、キーナー(Charles Wiener)は一千九百七年より翌年に亘りてブラジルの經濟研究旅行を爲せり、而して熱帶動物調査の爲、二十五年間ブラジルに滯在せるグルヂ(Emil A. Goeldi)は故鄕ベルンに歸着せり、上記の外ドルベク(J. Delebecque)はエクアドル、ペルーよりアマゾナスを下りて大西洋に達し以て南アメリカを横斷せり。

ラプラタ 第十九世期の後半に於てページ(Th. Page)はラプラタ、パラナ及びウルグアイを探檢してサラド(Saladoリオクヤバ(Rio Cuyaba)の可航域を探明し(一八五三—五六)、ドムシー(de Moussy)はアルヘンチナとパラグアイとを踏査し(一八五四—一八六三)、ブルマイステル(Hermann Burmeister)は一千八百五十六年よりアルヘンチナを調査して博物學及び地理學に關する探檢の父と目せられ、ステルツネル(Alfred Stelzner)はアンデス山脈、コルドバの南北の「パンパス」を旅行し(一八七二—七三)、ブラケブシ(L. Brackebusch)はチレーとラプラタ、ユユイ(Jujuy)とリオアツエル(Rio Atuel)との間を(一八七五—八八)、ボーデンベンデル(W. Bodenbender)は一千八百八十七年來メンドサ(Mendoza)の南、コルドバの東に於ける平原を、ロレンツ(Lorentz)はチャコ地方を、クルツ(Kurtz)はメンドサとサンラファエル(San Rafael)間(一八八七—八八)幷にリオアツエル(Rio Atuel)とヂアマンテ(Diamante)間を(一八九一—九三)旅行し、アベラルマン(G. Avé=Lallemant)もコルヂレラ、サンルイス(San Luis)地方に就きて調査せり、又グルンプコフ(von Grumbkow)はマルチキタ(Mar Chiquita)の探檢を行ひ(一八九〇)、バレンチン(H. Valentin)はオラバリア(Olavarria)及びアズル(Azul)の山脈に登り(一八九四)、アルボフ

(Albofi)はシエラベンタナ(Sierra Ventana)を攀ぢ(一八九五)、ハウタル(R. Hauthal)、ロート(O. Roth)等も、パンパス及彼等の名を負へる山脈の探檢に加はれり。

グランチャコには不明の處少なからざりしが、フォンタナ(一八八一)、グルブォ|がピルコマヨ河を探檢したる(一八八二)の後、ツアール(A. Thouar)はボリビアより同河に從ひてパラグアイのアスンシオンに達し始めてチャコを横斷したり(一八八三)、バルドリチ(J. A. Baldrich)及びイバセタ(Ylazeta)(一八八三)も亦該河を調査し、セルソー(Cereceu)はチャコの最北部を旅行し(一八九一)、ビラロソ(Viraroso)(一八八一)、リスタ(Ramon Lista)(一八八三)、ニーデルライン(Niederlein)(一八八四)、アンブロゼッチ(J. B. Ambrosetti)(一八九四)、ボーブ(G. Bove)(一八八三—八四)、イエルマン(Jermann)(一八九六)等もラプラタ水系の探査に貢獻する所あり、又グンナルランゲ(Gunnar Lange)はピルコマイヨ河の殆ど全部を調査せしが(一九〇五—〇六)、ヴルマン(Wilhelm Hermann)シュミード(Adalbert Arn. Schmied)等も同河の探査に從事したり(一九〇六)。

パタゴニア(Patagonia)に關しては宣教師の往來多少ありてダーヰン(Charles Darwin)はリオサンタクルスを溯り(一八三三)、デスカルチ(N. Descalzi)はリオネグロ河を訪ひしことあるが、一千八百六十九年ムスターズ(G. Ch. Musters)はプンタアレナス(Punta Arenas)よりリオリメー(Rio Limay)まで探檢し始めて内部に關する光明を與へたり、之よりして南部パタゴニアにはファイルブルグ(Feilburg)(一八七三)、モレノ(Francisco Moreno)(一八七五—一八七六)、ロジャース(Rogers)、イバル(Ibar)(一八七七)、モヤノ(Moyano)(一八七八)、カスチリョ(A. de Castillo)(一八八六)、マセーラート(A. Mercerat)(一八九二—九三)、オットノルデンシェルド(Otto Nordenskiöld)(一八九五—九七)、ハチェル(M. J. B. Hatcher)(一八九七—九七)、ハウタル(R. Hauthal)(一八九九—一九〇一)、ライケ(K. Reiche)及びペールマン(R. Pöhlmann)(一九〇〇)等の踏査するあり。

ボシ(Bossi)(一八八一)、ボーブ(G. Bove)(一八八二)等は其の沿岸を航行し、ポープ(一八八四)は其の内部に入りしが、リスタ(Ramon Lista)は北部より亦内部に進み(一八八六)、ポッパー(J. Popper)(一八八六)、シェルツェ(J. Scheltze)(一八八七)も當地に至り其の後オットノルデンシェルド、ヅゼン(P. Dusén)及びオレン(A. Olin)の科學

的調査ありたり(一八九五——九七)。

中部パタゴニアも亦不明の地方なるが、ダーンフォード(Durnford)(一八七八)、モヤノ(Moyano)(一八八〇)、ロア(Lino de Roa)(一八八四)、フォンタナ(Fontana)(一八八六)等の旅行なきに非ず、北部パタゴニアにてはモレノ(Moreno)がカルメンデパタゴネス(Carmen de Patagones)よりチュバト(Chubut)に至れるあり(一八七五——七六)、其の後ロレンツ(Lorentz)、デリング(Döring)、ニーデルライン(Niederlein)、オブリガド(Obligado)(一八八一)、オコンノル(O' Connor)(一八八三——八四)等も當地方を調査せり。

南緯四十度以南のコルヂレラは一千八百六十九年以前に於て其の狀態頗る不明なりしが、年を經てブロンドステッド(Brondsted)は其の東斜面を探査し(一八八二——八三)、翌年チレーは海岸より内部に入るを試み、其の後チレー、アルヘンチナの國境劃定事業ありし時、コルヂレラの事情にして世に知らるるに至りしもの少なからざりき、一千八百九十三四年ステッフェン(Steffen)及びスタンゲ(Stange)はリオバレナ(Rio Palena)の上流を探検し、一千八百九十四五年

ステッフェン及びクリュゲル(Krüger)はリオプエロ(Rio Puelo)を、一千八百九十五六年ステッフェン及びライヘ(K. Reiche)はリオマンソ(Rio Manso)を探検したるが、クリュゲル、ステッフェンの兩人は尙ほ少なからざる効果を收めたり。

チレー、アルヘンチナ

ペッピヒ(E. Pöppig)(一八二九)、ダーキン(Ch. Darwin)(一八三三)、チュディ(J. J. von Tschudi)(一八五八)、ブルマイステル(H. Burmeister)(一八八五九)等のコルヂレラを探査するあり、殊に有名なるピッシス(A. Pissis)(一八四八以來)チレーに於ける博物的及び地理的探検の父たるフィリップ(Rudolf Amandus Philippi)、鑛物學者として著はれたるドメイコ(J. Domeyko)(一八五八——八六)あり、此の頃ホスト(J. Host)はコルヂレラの東面を探検し(一八七七——八一)クルツ(一八九一——九三)、ボーデンベンデル、バウタル、ヲルフ(Wolff)(一八九四)、バークハルト(Burckhardt)等も各旅行調査する所あり、ステルツネル(A. Stelzner)も先(一八七二——七三)に種々觀察を試みたることあり、而して新世界の最高峰たるアコンカグアに登れるはフィッゲラルヅ(Fitzgeralds)なりとす(一八九七)又ブラッケベシ(L. Brackebusch)は一千八百八十一年以來五回の探査を試みて

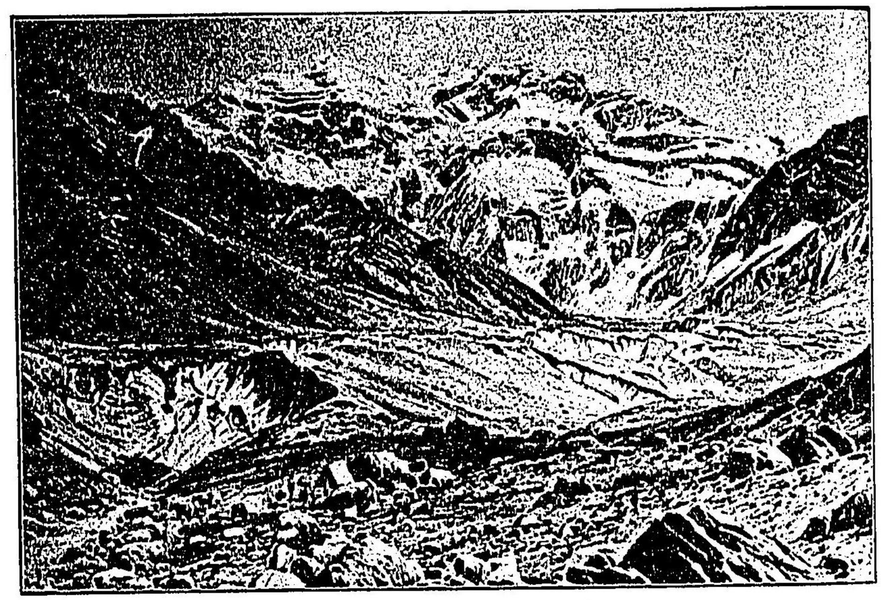
學界を益する所多かりき。

フランスのアルプ倶樂部長シュラデル(Schrader)はアルヘンチナのカステルロ(Enrique del Castello)と共にアコンカグアの高さを六千九百五十六米突と測定し(一九〇五)、ヘルトリング(R. Hitling)はライヘルト(F. Reichert)と共にアコンカグア山に登りたり(一九〇六)之より先チレーのガヒアルド(Gajardo)はスキリング(Skyring)灣が尙西方に伸び居りて所謂キリアム四世王半島は一島なることを發見せり、又プルチャード(P. Burchard)はランコ湖を研究したり。

フォークランド、及びフエゴの植物はスコッツベルグ(K. Skottsberg)等之を調査したり。

アルヘンチナ及びチレーのパタゴニアはベニヌス(Siegfried Benigus)の踏査する所と成り、ケンゼル(D. Quensel)はアルヘンチナ湖(Lago Argentina)よりマガリアネス地方までを探檢せり。

ペルー、ボリビア 第一期探檢は一千八百二十五年より一千八百四十七年に至れり、此の間に氣候、植物等に就きて觀察せるブッセンゴー(J. B. Boussingault)(一八二五—三二)、山岳の實測に從事せるペントランド(J. B. Pentland)(一



鍵山(Aconcagua)アコンカグア

東水道[チエラ デル フエゴ]

アコンカグア山

アコンカグア山はアンデス山脈中の火山にしてアルヘンチナ共和國に屬し、從來南北兩アメリカを通じての最高峯と認めらる、本山の高さに就きてはフィッツ ロイ(Fitz-Roy)の七三〇〇米突、チレーニアルヘンチナ國境劃定委員の七一二〇米突、等ありて七千米突以上の高峯たるか疑はざりしが、ドイツ人グッスフェルド(Güssfeld)は六九七〇米突と爲しセンマルテン(St-Martin)は六九三四米突を與ふるに過ぎずしてシュラデル(Franz Schrader)の測定(一九〇四)に依れば六九五三米突なりと云ふ。

因に記す、北アメリカの最高峯はマッキンレー山にしてアラスカのアリアスカ半島の南部に於ける花崗質の高山なり、發見者ヂッケイ(W. A. Dickey)の測定に依れば標高は六一二一米突に達すべし。

マゼルラン海峽

マゼルラン海峽はアメリカ大陸の南端とチエラデルフエゴとの間にありて太平大西の兩洋を連絡せり、東水道は幅二十二粁にして南緯五二度二八分を中位とせるが西水道も亦殆ど同樣なり、海峽の延長は五七五乃至六〇〇粁に達して幅は最小四粁より最大三三粁に至る、屈折多く最南點は五三度五四分にあり、潮汐はプンタアレナスの一米、五四乃至二、四四なれども東口方面には一一乃至一三米突に達する處あり、海峽を發見(一五二〇)せしマガリアネスは十八日にて通過せしが、ドレーク(Drake)は十六日(一五七八)、バイロン(Byron)は五十一日(一七六五)、ヂリス(Wallis)は百十六日(一七六七)、ブーゲンヴィイル(Bougainville)は六十日(一七六八)にて通航したり。

因に記す、マガリアエンスが始めて本海峽を通航せし際、遠征隊の去離に當れる高臺の地に於て原土人の焚火せるを目擊せしが故にチエラデルフエゴ(火の地)とは命じたるに其の儘殘存して今日に至れり。

八二六—二八)、西岸地方の高地、マホス(Majos)及びチキトス(Chiquitos)の「リアノス」を旅行せるドルビニー(A. D. d'Orbigny)(一八三〇—三三)あり。

ドルビニー(Alcide Dessalines d'Orbigne)(1802—1857)はフランスの博物學者なり、博物館の依賴に依りて南アメリカに旅行(一八二六—三三)してウルグアイ、パラナ、北パタゴニア、チレー、ボリビア等を探査したり、百科的材料を蒐集し、其の結果を公にせしが(一八三四—四七)、就中「アメリカの人」(Homme Américain)には傑作なりとの評あり。

ペッピヒ(Ed. Pöppig)(一八三〇—三一)スミス(Smyth)及びローウ(Lowe)(一八三五—三六)、ドカステルノー(de Castelnau)(一八四五)、チュディ(J. J. von Tschudi)(一八三八—四二)等の旅行あり、一千八百十五年に至りライモンヂ(Antonio Raimondi)はペルーの内部を縱横に探檢し、ソルダン(Mariano Felipe Paz Soldan)は北部ペルーに關して有益なる調査を公にせり而して一千八百四十六年より一千八百七十五年までは旅行探査不活潑なりしが、アンドレ(Edouard André)はコロンビア、エクアドルよりペルーに入りて同國に關する吾人の知識を增加せしめ(一八七五)、キーナー(Charles Wiener)は同國を横斷し(一八七五—七六)ライス(W. Reiss)及びスチュベル(A. Stübel)もペルー幷にボリビアにあり(一八七五)、バスチアン

(Adolf Bastian)は同地方に人種學的旅行を試み(一八七六)、チエルマン(Max von Thielmann)亦ペルーに赴き、一千八百七十六年より千八百七十九年までの間に於てエルテマン(A. Wertheman)は北部ペルーを調査せり、降て一千八百八十八年より一千八百九十年までヘットネル(A. Hettner)は南ペルーとボリビアとに於けるコルヂレラを旅行せるが、リマ丼にラパス地學協會の設置ありしより大なる旅行を試みしもの少なからず、コンエー(Sir Martin Conway)はイリァンプ(Illampu)、イリマニ等の高峰に攀登せり。

ペルー及ボリビアに旅行せるノルデンシェルド(Erland Nordenskiöld)丼にホルムグレン(Holmgren)、ボリビア、ペルー、エクアドルに抵れるハウタル(E. Hauthal)は孰も少なからざる結果をヨーロッパに齎らせり。

ファラビー(W. L. Farabee)、ミルハウ(L. J. de Milhau)及ヘスチングス(J. W. Hastings)はペルー、ボリビア及ブラジルの國境地方の人類學的探檢を行ひ、ボルチリオ(Pedro Portillo)はペルー東部の河流を調査し、トッド(David Todd)は星學的遠征の爲ペルーの高地に來り、ピリォンス(Raoul Pillons)はチァンチァマヨ(Chanchamayo)谷の經濟的事情を研究し、シュルレル(R. F. Schuller)は東ペルーのアルアク(Arauk)、パノ(Pano)兩族に就きて探査し、スタインマン(G. Steinmann)、シュラギントワイト(O. Schlagintweit)はペルー北部のアンデスを探檢せり。

エクアドル、コロンビア、ベネズエラ　ブッセンゴー(Boussingault)、カルステン(Karsten)(一八四九—五六)、ビーマン(Bertold Seemann)(一八五〇)、ワグネル(Moritz Wagner)(一八五七—五九)の後、ライス(Wilhelm Reisz)及ヘスチュベル(Alphons Stübel)は或は單獨に或は合同してコロンビアより中部エクアドルニ進み、遂にペルー、ボリビア、アマゾナを訪ひ、得る所頗る多く、兩人の探査の後始めてエクアドルの地圖を作ることを得たり(一八六八—七四)、而してヲルフス(Theodor Wolf)もエクアドルに就きて頗る研究する所ありき、ライス、スチュベル、ヲルフスに次ぎてはアンドレ(Edouard André)(一八七五—七六)、ヂエルマン(Max von Thielmann)(一八七六)、バスチアン(Adolf Bastian)(一八七七)、キンペル(Edward Whymper)(一八八〇)、モーレン(Maurain)及ラコンブ(Lacombe)(一八九九)、グロッセル(Paul Grosser)(一九〇一—〇二)等ありてエクアドル丼にコロンビアに就きて其の補充的旅

行を爲し、赤道直下のガラパゴス島に關してはダーキン(Ch. Darwin)(一八三五)、ヲルフス(Th. Wolfs)(一八七九)、ビサニ(Vettor Pisani)(一八八四)、ヒルマス(Vidal Gormaz)(一八八八)、バウル(G. Baur)、等之を調査せり。

熱帶アメリカの氷河を探査するの目的を以てマイヤー(Hans Meyer)はチンボラソ、アルタル、カリウアイリ、コトパクシ、アンチサナ、等に登りたり(一九〇三)、フランスのポワンカレ(Poincarré)及びモーレン(Maurain)はエクアドルに來りて測地學的事業に從ひ(一九〇五)、ザブィユ(H. Saville)は考古學的研究を爲しブール ジョワ(Bourgeois)遠征隊はキトー子午線の再調に從事せり(一九〇一—〇五)。

コロンビアはライス及びスチョベルが主に南部を調査し、ブッセンゴー(Boussingault)、カルステン(Karsten)、アンドレ、バスチアン、チエルマン等が通過せるあるも、域內地理不明の處多かりき。西コルヂレラと太平洋沿岸の平地の如き即ち之になほ、而して中央コルヂレラ地方はスタインハイル(E. Steinheil)(一八七一—七二)、クルブォー(J. N. Crevaux)はマグダレナを溯り、アンデスを越えグアビアレに依りてオリノコに達し(一八八〇)、シヨンク(Friedrich von Schenk)(一八七八—八一)、レーゲル(Friedrich Regel)(一八九六—九七)等の旅行なきに非ざるが之等は主としてメデリン(Medellin)及びマニザレス(Manizales)地方に赴けるのみ、イサ(Iça)河の水源に於ける東コルヂレラはクルブォー(Jules Crevaux)之を調査し(一八八九)、ヘットネル(A. Hettner)はボゴタとククタ(Cucuta)との間の山脈を調査し(一八八三—八四)、極北のサンタマルタのシエラネバダ(Sierra Nevada de Santa Marta)にはルクリッー(Élisée Reclus)(一八五五—五七)、シモンス(F. A. A. Simons)(一八七八—八〇)、ジーベルス(Wilhelm Sievers)(一八八六)等の旅行ありき。

ベネズエラは科學的探檢者の足跡を印せしこと少なく、ブセンゴー、カルステン、ゴエッチ、グリング(A. Goering)等を主なるものとす、其の後ジーベルス(W. Sievers)は第一回の旅行(一八八四—八五)にてメリダ(Merida)のコルヂレラを踏査し、第二回(一八九二—九三)に於てはコロ(Coro)、バルキシメト(Barquisimeto)中央ベネズエラ、フンボルト以來訪はれざりし東部等を旅行し、ベンドラート(J. A. Bendrat)も亦來訪したり。

—四四)を試みて地質河系動物植物、インヂアン、等を調査せしが、北西部には其の足跡を印せざりき、次でアップン(F. Appun)は東部に旅行し(一八四九)、ベネズエラ=ブラジル境界劃定委員はウラリコエラ(Uaricoera)、パダウイリ(Padauiry)、マラリ(Mararyi)、マフ(Mahu)、コチンゴ(Cotingo)、等を探査し(一八八〇—八二)、シャファンジョン(Chaffanjon)は西部に活動せり、此の外ブラウン(C. B. Brown)は一千八百七十五年よりグイヤナにあり、ホワットリー(Whitely)(一八八三)、ツルム(E. Thurm)(一八八四)のロライマ(Roraima)山に登れるあり、チンマーマン(Zimmermann)ロート(Loth)、マルチン(K. Martin)、カテ(H. ten Kate)、バフイ(Bakhuis)、カプレル(H. Kappler)、ヅボア(Dubois)の諸探檢者あり、クルブォー(Jules Crevaux)(一八七七—七八)はオヤポク(Oyapoc)、マロニ(Maroni)を調査し遂にツムク=フマク(Tumuc=Humac)山脈を横ぎりてアマゾナに出で(一八七七)クードロー(H. A. Coudreau)は第一回の旅行に於てリオブランコよりエセキボの水源に赴き、リオトロンベタス(Rio Trombetas)を經てツムク—フマクに登り(一八八七—八九)、第二回の旅行をオヤポクの上流地方に行へり(一八八九—九一)。

クードロー(Henri Anatole Coudreau)(1859—1899)はフランスクルニー實科師範學校の卒業生なり、カイイエンヌ中學に教官の職を來せし間(一八八一—九一)に數回の探檢を試みてフランス領グイヤナ、ブラジル領グイヤナ、佛伯の紛爭地を踏査し、パラ政廳に仕へて(一八九五)よりアマゾナス右岸の支流タパヒオス、ヒンク、トカンチンス—アラグアヤ及び左岸のイタカユナ、ヤムンダを探査し(一八九六—九八)、トロンベタス(Trombetas)の視察中に歿す、著書少なからず、就中リオブランコ、月山旅行(一八八六)、グイヤナ及びアマゾニアの探究(一八八七)、我がインヂアン(一八九二)、其の他若干の踏査報文あり、又フランス領グイヤナ全圖には佳評あり。

フランス=ブラジルの境界問題に關してはルブァー(Levat)はカルスベンヌ(Carevenne)上流地方の產金地を探り(一八九七—一九〇一)、カバルカンテ(F. A. Braga Cavalcante)はアラグアリ(Araguary)を調査せり。

ガルモー(Jean Galmot)はフランス領グイヤナに赴き、マナ(Mana)及びマロニ(Maroni)地方に產金地を調査し、グルイヒ(C. H. de Groeje)はスリナム第五回の探檢に赴き、ザイヤール(Saillard)はカロン(Caron)、トリポー(Tripot)、デルテイユ(Delteil)及びデュテルトル(Dutertre)と共にグイヤナの內部に赴き、ビーブ(C. William Beebe)はイギリス領グイヤナに到り、ハアンス(Hiberts de Haan)はスリナムの探査に當り、

ボバリウス(Karl Bovallius)はイレング(Ireng)の支流に於て其の大ナイアガラに讓らざる瀑布を發見し、レフロイニー(Refroigney)はカイイエンヌよりフランス領ギイヤナの内部に向ひ鐵道豫定線の調査を爲せり。

第四　オセアニア洲

西洋人が本洲の存在を確認するに至りしは他の諸洲に後れたるが、陸地に關する南北均衡主義に基づきて南、大陸の存在せざるべからざるは古來の豫想にして本洲發見期の一半は全く此の主義に依り海上の探檢に充てられ、一半は大陸若しくは島嶼に關する内部の精探に用ひられたり。

A.　海上探檢

島嶼部　即ち眞のオセアニア洲の發見は東方より來れる第一の世界週航者たるホルトガル人マガリアエンス(マガリアエンス)が一千五百二十一年サンパブロ(San Pablo)デロスチブロネス(de los Tiburones)、グアム(Guajam)等を發見せるに始まり、ロカ(Diego de Rocha)はカロリナ諸島中のラモリオルク(Lamoliork)(一五二五)をロアイ

ツ(Garcia Jofre de Loaysa)はバルトロメ(一五二六)を發見し、メネス(Jorge de Menes)はマラッカよりテルナテに赴かんとせし際、新ギネアに漂着し(一八二六)、次でサアベドラ(Alvaro de Saavedra)も同地の北岸に到りて南大陸の北尖端と想定し(一五二八)、尙ほカロリナ諸島の東部並にマーシャル諸島に達し(一五二九)、カロリナ諸島の西部を探りてパラウ(Palau)諸島を見(一五四二)、ビヤロボス(Lopez de Villalobos)はヒリピナスメキシコ間を旅行せし際、新ギネアの北岸の大部を望見したり(一五四四)、又エスパニア人のユルダニエタ(Urdaneta)は百二十五日間太平洋を始めて東向的に航行し(一五六五)、エスパニア人が始めてペルーよりヒリピナスに達せんと欲せし時に當り、カリアオ港を出發せるメンダニア(Alvaro Mendaña de Negra)はエリス(Ellice)諸島、ソロモン(Salomon)諸島を發見し(一五六八)、後に至りてマルケサス(Marquesas)諸島、トケラウ(Tokelau)群島中のプカプカ(Pukapuka)、オロセンガ(Olosenga)の二島、サンタクルス(Santa-Cruz)諸島の活火山たるチナコラ(Tinakora)を發見したり(一五九五)、而してメンダニアの歿せし際、大案針たりしホルトガル人ケイロス(Pedro Fernandez de Queiros)は代りて司

メンダニア

ケイロス

トルレース

令官と成りしも、探檢を續行することを得ずしてマニラに歸着し、熱心に南大陸の存在を說きたる結果、數年を經て再び三隻の船を率ひトルレース(Luis Vaez de Torrès)と共に同大陸發見の途に上ぼりしが新ヘブライヅ、タヒチ、等若干の島嶼を認めしに過ぎざりき(一六〇六)而して偶然離隊したるトルレースは新ギネア東部の南岸に近づき新海峽(トルレース海峽)を通過して新ギネアが島たるを明にせしも(一六〇六)、此の事實はマニラ政廳が秘せしを以て世に知られざりき。

先之エスパニア荒しを目的とせるイギリス人のドレーク(Sir Francis Drake)は第二の世界週航者たるべく太平洋を横ぎり(一五七八)次いでカプテンヂッシ(Thomas Cavendish)も週航を爲して製圖上に資する所ありしが一七八六)新航路の發見に焦慮せるオランダ人のルメール(J. Le Maire)及びシューテン(Mouters Shouten)はフツナ(Futuna)、ニウア(Niua)、ニウアフ(Niuafu)新メクレンブルグ(Neumecklenburg)等の島嶼を發見し、新ギネアの北岸全部を探りたり(一六一六)。

ヤンス

一千六百五年ヤンス(Willem Jansz)はヅイフケン(Duyfken)號に乘じ新ギネアの南岸に赴き、之より始めてオーストラリア大陸に於けるヨーク半島の西岸に達し、南大陸發見の榮を擔ひたり、又一千六百十一年以來オランダの帆船はケープ、ジャバ間を航行せしを以て、デルクハルトグス(Dirk Hartogsz)のエンドラハツランド(Eendrachtsland)(一六一六)、クラエス(Haewick Claesz)のモンテベロ Monte Bello)諸島(一六一八)、フートマン(Houtman)及びデデル(Jacob d'Edel)のエデルランド(Edelland)に於けるが如く(一六一九)、オーストラリアの西岸に漂着せしもの少なからず、カルステンス(Jan Carsteusz)はカルペンタリア灣の東岸を探査したるが(一六二三)、ヌイツ(Pieter Nuytz)は東經百三十三度以南の南岸(一六二七)及びドキツランド(De Witts Land)(一六二八)を、ペルザート(Pelsart)はエンドラハツランド、エデルランド間の海岸を認めしが「リーウキン」(Leeuwin)號は既に一千六百二十二年に於て大陸の南西端を知れり、此の後ピエテルス(Pieter Pietersz)はアルネムランド(Arnhemland)幷にファンヂーメンスランド(Vandiemenszland)を發見せるを以て(一六三六)、一千六百四十年頃オーストラリア西岸の大部は世に知られたり、而して第十七世期の最優最良の航海者なりと

の評あるタスマンは北太平洋(一六三九)、日本近海(一六四〇)、カンボヂア方面(一六四二)等の航察に加はりしが、東印度總督ファンヂーメンの命に依り新に探査を試みファンヂーメンランドの南端を發見し、始めてニゥージーランドに接觸したる後、トンガ、フィジー、ザロモン、等の諸島を經てバタビアに戻りて新大地が南緯四十四度を越えざることを確め(一六四二——四三)、新ギネアと新大地との離續を明にするを得ずして僅に大地の北部に於けるタスマンランド(Tasmanland)を發見したり(一六四四)。

一千六百四十四年より一千七百六十四年に至る間に於てはダンピエー(William Dampier)がビスマルク群島の新ブリテン島と新ギネアとの間に連續なきを知り(一六九九)、オランダ船、ギールフィンク(Geelvink)號が新ギネアの北西岸部に於て一大灣を發見し、ロッゲフィーン(Jacob Roggeveen)がイースター島幷にサモア諸島を發見したるが如き類なきに非ざるも比較的靜穩なりしが、之れ次に來るべき大活動の準備期たるに外ならざりき。

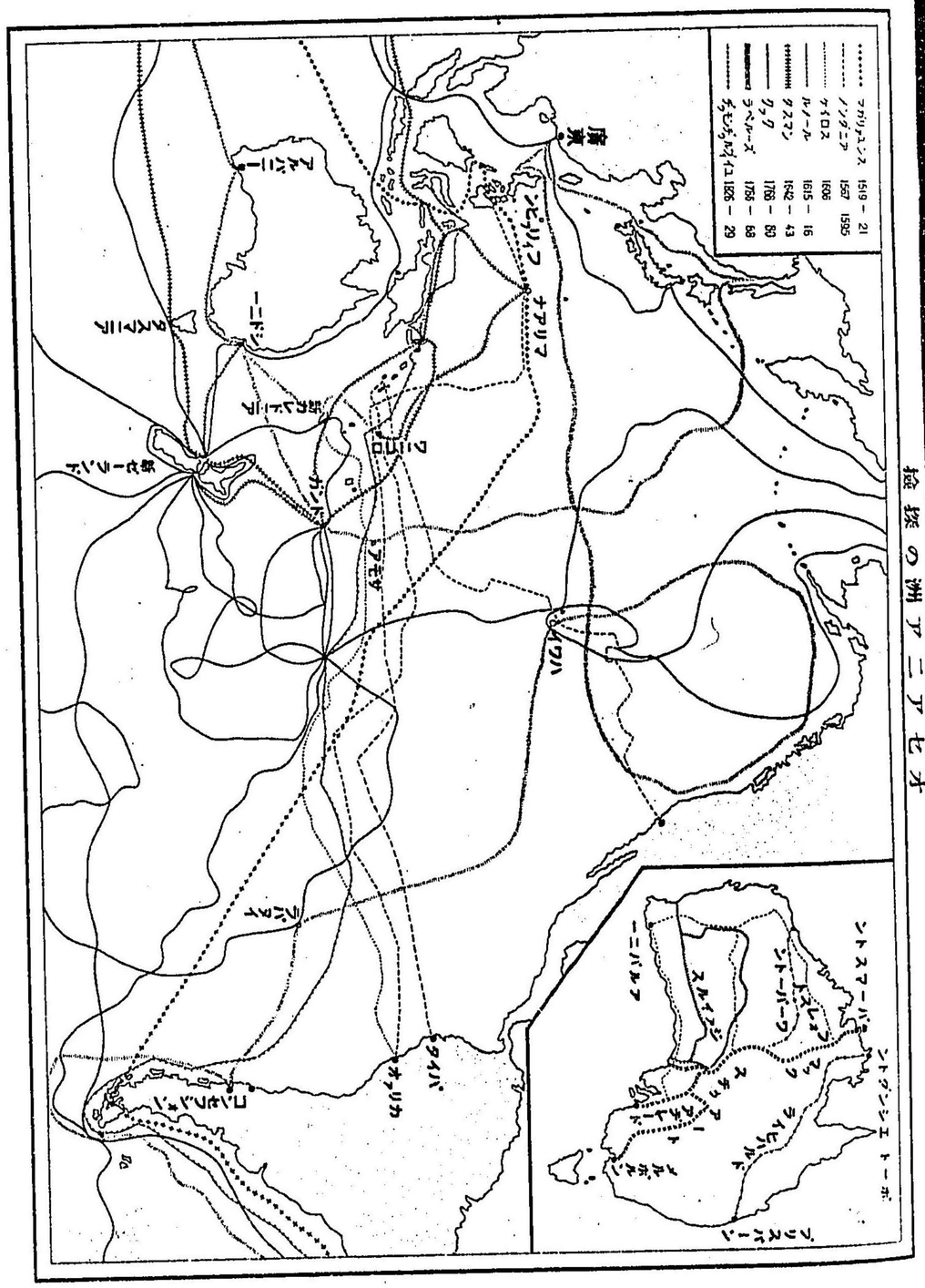
一千七百四十四年より一千七百七十九年までの間に於て、バイロン(John Byron)はジルバート(Gilbert)諸島を訪ひ(一七六四——六五)、ワリス(Samuel Wallis)はサモア、ジルバート、マーシャルの諸島を探りて殊に經度の測定に盡力し(一七六六——六八)、カートレット(Philipp Carteret)はサンタクルス(Santa Cruz)諸島に赴き(一七六七)、フランスの第一世界週航者たる名譽を擔ふべきブーゲンブイユ(Louis Antoine de Bougainville)も亦タヒチ、サモア、新ヘブライヅ、ルイジアード(Louisiade)、ザロモン、新ギネア、等の諸島を旅行したり(一七六六——六九)。

ブーゲンブイユ

從來ブーゲンブイユを以てフランスの第一世界週航者と認めしが、ソルデンシェルドも其の著書「ペリプルス」(Periplus)中にマガリアエンス以後二百年間の週航を十二回と爲して別に異論を唱へざりしに、近來の研究に依れば一千七百十一年乃至二十年の十ヶ年間に十一隻のフランス船は週航を遂げたるが故に一千五百二十年乃至一千七百二十年の二世期間に於ける週航を二十三回に增加せざるべからず、而して此等十一回の週航の多くは西向的に實行せられしが、「ラコンテッスドポンシアルトレン」(la Comtesse-de-Pontchartrain)號は一千七百十四年乃至一千七百十七年を以て東向的に週航を遂げたるを以て船長ドランジュリー(Jean-Baptiste Forgeais de Langerie)のクゥクが第二回の旅行(一七七二——七五)の際に東向的週航を爲したるに比すれば半世期以前に周航を完了したるの名譽を有せざるからず。

クックは三回の旅行に依りてクック海峡、オーストラリアの東岸、クリスマス諸島、サンドヰチ諸島、等を發見し、ダルリンプル(A. Dalrymple)が熱心に主張せし南大陸の存在説に打擊を與へ、太平洋の狀況を明にして探檢史に一新期を劃せしめたり。

クック(James Cook) (1728—1779)はイギリスの人にしてヨークシアイアのマートン(Marton)に生れたり、雜貨商の丁稚としてスタイセス(Staithes)にありしが、海員たるを以て自己に適せりと悟り石炭船の見習と成り、次いで海軍に入り(一七五五)、七年の役にはケベックの包圍に參加したり、其後マーキュリー」(Mercury)號の長と成りてアメリカに赴き、セントローレンス水道の測量を試み、一七五九)次いでニューハウンドランド及びラブドル沿岸の測量官たりき(一七六二)數年を經て副艦長に任ぜられ「エンデボア」(Endeavour)號を指揮して金星通過觀測隊をタヒチ島に伴ひたるが、此の第一旅行(一七六八——七一)に於てはツアアイ(Tuhuai)群島のルルツ(Ruratu)島を見出し(七一六八)ニューヂーランドの北島並に南島を週航して兩島の間に海峡(クック海峡)の在存するを知り(一七六九——七〇)、西に向ひて航行し南緯三十四度二十二分に於て始めて南大陸の東岸に到り、四月二十八日を以てボタニー(Botany)灣に上陸を試みたり、爾より海岸に沿ひて北上し、今のクックタウンの地に寄り船舶を修繕し、滯留すること二ヶ月、大礁堡を横ぎり(八月十三日)、再び陸岸に近づき(八月十五日)、トルレース海峡を通過し、カルペンタ


マゲリュエンス 1519 — 21
ノンダニア 1567 1595
ケイロス 1606
ルノール 1615 — 16
タスマン 1642 — 43
クック 1769 — 70
ラペルーズ 1785 — 88
チモシュ、ダ、イエロ 1826 — 29
ナアリマ
ニューギニア
ニューブリテン
ニューアイルランド
ニューカレドニア
ニューヘブリデス
ニューカレドニア
ニューカレドニア
ニューカレドニア

リア灣、バタビアを經て一千七百七十一年六月十一日イギリスに歸着せり。

一千七百七十一年八月小艦長に進み、翌年七月十三日を以て第二回旅行(一七七二——七五)の途に就けり、此の行二船より成り「レゾリヅー シオン」(Resolution)號は自ら指揮せるも「アドベンチュア」(Adventure)號はタイールノー(Tobias Fourneaux)に委れ、博物家フォルスター(Forster)父子も乘込みたり、而して南極圏を西より東に進み、ニヅージーランドにて長期の滯在を爲せるが、本旅行に於てはクック諸島(一七七三)、新カレドニア島(一七七四)を發見したる外、トンガ諸島、イースター島、マルキーズ諸島、新ヘブライヅ諸島、ビチー諸島を訪ひしが、其の効果は第一回に及ぶ能はず、イギリスに歸れるの年八月九日を以て艦長(Captain)と成れり。

第三回旅行(一七七六——七九)は一千七百七十六年七月を以て始まる「レゾリヅー シオン」號は自ら之を率ひたるが「アスカバリー」號はクラーク(Charles Clerke)の指揮に屬せしめたり、翌年ファンアーメンスランドのアドベンチュア(Adventure)灣に入り、ニヅージーランド、タヒチを訪ひ、クック諸島のマンガイア(Mangaia)島並にアチウ(Atiu)島、赤道の北に於けるクリスマス(Christmas)島を發見し、一千七百七十八年一月十八日始めてサンドヰチ即ちハワイ群島に達し、轉じて北アメリカの西岸四十五度以上を探り、ベーリング海峽より北極洋に入りしも、北緯七〇度四四分に於て氷山に遮られ、前進する能はずしてハワイに歸還し、冬籠を爲さんとせしに不幸にして土人の毒手に懸りたり、時に一千七百七十九年二月十四日なりき。

クックの第二回旅行中フールノーはタスマニアの東岸を探檢し、フールノー諸島を發見せしも(一七七三)、タスマニアが島なるを知らざりしことマリオン(Marion)(一七七二)と同樣なりき。

今やオーストラリア大陸の海岸にして全く知られざるは其の南岸の東部南東岸にしてタスマニアの北岸も未だ發見せられざりき、彼のバス(George Bass)は大陸の南端キルソン岬より西の方エスターンポート(Western Port)に達し(一七九八)、ハミルトン(Hamilton)はエスターンポートよりフールノー諸島に航海せしも、タスマニアの島性を決定せるは同地を週航せるバス幷にフリンダース(Matthew Flinders)の功なりき(一七九八——九九)。

島嶼に就きてはラペルーズ(J. F. La Pérouse)がオーストラリアの東岸に接觸し(一七八八)、ワニコロに於て破船したるの後、ダントルカストー(d'Entrecasteaux)ありて新カレドニア、トンガ諸島、ルイジアード、ザロモン、アドミラルテーッの諸島、新ポンメルン、新ギネア、等を精査したり(一七九二——九三)。

大陸の南岸に就きて探檢する所ありてオーストラリアの形狀が全然知らるるに至りしは一千八百二年なるが、之はグラント、ムレー、ボーデン、フリンダース、等の賜物なり、グラント(James Grant)はネルソン岬と東經百四十度十分との間を探り(一八〇〇)、ムレー(John Murray)はポートフィリップ(Port Philip)を發見し、南岸の探査を果し(一八〇一——〇二)、ボーデン(Baudin)は東經百三十八度五十八分と百四十度十分との間を航してエンカウンター(Encounter)灣、カンガルー島を、フリンダースは西岸、スペンサー(Spencer)灣、等を發見したり、而してキング(Philip Parker King)はヱッセル(Wessel)岬より北西岬までの北西岸(一八一七——二一)幷に大礁堤内の北東岸を檢し、ヰカム(Wickham)及びストークス(Stokes)は「ビーグル」(Beagle)號に乘じて南岸及び南東岸を航しバス海峽を探査したり(一八三七——四二)。

クルセンステルン(Krusenstern)はマルキーズ諸島(一八〇四)、コツェブエ(O. V. Kotzebue)はマーシャル及びハワイ群島(一八一五)、ベリングハウゼン(Bellinghausen)はパウモッツ(一八一九)を發見し、世界を一週(一八二六——二八)せるリットケ(F. P. Lütke)は無人島(小笠原)及びカロリナの精圖を造れり、フランス人にもフレイシ

ネー(Freycinet)の新ギネア、マリアナ、ハワイを訪ひ、デュペルレー(Duperrey)のソシエテ、バウモツ、ジルバート、マーシャル、新ギネア、新ブリテンを探れるあり(一八二三—二四)、イギリス人ビーチー(F. W. Beechey)は無人島及びバウモツ諸島に旅行し(一八二六)、

デュモンデュルビイユは二回の旅行に依りて最も有名なる航海者の列に入り、キルクス(Charles Wilkes)はバウモツ、タヒチ、サモア、トンガ、ピチー、ハワイ、ニュージーランド、ジルバート、等を詳細に探檢せり。

デュモンデュルビイユ(Jules Sébastian Dumont d'Urville)はフランスの人なり、ギリシア群島并に黑海に遠征し(一八一九—二〇)、「アストロラブ」(Astrolave)號に乘じて新ゼーランド、新ブリテン、新ギネア、マニコロ(Manikoro)、ビナー、マリアナを精探して第一回旅行(一八二六—二九)を終り、第二回旅行(一八三七—四〇)に於てはパウモツ、マルキーズ、ピチー、サロモン、新ゼーランド、新ギネア、等を尋れ、南極地方に及びたり、一千八百四十年末には少將と成り、一千八百四十二年にはパリー地學協會長たりき、著書にアストロラブ旅行及び南極旅行あり。

此の外、フィツロイ(Robert Fitzroy)の指揮せる「ビーグル」(Beagle)號(一八三三—三五)はダーウィン(Charles Darwin)を載せて諸島の博物學的探究并に有名なる

デュルビイユ

珊瑚礁成因說の確立に與りて力ありしが、第十九世期の後半に及びて各國政府は南洋に探險船を派して科學的探究を始めたり、即ち、エステルライヒのノバラ(Novara)遠征はウルゼル(Wüllerstorf=Urbair)の下に(一八五七)、イギリスの「チャレンジャー」(Challenger)號はナールス(Sir George Nares)の下に(一八七二—七六)、ドイツの「ガゼル」(Gazelle)號はシュライニッツ(Freiherren von Schleinitz)の下に(一八七五—七六)、各、此の地方に活動し、アメリカ船「タスカロラ」(Tuscarora)、イギリス船「エジェリア」(Egeria)、「ダート」(Dart)、「ペングイン」(Penguin)、「ヲーターヰチ」(Waterwitch)、ドイツ船「メヱ」(Möwe)、等も海洋に關して少なからざる知識を與へたり。

チャレンジャー號はナールスを指揮官に戴きトムソン(Sir Wyville Thomson)、チザード(Tizard)、ムーレー(John Murray)、バチナン(Buchanan)、スーム(Willemoes=Suhm)、等の乘込む所と成り、一千八百七十二年十二月より一八百七十六年五月まで世界の各方面に航行して海水の溫度及び比重、海流、深海の動植物に關する海洋學的調査に從事せるがオセアニア洲に於てはオーストラリアの東岸、ニュージーランド、ビチー、新ギネア、アドミラルテーツ、ハワイ、タヒチ、等を訪ひ、「チャレンジャー」號の報告はトムソン及びムーレーの指揮の下に一千八百八十二年より一千八百九十五年までに約五十卷を出版せられたり、實に海洋學の基礎を爲せり。

上來記述せる所は海上探檢に關するものなるが大陸並に島嶼の內部には尙ほ幾多の探檢を要するものあり、從來大陸に就きては多數の探檢旅行者が熱誠、氣力、忍耐、學識、等に依りて其の梗概を世に紹介せしも未だ足跡の及ばざる處少なからざるのみならず、詳細を知悉し得ざる所あるは亦止むを得ずと云ふべきか。

B. 陸上探檢

大陸部 大陸內部の探檢はイギリスがボタニー灣の謫流的殖民地を創建せし時(一七八八)より始まり當初はブリューマウンテンスの山越を試みるに過ぎざりしが、マッカリー(Macquarie)總督(一八一〇—二一)の奬勵に基づきて探檢に志ざすものあるに至れり、カレー(Calley)はブリューマウンテンス(Blue Mountains)を踏査し(一八一三)、エバンス(Evans)はマッカリー(Macquarie)及びラクラン(Lachlan)の兩河を發見し(一八一三)、オクスリー(Oxley)は該兩河を調査して地圖を製し(一八一七—一八)、ヒューム(Hume)、ホーエル(Howell)、ヒルトン(Hilton)等はマランビヂー(Murrumbidgee)河を發見し、スタート(Charles Sturt)はダーリング(Darling)河及びムーレー(Murray)を發見し、ミッチェル(Thomas Mitchell)は四回の探査を試みて兩河を明瞭ならしめたりき。

ミッチェル

ミッチェル(Sir Thomas Livingstone Mitchell)(1792—1855)はイギリスの人なり、十六歲にして軍人と成り、一千八百二十六年には少佐と成り、一千八百二十八年測量官として新南エールスに派遣せられ、後(一八四一)中佐に進みしが最も著名なる事業は東方より大陸の內部を探れることなり、第一旅行(一八三一—三五)に於てはダーリング河の支流に就きて研究し、第二旅行(一八三五)にてはダーリング河畔のブールク(Bourke)に達し、第三旅行(一八三六)にてはムーレー以南の地に旅行し、今のビクトリア州にオーストラリアフエリクス(Australia felix)の名を與へ、此の地にて高百四十米突にまで達する「ユカリプタス」樹を見たり而して第四の旅行(一八四五)にてはダーリング最北の支流たるワレゴ(Warrego)の外、バルコ(Barco)河并にフイツロイ(Fitzroy)河の上流等を發見したり、著書に三遠征、第四遠征、等あり。

エイヤー

次に一千八百三十六年を以て建設せられし南オーストラリア殖民地の首府アデレードより出發せるものを記さんか、先登たるエイヤー(Edward John Eyre)はフリンダース(Flinders)諸山、トレンス(Torrens)湖、エイヤー湖、スペンサー灣、エイリア(Eyria)半島の北に於けるゴーラー(Gauler)山脈等を探究せるが、更

に新旅行を企てストリーキー(Streaky)灣より南岸即ちオーストラリア大灣の海岸に沿ひ辛苦多き旅程に依り遂にアルバニー(Albany)に達するを得たり、(一八四〇—四一)、一年を隔ててフロムス(Fromes)は同名の湖をフリンダース山の東麓に發見せり、而してスターート(Sturts)が率ゐたる探檢隊がアデレードを發して北東に進み、スタンリー、グレー(Grey)、フリンダース、等の山岳地方を旅行し、クーパー(Cooper)河を發見せしより(一八四四)、湖沼地方以南の探査を試みたるもの多かりしが、トレンス湖、エイヤー湖、スチュアート山脈、ゲードナー(Gaidner)湖地方に赴きしマクヅアルスチュアート最名あり(一八五九)。

西部より進めるものに就きて記せばパース(Perth)、アルバニー(Albany)の建設(一八二九)後、近傍の探査始まりしが殊にダール(Dale)はスワン(Swan)河の上流地方にバンニスター(Bannister)はパースより陸路アルバニーに達せり(一八三〇)、其の後ロー(Roe)(一八三六—一八四八)レフロイ(Lefroy)(一八四二)、ハーパー(Harper)、クラークソン(Clarkson)、デムスター(Dempster)(一八六一)、レフロイ、エドワーズ(Edward)、ロビンソン(Robinson)(一八六三)、ハント(Hunt)(一八六四)、デムスター兄弟(一八六五)、等の旅行あり、西岸の北部を探れるものにグレー(Sir George Grey)(一八三七)あり、大陸の西部より北部に亘る地を探査したるグレゴリー(Gregory)(一八四七—六一)あり、オースチン(Robert Austin)が同名の湖を發見するあり(一八五四)。

グレゴリー(Gregory)にオーガスタス(A. C. Gregory)、トーマス(F.-T. Gregory)、ヘンリー(H.-C. Gregory)の兄弟三人あり、前後十四ヶ年(一八四八—六一)に亘る旅行を爲して大陸の西部、北西部及び北部を探査したり、トーマスはマーチソン河の北に進み、ビクトリア河を發見し、カルペンタリア灣の南方を經てモーアトン灣に出で(一八五五—五六)、マーチソンの中流を探明し(一八五七)、更にネルソン山、リヨン河、ガスコイン河地方に旅行し(一八五八)、フォルテスク河に到り、又ユールの沿岸に起伏多きも灌漑の便ある肥沃の地の存するを發見し、ドグレー河方面にありてはマクファーソン山に登りたり(一八六一)、オーガスタスはハルクー、グーパーストルゼルキ、等　諸河を探査し(一八五八)、ヘンリーはパースの南東に於ける地方を精査したり(一八四八—四九)。

大陸横斷旅行に就きてはクインスランドのモーアトン(Moreton)、フィツロイを經てカルペンタリア灣の西岸、ローパー(Roper)河に達し(一八四四)、後ニューカッスルより出發しコグーン(Cogoon)の畔に於けるマクファーソン(Macphersons)ステーション)より其の行く所を知られざる(一八四六—?)ライヒハルト(Ludwig Le-

ichhardt)を以て始めとす、而して第二回はバーク之を企てバーク河を經てカルペンタリア灣に達し(一八六一)、マッキンレー(Mackinley)(一八六一——六二)、ランズボロー(Landsborogwh)、ヲーカー(Walker)、スチュアート(一八六二)、マキンタイヤー(Mac Intyre)(一八六四——六六)等相次いで南北の通過を實行したり。

バーク(Robert O'Hara Burke)(1820—186)はアイルランドの人にしてオーストラリア軍ビクトリア殖民地の警察等に職を奉じたり、一千八百六十年ヰルス(Wills)と共にメルボーンを發しバーク河を發見しフリンダース河の分水嶺を經て一千八百六十一年一月二十日カルペンタリア灣岸に達せるが、歸途食料の欠乏に依りて命を失へり。

バーク

スチュアート(John Mac Donall Stuart)(1815—1866)はスコットランドの人なり、スタート(Sturt)に伴はれ南オーストラリアに旅行したり(一八五八——五九)、第一旅行(一八六〇)に於てはエイヤー湖の南岸よりフィンク(Finke)河、マクドナル、レイノルド(Reynold)の兩山脈を經て南緯十九度に進みしが、土人に逼まられて止むを得ず歸還し、第二旅行(一八六一)を企ててアシバートン(Ashburton)山脈以北に進まんとしたり而して荒地の爲に妨げられしも更に風せず、第三旅行(一八六二)の途に上り復エイヤー湖の四に出でスタンゲエース(Stangways)、ローパー(Roper)兩河の平地を過ぎり遂に北四の方チャンバース(Chambers)灣に達して始めて其の目的を果せり、著書にオーストラリア横斷あり。

スチュアート

スチュアートの旅行後殖民地政府は大陸横斷電線を敷設し(一八七〇——七一)、一千八百七十年以來探檢の目的は一變して一層實用的と成り、大陸が供呈すべき富源を探究するに至りしが、横斷電線の驛地殊にアリススプリングス(Alice Springs)は西方オーストラリア探檢隊の根據地と成れり、而してジャイルス(E. Giles)は一千八百七十二年に於てエイヤー湖に通ずる一大「クリーク」たるフィンク(Finke)河の沿岸を探檢して海拔二百四米突の地に一大鹹湖即ちアマデウス(Amadens)湖を發見し翌年ジョス(William Gosse)等は東經百二十六度に進みしが、ジャイルスは東經百二十五度に達せり(一八七三——七四)。

大陸縱貫旅行に就きては大佐ワーバートン(P. E. Warburton)は第一回を實行したり(一八七三)、該探檢隊はアリススプリングスを發し、駱駝を使役して「スピニフェクス」(Spinifex)(俗にヤマアラシ草と云ふ)以外に植物なく又水なくして諸處に砂丘の存在する南回歸線下の不毛の地を千辛萬苦の間に通過したる後、グレー河に出でて僅に目的を達するを得たりき、次いでフォレスト(John Forrest)あ

り、チャンピオン(Champion)灣を發しマーチソン河に從ひ南緯二十八度下のピーク(Peake)に於て大電線に達し西より東に横斷せるものの先登者たりき(一八七四)。

ピーター・バートン(Peter Egerton Warburton)(1813—1889)はイングランド人にして印度軍の士官と成り、アデレードの警視長と成り(一八五七——六七)、一千八百五十七年以來トレンス湖、エイヤー洲附近の地を探りしが遂にオーストラリアを南東より北西に横斷せり(一八七二——七四)、著書あり、オーストラリア西方内部の横斷と云ふ。

ジョン・フォレスト(John Forrest)(1847—)は西オーストラリアのバンバリー(Bunbury)に生れし人にして北西オーストラリアのキンバーリー地方を探檢せるアレクサンダー・フォレストの兄弟なり、一千八百六十九年パースを出發し、バーリー(Barlee)、カレー(Carey)の兩鹹湖を過ぎて東經百二十二度半に達し、更に一千八百七十年パースより南岸に沿ひてアデレードに出で、後横斷旅行に成功せり、其の著にオーストラリア探檢あり。

ワーバートン、フォレストが旅行せる後、ジァイルスは第三回の縱貫旅行(一八七五)をフォレスト線の南に實施して、沙漠が南岸に達するを確めたるのみならず、フォレスト線の北に當る行途に依りて大電線に復歸したり、而して北西

スクラブ(Scrub)[オーストラリア]

スピニフェックス(Spinifex)[オーストラリア]

スクラブ

オーストラリアは乾生植物の發達に關し一中心を爲せり、東部の沿海地は稍〻濕潤なるを以て松杉科の「アラウカリア」(Araucaria) ナンヤウスギ (A. Cunninghamii) ヒロハノナンヤウスギ (A. Bidwillii)等 棕櫚科「リヰストニア」(Livistonia) ビラウ「蒲葵」(L. chinensis)の屬等の群生より成れる亞熱帶的森林存在し、南東の山地には羊齒を下草とせる「イウカリ」(Eucalyptus)の森林あるも、其の他は概して不毛的狀態の「スクラブ」(Scrub)を呈し、南東岸に於けるが如く稀にはイウカリの疎林を觀ることあり、スクラブは有針的灌木の叢叢にして數種あり、ハリアカシア(Acacia heterophylla)の「ビガロウ」(Bigalow)あり、鹽地にスピニフェックス(Spinifex)の叢生せる「サルトブッシ」(Saltbush)あり、イウカリプタス屬の小灌木より成る「マリースクラブ」(mallee scrub)あり。

スピニフェックス

スピニフェックス(Spinifex) (Festuca irrians) (禾本科)は俗に「ヤマアラシグサ」(Herba porc-épie)と云ひ、我が國に產する「トボシガラ」(F. parviglumis)、「キツネガヤ」(F. rematifiora)、等と同屬の草本なり、葉葉孰れも硬く、屈曲して鋭尖を呈す、オーストラリアの乾燥地に產し「スクラブ」を爲して探檢旅行者を苦しめしこと少なからず。

地方即ちキンバーリー(Kimberley)區に產金地の存するを認めたる(一八七九)アレクサンダー・フォレスト(Alexander Forrest)はフィツロイ河畔に灌漑の便ある好牧地を發見したり(一八八二)。

大電線に據れる第二流の探檢旅行者にはクキンスランドに達せしキンネック(Winneke)(一八八三)、アマデウス湖附近に於けるチートキンス(Tietkins)(一八八九)ありクキンスランドの南境よりカルペンタリア灣に到る地(一八八五—八六)、バーマーストン、アデレード間(一八八七—八八)、西オーストラリアの沙漠(一八九一—九二)等を調査せるリンドセイ(David Lindsay)あり、其の他、細目に亘れる旅行にフォンレンデンフェルド(Von Lendenfeld)のオーストラリアアルプの探究(一八八五—八六)、ホーネ(Horne)のアレクサンドラランドに於けるマックドンネル高地の踏査(一八九四)、カーネギー(Carnegie)の東西行途の連絡(一八九六—九七)、マウリス(Maurice)の大陸横斷(一九〇二)、グレゴリー(J. W. Gregory)のエイヤー流域の化石探求、ブロカム(F. S. Brockam)のキンバーリー地方旅行(一九〇二)等あり。

一千九百三年に於てエルス(L. Wells)は中部オーストラリアに旅行してペテルマン(Petermann)山脈及びアマデウス湖地方に金鑛の存在を知り、マン(Mann)山脈幷にトムキンソン(Tomkinson)山脈地方が牧場に適するを知りしが、次年に於てメストン(A. Meston)は北クキンスランドのベレンデンケル(Bellenden-Ker)山に登り、バークレー(Barclay)は豫定大陸横斷鐵道の終點たるウードナダッタ(Oodnadatta)より線路の豫測をスタート(Sturt)沙漠に試み(一九〇四——〇五)クラーチ(Klaatsch)は北クキンスランドの土人に就きて人類學的調査を行へり(一九〇四——〇五)、而して一千九百五年にはバセドフ(H. Basedow)の北領土の北西部に赴けるあり、ミハエルゼン(Michaelsen)及びハートマイヤー(Hartmeyer)が西オーストラリアのアルバニーより內部に入りて數百の生獸と四十九箇の貯藏箱とをヨーロッパに齎らせるあり。

一九〇六年西オーストラリア政府はカンニング(A. W. Canning)をして殖民地の北に於けるキンバーリーの好牧場と東部の不毛なる金鑛地との連絡を探求せしめたり、依て同人は東マーチソン(East Murchison)產金地のキルエン(Wilucu)を發し北東に向ひてナッベルー(Nabberoo)湖、チスアッポイントメント(Disappointment)湖及びゴドフレースタンク(Godfreys Tank)を過ぎりて北領土の境界に近きスタートクリーク(Sturt Creek)に至り、之よりホールスクリーク(Halls Creek)に達し、歸路は他の道を取れり、デービドソン(Allan. A. Davidson)は北領土に旅行しマーチソン(Murchison)及びダベンポート(Davenport)二山脈の關係幷にマクドナルド(Macdonald)山脈の北なる地方に就きて報告し、クラアチ(H. Klaatsch)はクキンスランドの北部殊にカルペンタリア灣、ベレンデンクル(Bellenden Ker)山脈、西オーストラリアのキンバーリー地方等に旅行し、ジャバに入り遂に北領土に至り尙ほ其の他の殖民地にも旅行する所あり、而してオーストラリア土人殊にマライとバブアとの關係に就きての從來の說は謬りにて土人は嘗て海を越えて來りしことなきを論ぜり。

一九〇七年シドニーに於けるオーストラリア博物館のヘドレー(Hedley)及びシドニー大學のテーロル(Taylor)はグックタウン(Cooktown)附近の大珊瑚礁を探檢し、キング(King)はオーストラリアの北西部なるグレヌリー(Glenely)ブリ

ンツレゲント(Prinzregent)兩河の地方に旅行して雨量多き好牧地并にダウトフル(Doubtful)灣岸に銅鑛を發見したり、

レッゲ(Legge)は兩度一九〇六—一九〇七タスマニアの北東部なるベンロモンド(Ben Lomond)山脈を調査せり、而して本山脈の南端に於ける一峰は海拔五〇一〇呎に及び島中の最高峰と稱せられしが、ギブリン(Giblin)及びピース(Piesse)の測量に從へば北緣に横はれるレッゲストール(Legge's Tor)なる一峰は五一〇〇呎乃至五二〇〇呎に達して前者より海拔大なりと云ふ。

島嶼部 島嶼部の探檢も亦概して不充分なり、左にパプア、メラネシア、新ゼーランドの沿岸諸島并にミクロネシア、ポリネシアの大洋島嶼に就きて記す所あらん。

パプア即新ギネアは其の發見(一五二六)の後、ベルンスタイン(Bernstein)、ヲリス(A. R. Wallace)、ローゼンベルヒ(Rosenberg)(一八六九—七一)等の旅行ありき、北岸にマクレー(J. Miklucko Maklay)(一八七一—七二)、ラフレー(Raffray)(一八七六—七七)、南岸にマクレー(一八七四)、チェスター(Chester)ありしが(一八七〇)殊にダルベルチー(d' Albertis)はフライ(Fly)河を航して始めて内部に入れり(一八七七—八)、其の後マイヤー(A. B. Meyer)(一八七三)、マクファーレン(Mac Farlane)(一八七五—七六)、シャルマー(Chalmer)及びジル(Gill)(一八七八—八〇)等の旅行なきに非ざるも、其の結果は未だ大ならず、一千八百八十二年フィンシ(Oskar Finsch)がキルヘルム帝領土の海岸を航行し、新ギネア會社の設立せられし後、彼はカイゼリンアウグスタ(Kaiserin Augusta)河を發見し(一八八五)、シュラーデル(Schrader)の遠征は西の方東經百二十度に到達し、一千八百八十八年ツェーラー(H. Zeller)はフィニステール(Finisterre)山に登れり而して一千八百九十六年に至りてはタッペンベック(E. Tappenbeck)、ラウテルバハ(C. Lauterbach)、ケルスチング(Kersting)等はステファンスオルト(Stephansort)附近のエルツェン(Örtzen)山に登り、ヌル(Nurn)河の水源に赴き、一新河即ラム(Ramu)を下りて河口より二百粁の地に到り、一千八百九十八年には下流の地を探り、第三回旅行(一八九九—一九〇〇)をビスマルク山脈地方に試みて得る所多かりき、之より先エーレルス(O. to Ehlers)はフォン(Hnon)灣より本島の縱斷を企て(一八九五)、ヒース(Heath)河下流の地にて

グレゴーア

死せしも、オーエンスタンリー(Owenstanley)山脈の最高峰たるビクトリア山に登れる(一八八九)マックグレゴーア(Sir William Mac Gregor)は一千八百九十六年を以て本島の狹部を縱斷したり。

マックグレゴーア(Sir William Mac Gregor)(　　)はイギリスの人にしてイギリス領新ギネアの知事たりき。フライ(Fly)河を南緯五度二十五分まで溯り(一八九〇)海拔四千米突のビクトリア山(一八八九)并に海拔三千米突のユール(Yule)山に登り(一八九〇)、今のオランダ領ギネアにてモーアヘッド(Moorehead)河を發見し、更にプラリ(Purari)マンバレ(Mambare)兩河の發見を行ひ(一八九三—九四)、一千八百九十六年スクラチリー(Scratchley)山脈、オーエンスタンリー山脈を過ぎてボートモレスビーに出でたるが、一千八百九十八年には反對の方向に復た縱斷旅行を果せり、此の他尙ほ小旅行多く一千九百四年にもフライ河、アリス(Alice)河、ビクトルエマヌエル(Viktor Emanuel)山脈地方に至れり。

新ギネアの三部中最も不明なるオランダ領にも一千九百年後、多少の探査を試みたるものあり。ヰヒマン(A. Wichman)はジールフィンク灣附近を探査してマッククリュアー(Mac Clure)灣に注ぐワシアニ(Washiani)河畔、其の他にて石炭の包藏を發見し、ドイツ領に近き處にてセンタニ(Sentani)湖を、ジールフィンク灣の南方にてヤムル(Jamur)湖を發見せり(一九〇三)而してロシュモン(E. J. de Rochemont)はエトナ(Etna)灣より內部に進み(一九〇四—〇五)、ヂッセル(J. J. van Dissel)はオニン(Onin)半島地方に、ウースステルゼー(L. A. van Oosterzee)はジールフィンク灣の西岸地方に旅行せり(一九〇四)、又ヘルフェルデン(J. H. Hondius van Herwerden)はフレデリクヘンドリク(Frederik Hendrick)島の北に注げるヂゴル(Digol)河の下流を探査し南西岸を測量したり(一九〇五—〇六)。

オランダ領新ギネアの南西岸の背面即ちピサング(Pisang)灣とフリードリヒハインリヒ公島との間は從來全く不明なりしが、南及び北のウツムブエ(Uumbuwe)河は一九〇六年オランダ政府の汽船ファルク(Valk)號ありて河口より稍、深き內地まで探檢して海岸より直徑九十乃至九十五粁の內部即ち南河に於ては南緯五度十五分、東經百三十八度五十分、北河に於ては南緯四度五十二分、東經百三十八度四十四分に及び、南河に於ては汽船の溯ること八十粁、吃水一米突二の小汽船は尙ほ三十七粁の上流に溯りたるが、北河に於ては夫々九十八粁、三十四粁なりき。又ロレンツ(H. A. Lorents)の率ひたるオランダの遠

征隊は、ファルク號に依りて一九〇七年ウツムブエ湖航の終點まで達し、之より陸路稍、進入せしも食糧不足の爲め歸路に就き、ブラット(A. E. Pratt)はマククリヴアー(Mc. Clue)灣の東方なるファクファク(Fak-Fak)に趣き(一九〇六——〇七)、シヴレヒテル(R. Schlechter)は新ギネアに於ける「グタペルカ」及び「カウチック」調査に赴き、ブラウンロー(Brownlow)はバプアの一新族約二万人をドブ(Dobu)地方に於て發見し、シヴレヒテル遠征隊の隊員たるダムケーラー(W. C. Dammköhler)及びフレーリヒ(Fröhlich)はマルカム(Markham)河の一支に沿ひてクレトケ(Krätke)及びビスマルク山脈の麓に進み、ラム(Ramu)を過ぎて再びフリードリヒヘルムスハーフェンに歸れり。

南東部に就きてはグーセン(Goossen)、ダアム(Daam)、ブランデルホルスト(Brandenhorst)、ヘルドリング(Heldring)等ありて一九〇七年より翌年に亘りプリンツエスマリアンネ(Prinzesz-Marianne)街道、南は海、東はビアン(Bian)河、北はヂグル(Digul)河に至る間を探査したり。

ドイツ領に就きてはハール(Hall)は隣接するイギリス領に近き地方の產金地を調査せんが爲めワリア(Waria)河の谷を上りチェレ(Tschere)山に至りて踵を旋らし、ヒルシ(H. Hirschi)はマククリヴアー灣の南岸及びエトナ(Etna)灣に至る南西新ギネアの海岸地方を旅行せり、其の出發點はファクファク(Fak-Fak)にてサカル(Sakar)附近に於てカパウ(Kapau)半島を横ぎり、船に乘じてマククリヴアー灣に達し、幅十一粁、高四百米突に過ぎざる地峽を超えて、ギールフィンク(Geelvink)灣に沿へるカラワン(Karawan)に赴きたり、第二回には一九〇六年の三月より四月に亘りエトナ灣に沿ひて之を行へり、ヤムル(Jamur)湖の排水河たるオンバ(Ombe)は磯浪の爲め渡る能はず、トリトン(Triton)灣、カナクワラル-Kanak-Wallar)湖并にアルグニ(Argum)灣地方を旅行せり。

イギリス領新ギネアに於てモンクトン(C. A. W. Monkton)は重要なる旅行を爲せり、同人は一九〇六年の始めタマタクリーク(Tamatakriek)に沿へるイオマ(Ioma)より主山脈中のアルベルトエドワード山に赴き、チリマ(Tschirima)谷を經て歸り、アルベルトエドワードの最高峰に登りて海拔を四〇三五米突と定めたり、翌年山北に道を取りて本島を横ぎらんとし、英領の境界に沿ひて

ワリア(Waria)河を溯り山脈を超えてラケカム(Lakekamu)を下り、此の地方に於てバートン(F. R. Barton)に讓らざる探檢を爲せり、又ストロング(W. M. Strong)は海岸のポートモレスビー(Port Moresby)より北西に當れる地方及びユール(Yule)山に至る地方を探査せり。

メラネシア　ビスマルク群島、及ひサロモン(Salomon)諸島の北部に就きてはシュライニッツ(Schleinitz)の探檢(一八八七)、メーヱ(Möwe)號の測量(一八九五)等あるが、新メクレンブルグ島に赴けるものにブラウン(Brown)(一八八七)、ブファイル(Joachim Pfeil)(一八八八)、ハール(Hahl)(一九〇三)等あり、新メクレンブルグ島を探査せるはベーレント(Behrendt)(一九〇四)にして新ハンノーフェル島に旅行せるはヱルニケ(Wernicke)なり(一九〇四)、而してモーソン(D. Mawson)は新ヘブライヅ諸島に地質的旅行を試み(一九〇三)、新カレドニアに就きてベルナール(A. Bernard)(一八九四)、ラポルト(Laporte)(一九〇〇)等は詳細なる地圖を作れりメラネシア諸島中最探檢の行屆けるはピチーにして近年サルン(Sir Everard Im Thurn)はピチレブの内部に於ける山岳を經てシガトカ(Sigatoka)河口より反對の海岸に位するバー(Ba)まで旅行せり(一九〇五)。

ビスマルク諸島に就きてはブレンネケ(W. Brennecke)の新メクレンブルグ、新ハンノーフェル兩島間に於ける若干島及び新メクレンブルグ島を訪へるあり、クレメル(A. Krämer)も亦一九〇六—〇七年本諸島の人種を調査し、プラネット(Planet)號は新ハンノーフェル及びルフ(Luf)環礁を調査せるが、之よりドイツ殖民省はドイツ領サロモン諸島の測量を施行せんとし、一九〇八年アフリカ資金に依りザッペル(K. Sapper)、フリーデリチ(Friederici)等をして新メクレンブルグ、新ハンノーフェル、セントマチアス及びアドミラルテーツの諸島に地理及び人種の調査を爲さしめ、ドイツ海軍省も亦ビスマルク諸島に人種學探檢隊を送りき、其の引率者はステファン(Emil Stephan)にしてシュラギンハウゼン(Otto Schlaginhausen)、ワルデン(Edgar Walden)、シリング(R. Schisling)等一行に加はれり。

新ゼーランド　南島の探檢者にはホホステッテル(Hochstetter)、ハアスト(J. von Haast)(一八六〇—七〇)、レンデンフェルド(Lenderfeld)(一八八一—八六)、フィッグラルド(E. A. Fitzgerald)(一八九四—九五)、ハーペル(A. P. Harper)(一八九三—九五

あり、此の頃ヘクトル(Hector)は北島、ハミルトン(A. Hamilton)はマッカリー島の地質を調査せり、而して一千九百四年イギリスの海軍は東岬よりゲーブルエンド フォアランド(Gable-End-Foreland)に至る東岸(六十一哩)并にチリチリマタンギ(Tiri Tiri Matangi)よりタワラウニ(Tawarauni)岬に至るハウラキ(Hauraki)灣を調査し南島に於てもエストポート(Westport)、ブルラー(Buller)灣等を測量したり。

新ゼーランド地質調査所長ベル(James Mackintosh Bell)の南島カランガルア(Karangarua)河流域を調査し且つトワイン(Twain)コプランド(Copland)兩河の水源地方に横はれるドーグラス(Douglas)氷河及び其の東に於けるマックケロー(Mac Kerrow)氷河を探檢せるあり(一九〇七)新ゼーランド政廳はファル(Farr)統率の下にカメル(Campbel)、オークランド(Auckland)の兩島に植物調査隊を派遣したり。

第五　アフリカ洲

A. 暗黑時代

アフリカ洲の探檢は古來行はれざりしに非ざるも大に歩を進めしは實に近世のことなり、ヘロドートス(Herodotos)の記す所に從へば西紀前六百年頃フェニキアの船はエジプト王ネコ(Necho)の命を受けて東より西にアフリカを週航せりと云ふ、加之フェニキア人、カルタゴ人はアフリカの北西岸を探査しハンノ沿海航(Periple d'Hannon)に依れば西紀前四百六十五年と同四百五十年との間に於てカルタゴ人ハンノ(Hanno)なるものは西岸に大遠征を試みて北緯七度半のシエラレオネの海岸に達せしものの如し、後有名なるヘロドートスはエジプトに旅行して大に當地方を世に紹介し、エウドクソス(Eudoxos)(西紀前一一〇年頃)、ポリビウス(Polybius)(西紀前二一〇—一二五)、ヌミヂア王ジュバ(Juba)(西紀前五二—後一九)を經て、西紀前二十四年エリウスガルルス(Alius Gallus)は紅海岸を航し(西紀一四年頃)、此の頃よりローマ人にしてエチオピアに向ふもの少なからざりき、殊にネロ(Nero)のニール遠征隊は北緯凡そ九度に到着せしに似たり、此等の探檢はストラボン(Strabon)、プリニウス(Plinius)、メラ(Pomponius Mela)殊にプトレマイオス(Claudius Ptolemaios)の著書を見ば思ひ半に過

ヘロドトス

ハンノ

ぐるものあらん。

中世に至りてはアラビア人は北アフリカに侵入して熱心に宗教を傳へ商業を營み、東岸に於ては南回歸線を超えてコリエンテス(Corrientes)岬に達せしが、西岸に於てはカナリア諸島の對岸なるヌン(Nun)岬に及べり、而してアラビアの有名なる旅行家にはイスタフリ(Istachri)(第九世期)、マスヂ(Masudi)(第十世紀)、イブンハウカル(Ibu Haukal)(第十世期)、エドリシ(Edrisi)(第十二世期)、殊にタンジエル(Tanger)よりサハラを横斷してスーダンに達せるイブンバツター(Ibn Batutah)(第十四世期)等あり、アジア旅行を以て有名なるマルコポロもアビシニア、ソコトラ島等に關して少なからざる知識をヨーロッパ人に與へしかは第十四世期頃よりアフリカ地圖は稍〻實際に近きものと成れり。

イブンバツター

エシリケ

一千三百十八年以來リスボア經由ベネチア、ジェノバ及びフランドル間の商業發達し、カナリアの再發見(一三四一)、マデイラ、アソレスの諸島の發見あり一千三百八十三年ジョアン一世がポルトガル王の位に即きし後、アフリカ探檢史に一新期を見るに至れり、王の第四子ヘンリ、航海家(1394—1460)は大に航海を奬勵せしが、十有二年を經過してエアネス(Gil Eanez)は漸くボヒアドル岬を超え、一四三四)、ヂアス(Dinis Dias)はカーボベルデ(綠岬)に到り(一四四五)、ヘルナンデス(Alvaro Fernandez)はシエラレオネに達し(一四四六)、エンリケの死せし頃探檢船は未だ北緯約十二度のリオグランデを通航せしに過ぎずして進捗著しからざりき、ジョアン(João)二世其の遺志を繼ぎて鋭意航海を行はしめしがカン(Diego Cão)(一四八二—八六)は南緯二十一度四十八分のクロス(Cross)岬に達し、ヂアズ(Bartholomeu Diaz)は始めて暴風岬(後海路印度に達せらるるを望むありとて喜望岬と改む)を過ぎ(一四八七)、此の頃コビリアン(Pedro de Covilhão)はアビシニア以南ソファラ灣まで東岸を探檢せり。

カン

ヂアス

コビリアン

ジョアン二世に次ぎてポルトガル王となりしマノエル(Dom Manoel)は一千四百九十七年バスコ ダ ガマをして喜望岬と東岸の商業地との連絡を計らしめしがガマはアフリカの南端を迂回して印度のカリカト(Kalikut)に達し、アフリカの形狀とインドに通ずる海路とに決定を與へて探檢史上一新期を劃せしめたり。

ガマ

一千五百年より一千七百五十年頃まで徐々として內部の探究行はれしが、多くは充分なる計畫に基づかざりしを以て見るべき結果を與へず、一千七百八十八年に於てすら、海岸地方の外、エジプト、チュニジア、セネガンビア、ケープ殖民地等が稍、知られしのみにて何地(エジプト、セネガンビアを除けり)と雖も海岸より六百粁の地は知らるることなく、ケープ殖民地にては三百五十粁、西岸にては百粁に止まりき、而して第十七世期には宣教的旅行少なからざりしが、第十八世期に及びて殖民的學術的の探檢も行はれ、フランス人ダンヴィユ(d'Anville)の地圖(一七四九年)には大に進歩せるものありき、今第十八世期のアフリカ探檢者の主要なるものを記さんに、クルンプ(Pater Krump)は北アフリカの沙漠を横斷し、センナール(Sennar)を過ぎてアビシニアに入り(一七〇一—〇二)ニーブル(Carsten Niebuhr)はニール地方に旅行し(一七六一)スコットランドの人ブルース(James Bruce)はアビシニアに赴きセンナル、ニヴビアを經てエジプトに歸着し當洲に於ける第一の學術的探檢旅行を爲したり(一七六八—七三)フランス人アダンソン(Michel Adanson)はセネガンビアを探査して巨大なる植物「バオバブ」(Adansonia digitata)に其の名を殘したり(一七四九—五四)、又南アフリカにはコルベ(Peter Kolbe)スパルマン(Sparrmann)及びツンベルヒ(V. Thunberg)(一七七二—七六)ルヴァイヤン(François Levaillant)(一七八〇—八五)等ありき。

ブルース

B. 探檢時代

第十八世期は虛搆想設に係る大陸を探求するに汲々たりしも遂にクックの消極的解決に依りて事件は結了を告げたるか、第十九世期は現存せる暗黑大陸をして明界たらしめんと企圖して目的に近づきたり、一千七百八十八年を以てロンドンにアフリカ內部發見振興協會(Association for promoting the discovery of the interior part of Africa)(本會はクックが其の第一旅行に伴ひしサージオセフバンクス(Sir Joseph Banks)の主唱に依りて創立せられしが一千八百三十一年を以てロンドンの王國地學協會に合併したり)なるもの設立せられしが、本洲に於ける第十九世期の探檢事業は自ら五期に分かれ、第一期(一七八八—一八三〇)はニジェル問題の解決第二期(一八三〇—五〇)はニール及び南アフリカの探査、第三期(一八五〇—六二)はサハラ及びスーダンに於ける大旅行幷にニール及びザンベジーの探檢第四期(一八六二—七七)はコンゴ地方の踏査及び大西印度兩

洋間の連絡旅行、第五期(一八七七年以後今日に至る)は土地の精査と殖民事業とに充用せられたり。

第一期(一七八八——一八三〇)ニジェル河に就きては或はニール若しくはコンゴと連絡すと考へられ又内部の沼湖に終るとせられ、當時數説紛々たりしかば之を解決するの目的を以てバンクス(Sir Joseph Banks)、ブートン(Houghton)(一七九〇)、ワット(Watt)及びキンダーボットン(Winterbottom)等の旅行者出でスコットランド人ムンゴパーク(Mungo Park)は前(一七九五——九七)後(一八〇五)二回の旅行に依りてセゴ(Sego)附近にて久しく探索せられたるニジェル河に達し、次いでブルメンバハ(Blumenbach)、ホルネマン(Friedrich Hornemann)(一八〇〇——〇一)等の探査ありてライヒアルド(Reichard)の地圖(一八二〇)にはニジェルの彎曲をして殆ど眞に近からしむるに至れり、而してヨーロッパが平和に歸せし後、イギリス人は復た熱心にニジェル問題に注意しリチー(Ritchie)、リョン(Lyon)はスーダンに向ひて大商隊を派し、チャーデ湖に就きて精細なる知識を得、クラッパートン(Clapperton)、デナム(Denham)及びアウドニー(Oudney)は始めてサハラを經て

ムンゴパーク

チャーデ湖に達せしが(一八二二——二四)、デナムは同湖に注入するシャリを以てニジェルの流末と認め、クラッパートンはアウドニーを伴ひてカノ及びソコトを訪ひしが黄金岸のボルタ河を以てニジェルの下流なりと主張せり、而してクラッパートンは第二回の旅行中ソコトに於て歿(一八二六)したるも僕ランダー(Lander)はヨルバに於てニジェルに達し之を下だりて河口がベニン灣に存在することを確めたり(一八三〇)。

ランダー(Richard Lemon Lander)(1804—1834)はイギリスの人にしてコーンチール(Cornwall)のツルロ(Truro)に生る、製圖を業とせしがコルブルーク(Colebrook)の僕としてケープ殖民地に往き(一八二三—二四)、クラッパートン(Clapperton)に伴はれて西アフリカに赴き(一八二五——二七)、弟ジョン(John Lander)(1807—1833)と共に二回(一八三〇——三一、一八三二——三四)ニジェルを探檢したり、著書にクラッパートンの遠征、ニジェルの流路及び終末探檢遠征誌等あり。

ランダー

上記の外フランスの人モイアン(Gaspar Mollien)はセネガル及びガンビアの上流を調査し、イギリス人ライン(Laing)がチンブクッを訪ひたる後(一八二五)、フランス人カイイエー(René Caillié)は西岸より同處に達し(一八二八)、マグレブを經て歸國せるあり、斯の如くにしてニジェル問題は一千八百三十年頃一段

落を告げしがニール問題、南部アフリカ内部の踏査、等尚未決のもの少なからざりき。

第二期（一八三〇—五〇）　ニール河の探究はエジプトに於けるフランスの遠征に依りて端緒を開き（一七九八—一八〇一）、副王モハメッドアリ（Mohamed Ali）（一八〇五—四八）はニールの中流以上を知悉せんと欲し遠征隊を派遣せしこと數回に及びしが、フランス人カイヨー（Caillaud）は青白兩ニールの合流點に達して白ニールの本流たるべきを提言し（一八二一）、探檢隊の根據地たるべきハルツームは建設せられ（一八二三）數年を經てロンドンのアフリカ協會より派遣せられたるベルフォンヅ（Adolf Linant of Bellefonds）は北緯十三度二十四分の地點に到達して白ニールの水源は大淡水湖なるべきを豫報したり（一八二七）、然るにベルフォンヅは此等の大湖の所在地を北緯七度附近とせしに拘らずモハメッドアリが派出せる遠征隊は六度半（一八四〇）、四度四十二分（一八四一）等の地點に到りしも浮草の障碍（Sedd）の前に失望するの外なかりき、此の間に於てアビシニアのカッファに水源を探るべしと主張せるダバッヂー（d' Abbadie）あり、ソバットを溯るべしと提言せしチンネ（Tinné）夫人ありし水源は西方にありてバールエルガザルは本流なるべしと唱ふるものもありしが、結局白ニールを以て本流とするの説が大に勢力を失ひしは事實にして、僅にミアニ（Miani）が三度三十四分に達せしあるのみ（一八六〇）。

此の頃アビシニア地方に旅行せるものにクレンベルヒ（Chrenberg）、リッペル（Eduard Rüppell）（一八三一—三四）、ダバヂー（d' Abbadie）兄弟（一八三七—四八）、フェレー（Ferret）及びガルニエー（Galnier）（一八三九—四三）、コンブ（Combes）及びタミジエー（Tamisier）（一八三五—三六）、ピーク（Peke）（一八四〇—四三）、ルフェーブル（Lefebvre）（一八三九—四二）、殊にクラプ（Krapf）（一八三七—四二）等あり。

フランスのアルジェリア占領幷に、リチャードソン（James Richardson）の北アフリカ旅行（一八四五—四六）等は此の地方の事情をして明瞭ならしむるの因と成りたり。

南アフリカはアフリカ協會の行動せざりし處にしてバロー（John Barrow）リヒテンスタイン（Heinrich Lichtenstein）（一八〇三—〇五）の旅行ありし後、ケー

ブ協會の建設(一八三四)、イギリス人に追はれたるブーア人の漂泊ありて之より大なる發展を爲し、スミス(Sir Andrew Smith)は該協會より派遣せられて(一八三五)、リンポポ河地方に至り、アレキサンダー(James Alexander)は今日のドイツ領に入りしが(一八三六——三七)、南アフリカ探檢に特筆すべきことは一千八百四十九年リビングストンに至りて始めて之を見たり。

ホルトガルは南部アフリカの東岸にモサンビク、西岸にアンゴラを有せしが、ペレイラ(Pereira)(一七九六)なるものはザンベジ河畔のテテ(Tete)を發し、バングエオロ(Bangweolo)湖、メル(Meru)湖を訪ひ、別にホルトガル人にしてアンゴラよりルンダ(Lunda)地方に旅行せるものあり、此の如くにしてザンベジ河口よりコンゴの水源、ルンダ地方を經てアンゴラに出づる南アフリカ横斷旅行は一千八百十四年を以て完成せられしも、其の世に知られたるは三十年の後(一八四三——四五)なりき、又イギリス領及びドイツ領東アフリカ地方にもクーリー(Cooley)(一八四五)、エルハルト(Erehardt)等の旅行ありしが殊にクラップ及びレブマンは赤道附近にて白雪を頂けるケニア山(一八四三)、キリマヌヂァロ山を發見せり(一八四八)。

クラップ(Johan Ludwig Krapf) (1810—1881)はドイツの產にしてイギリス教の宣教師なり、神父イセンベルヒ(Isenberg)と共に南アビシニア、シオア及びガルラを旅行し(一八三九——四二)、東アフリカのモンバス附近に宣教部を設け(一八四三)たる後、同僚のレブマン(Rebmann)を伴ひて同處を出發し(一八六四)、內部の未知の地に旅行して(一八四七——五二)ヌヤ湖井にケニア山及びキリマヌヂァロ山を發見したり、東アフリカ旅行、東アフリカ六國辭彙等の著作あり。

第三期 (一八五〇——六二) 本期間にありては一面サハラ及びスーダンに關する知識の發達を見しが、他方にありてはニール及びザンベジの兩流域に關する探査に大進捗を來たしたり。

フランス人がアルジェリアの攻略に成功するや、イギリス人の注意はスーダン方面に向けられしを以て先に北アフリカに旅行を試みたるジェームスリチァードソンに委ぬるに大探檢の司令を以てせしに、遠征の目的をして全然學術的と爲し優越なる參加者をドイツに求めてオーフェルヱヒ(Overweg)とバルト(Barth)とを得たり、リチァードソン探檢隊が途に上りし(一八五〇)より僅

に一年にして司令の逝去(一八五一)あり、尙ほ一年を經過するや否やにしてオーフェルヱヒも歿せしが、卓絶せる忍耐力と觀察力とに依れるバルトは獨立單行して遂に大成功を觀るに至れり。

バルト(Heinrich Barth)(1821—1865)はハンブルヴに生る、言語學を研究したる後、有名のリッテルに就きて地理學を勝究し、『古代コリント(Korinthos)の通商』を著作したり、アルジェリア、チュニジア、トリポリア、エジプト、シリア、小アジア、ギリシア、等を旅行(一八四五——四八)して考古學に資する所ありしが同國人オーフェルヱヒ(Overweg)と共にリチアードソンの遠征隊に加はりトリポリを出立し(一八五〇)、フェザンを經て永知の地たるアイル(Air)に到り、リチアードソンの逝去(一八五一)に拘らず進みてボルヌ及びアダマワを探査しオーフェルヱヒの歿するや(一八五二)、意を決して未だ探檢を經たること殆ど之れなき西スーダン方面に大旅行を試みたり、ジンデル、カシナ、等を經て大河に達し、チンブクツに滯在(一八五三——五四)すること一年に近く、音信を絶つこと二年以上に達したるが、歸途に就きてボルヌに出でし際バルトの搜索に赴きたるフオーゲルに出會しニジェル河に沿ひてクーカに入りジンデルを經てヨーロッパに歸着したり(一八五五)、著書に地中海沿岸地方漂遊、北部及中部アフリカに於ける旅行發見、等あり、地圖、歷史、土俗、博物、等に資すること極めて多かりしが、報文の載する所實に該博にして變化に富み而も眞價に豐なる他に類例を見ること稀なりとす。

フォーゲル(Eduard Vogel)はドイツの天文學者なり、バルトを搜索するを目的としてボルヌに來り(一八五四)、クーカの經度を訂正しチャーデ湖の海拔を測り、ジンデルに赴きしが、クーカに戻り、ヤコバを經てベヌエに到り(一八五五)、東スーダンの探査を試みんとして、ニール方面に向ひし後、踪跡不明と成りしが、ワダイのウアラに於て土人の毒手に罹れり(一八五六)と後に知れたり、而してフォーゲルの搜索に赴きしビュルマン(Moritz von Bürmann)も亦同人と運命を同じうしたり(一八六三)、ロルフス(Gerhard Rohlfs)はサハラを越えてベヌエ河に到りニジェルとの合流點までを豫察し、ギネア灣上のラゴスに達したり(一八六五——六七)、ナハチガル(Gustav Nachtigal)はトリポリよりフェザンに出で未だヨーロッパ人の足跡を印せざりしチベスチの山地を精査し、チャーデ湖、シアリ河方面にありては北緯九度までを豫察し、ワダイ、ダルフルを經てエジプトに歸來したり(一八六九——七四)、フレゲル(Flegel)はベヌエ河地方幷にアダマワ方面を探査し(一八七九　八五)、レンツ(Oskar Lenz)はマグレブよりサハラを越えてチンブクツに到れり(一八八〇)、又一千八百五十四年以後に於て

フランス人もアルジェリアサハラを精探せしがデュブェイリエー(Henri Duveyrier)の旅行は稍、著しかりき(一八五九——六一)。

ロルフス

ロルフス(Friedrich Gerhard Rohlfs)(1831—1896)はドイツの人なり、軍醫としてアルジェリアに赴き(一八五五——六〇)、マロッコ、タフィレー(Tabilet)(一八六〇——六二)、ツアト(Tuat)(一八六四)を探檢し、トリポリよりチャーデ湖、ボルヌ、マンダラ(Mandara)、ソコト、ベヌエ、ヨルバ(Yoruba)を經てラゴス(Lagos)に出で(一八六五——六六)、アビシニア(一八六六)、トリポリ、エジプト間の泉地(一八六八)、リビア沙漠(一八七三——七四)、ソクナ(Sokna)及びクフラ(Kufra)の泉地(一八七八)を訪ひ、其の後ザンジバルのドイツ總領事たりき(一八八四——八五)、著書にマロッコ旅行、トリポリよりアレクサンドリア、アフリカ横斷等あり。

次にニール及び大湖の問題に就きて記さんにニールの本流は青ニール或はバールエルガザルなるべしとの說高かりし際、バートン(Richard Burton)及びスピーク(John Hanning Speke)の兩人は一千八百五十七年東アフリカのバガモヨ附近を發し、タンガンイカ湖畔のウジジ(Udjidji)に向ひアラビア人より北方に一大湖のあるを聞きてスピークは之が探査を行はんと欲し遂にピクトリア湖の南岸に達したり(一八五八)、而してスピークは本湖とニールとの關係を知らんが爲にザンジバルを出發し(一八六〇)、該湖の西を經て湖北に出でニールの水源は決定せられたり(一八六二)と報せしめたり。

スピーク

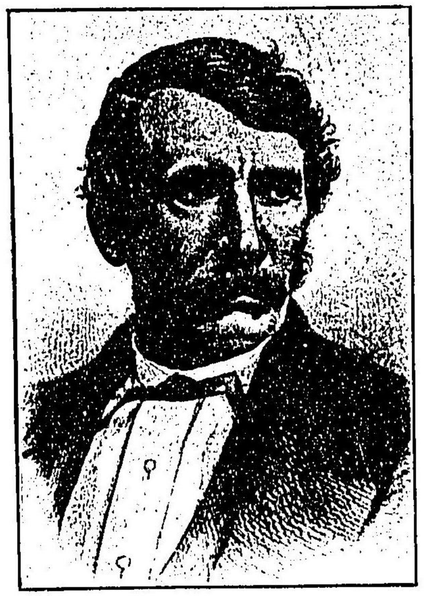
スピーク(John Hanning Speke)(1827—1864)はイギリスの人なり、印度に於て軍事并に學術に關する職務を奉じたる後、バートンに伴はれて大湖地方に旅行し(一八五七——五八)、タンガンイカ湖の存在を認め更にグラント(Grant)と共にニールがリンポン(Rinpon)瀑布と成りてピクトリア湖より出づるを確め(一八六〇)、ファウエラ(Fauera)とアルベルト湖との間に於ける地方を調査し、ゴンドコロ(Gondokoro)に出でニール河域の南北兩路の連絡を行ひ(一八六一——六三)、二回の旅行に於てピクトリア湖及びニールの主源たるカゲラ(Kagera)即ちアレクサンドラニール(Alexandra Nile)を發見し以て有史以來の疑問を解決せり、著書あり「ニール水源發見誌」と云ふ。

スピーク、等がゴンドコロに至りし時ニールに第二の水源たる湖沼の存するを耳にせしが、該地に於てスピーク、等に會せる北來のベーカー(Samuel White Baker)は之が發見を試みんとし、一千八百六十四年を以てアルベルト湖岸に達し、ニールがマグンゴ(Magungo)附近にて同湖に注ぐを見たり、而してアルベルト湖の水がニールと成るを知りしはゲッシ(Gessi)(一八七六)の功にし

て、スタンリー、マソン(Mason)(一八七七)等の踏査も大に此の大湖地方の事情を明らかにせり、上記の外ムンチゲル(Werner Munziger)、ホイグラン(Theodor von Heuglin)、シャワインフルト(Georg Schweinfurth)、プリュイスネール(Pruyssenaere)等の探檢者の名も亦記憶すべきものなるが、就中シャワインフルトはニアム＝ニアム(Niam=Niam)地方を世に紹介し、其の博物的旅行は一大効益と稱すべし(一八六八——七一)、又一千八百六十二年より一千八百八十四年に至る間に印度洋より内部に進めるもの少なからず、デケン(Karl Klaus von der Decken)の如きはキリマヌヂアロ山の海拔四千三百米突の地に達せり。

ニジェル、ニール兩河の探査に就きては既に述べたる所あるが、水誌上の一問題にして尙不明に屬するものあり、之をザンベジ河とす、同河流域の調査ヌガミ(Ngami)湖の發見、南アフリカ横斷先登者として最有名なるはリビングストンなりとす、先之ホルトガルの商人ポルト(Silva Porto)なるものベンゲラ(Benguella)より出發しザンベジ河とバングエオロ湖との間を進み、シン(Schire)を經て東岸に達せしことあるも(一八五二——五四)、地理學上何等の効果をも

スタンリー (Stanley)



リヴィングストン (Livingstone)

ノルデンシェルド
(N.-E.-A. Nordenskjöld)

ナンセン (Fridjof Nansen)

リビングストン

興へざりき。

リビングストン(David Livingstone)(1813—1873)はイギリスの人にしてグラスゴーの近傍ブランタイヤ(Blantyre)に生れたり、始め醫師たりしが後宣教師として南アフリカのベチュアナランドに至り(一八四〇——四九)、ヌガミ湖を發見し(一八四九)、次いでヌガミとザンベゾとの間に進し(一八五〇)、ザンベジの上流に沿へるセシェケ(Seschcke)に進みし(一八五一)、眞の探檢旅行としてリアンベイ(Liambey)の湖航の終點を極め(一八五三)、ゲロロ(Dilolo)湖を過ぎりてコンゴの支流たるカサイ(Kassai)の水源を探り、一千八百五十四年五月の末、四海岸のロアンダ(Loanda)のサンベオロに出でたり(一八五一——五四)、之よりアフリカの東海岸に出でんと欲して往路と同一の地方を旅行しリニヤンチ(Linyanti)よりザンベゾを下りビクトリア瀑(一八五五)を下り高地を横ぎりてテテ(Tete)を經、遂に一千八百五十六年五月二十六日を以てキリマネ(Kilimane)に達し、其の目的を遂げたり、第二の旅行に於て政府の遠征隊を導きてザンベジ河及びシン(Shire)河に達し、シルワ(Shirwa)、ヌヤサ(Nyassa)の兩湖を發見し(一八五八——五九)、第三の旅行に於てロアヤ(Rovuma)河の谷(一八六六)、ナアンベジ(Chambezi)(一八六七)を精探し、ヨエロ(Moero)(一八六七)、バンゲエオロ(一八六八)の兩湖を發見し、大湖タンガンイカに達し(一八六九)南緯四度の地ヌヤンゲエ(Nyangue)に到りて(一八七〇)大河を見たるもコンゴなるべしとの疑を起さざりしが如し、ウジジ(Ujiji)にてスタンリーの救助を受けし後(一八七一)共にタンガンイカ湖畔を再探しウニアンエンベ(Unyanyembe)にて袂を分ち

(一八七二)、バンゲエオロ湖畔に歸りて赤痢に罹りてチタンボ(Chitambo)にて死亡し(一八七三)、エストミンスターアベーに葬らる、南アフリカに於ける宣教的旅行、ザンベジ遠征談の著あり、博愛主義の人としては大に黑奴廢止に力を致し、探檢者としては南アフリカの內部を世に紹介し氏の如きは實に世界有數の人傑と稱すべし。

第四期 (一八六二—七七) 本期に於てはコンゴ河の探檢を主とすれども印度大西兩洋間の連絡旅行にも見るべきものあり。

リビングストンがヌガミ湖を發見せし後、南西アフリカの探檢は活潑となり、ガルトン(Francis Galton)、アンダーソン(Andersson)、エルキッチ(Welwitsch)、マジャール(Magyar)、ロイヅ(E. Lloyds)及びアウレル(Aurel)、其の他の旅行者あり、レアルダ コスタ レアル(da Costa Leal)はクネネ(Kunene)の河口を發見し(一八五四)、グリーン(Green)、スムツ(Smuts)、ハーン(Hahn)等之を精査せり(一八六四—六六)、又リンポポ河地方にはマウハ(Karl Mauch)、エルスキネ(Erskine)等の調査ありしが、エルトン(Elton)は始めて其の全部を航行したり(一八七〇)而してマウハはトランスヴァールの圖を製し鑛床を調査し(一八六五—六八)、鑛產地を發見し(一八七一—七二)、先に、ベチュアナランド、オランイエ殖民地に到れるフリチ(Gustav Fritsch)(一八六四—六六)の後にガザランド(Gasaland)に赴けるエルスキネ(一八七二—七五)も少なからざる効果を遺こせり。

コンゴ河に就きて河口は第十五世紀に於てポルトガル人のディエゴカンが發見せし所なるが、爾來探査を試みしもの少なく、イギリス人タッキー(Tuckey)が河口より三百粁の地にあるイサンジラ(Isangila)に到り(一八一六)、右岸にフランス人のヂュシャイユ(du Chaillu)の二回(一八五五—五九、一八六二—六三)の旅行、ザブォルニァンドブラザ(Savorgnan de Brazza)のオゴエの探査(一八七六—七八)等ありて左岸に於てはバスチアン(Adolf Bastian)(一八五七)、ポッゲ(Paul Pogge)(一八六七)等ありしに過ぎずしてリビングストンがザンベジ河第二回の遠征を試みし時遙か北方に北流する大河(ルアプラ)あるを聞き或はコンゴの上流ならんと豫想せしことありき、リビングストンの死後、東より西に始めて中部アフリカを橫斷せるカメロンはタンガンイカ湖がルアラバ(Lualaba)河と通ずるを知りしも同河は尙ほニールの河系に屬するものと考へたり。

カメロン(Verney Lovett Cameron)(1844—)はイギリスの人なり、一千八百七十三年王

國地學協會よりリビングストン探索隊長に選ばれたり、バガモヨ(Bagamoyo)より出發し(一八七三)、ウニヤンヱンベ(Unyanyembe)にてリビングストンの死體に遇ひタンガンイカ湖に進めり、然るに間もなく二人の補佐が沒せしを以て獨力遠征隊を指揮せざるべからざることと成れり、タンガンイカ湖を遡航しルクガ河を發見し、ウルア(Urua)、南ルンダ(Lunda)を經てベンゲラ、ロアンダに出でて(一八七五)、眞の東西的横斷に先登の名を得たり、後に小ジア及びペルシアにて鐵道の測量を行ひ(一八七八)又黄金岸に旅行を試み(一八八二)、奴隷反對説を唱へ、著書にアフリカ横斷、等あり。

カメロンがベンゲラに到着するに先ち、**スタンリー**は再びアフリカ探檢の、途に就き、東岸のバガモヨ(一八七四)より復たウジジに達し、更にヌヤングヱ(Nyangwe)に進み(一八七六)、之より幾多の激流を過ぎて遂にコンゴの下流ボマに降れり(一八七七)。

スタンリー(Sir Henry Morton Stanley)(1840—1904)はイギリスの人なり、本名をジオンラウランヅ(John Rowlands)と云ふ、ニウーオルリーンスに赴きてスタンリーなる商人に雇用せられアメリカ合衆國に歸化し海軍に職を奉ぜしことあり、新聞通信員としてトルコに赴きニウーヨークヘラルドの通信員としてイギリスのアビシニア遠征隊に從ひ(一八六八)、ヘラルドよりリビングストンの探索を命ぜらるるや(一八六九)、ザンジバルより出立してウジジに至り目的を果して歸還せり(一八七一——七二)、次いで復たヘラルド及びロンドンテレグラフより中央アフリカに派遣の命を受けしを以て(一八七四)海岸を後にしてビクトリアヌヤンザを發見し(一八七五)、アルベルトヌヤンザ、タンガンイカを探檢し、アルベルトエドワード湖を發見し、ルアラバ(Lualaba)(コンゴ)河を下だり(一八七六——七七)以てタンガンイカの西に於ける大水系を探明したり而して萬國アフリカ協會よりコンゴ地方の發達を計るが爲に特派せられ(一八七九)、コンゴ獨立國の建設に貢献し、或はベルリンに於けるコンゴ會議(一八八四——八五)に出席し、又エミンパシア(Emin Pasha)即ちシュナイツヤル(Dr. Schneitzer)救助の爲にアフリカに赴きて彼と共にニールより海岸に出で(一八八九)、翌年イギリスに歸れり、著書に余は如何にしてリビングストンを發見せしか、暗黑大陸旅行、コンゴ及びコンゴ自由國の建設、最暗アフリカ、奴隷及びアフリカに於ける奴隷賣買、等あり。

第五期(一八七七以後) 本期はアフリカ大陸の內部に就きて梗概を了得せし後を受けたるを以て精査の期と成り利用の時に移りたり、アフリカに於ける新發見の事實がヨーロッパに響き渡るや各國は意を傾注するに至りしが、殊に奴隷、其の蠻風談は大に感動せしめ、遂にベルジックの王レオポルド二世は一千八百七十六年九月ブラッセルに政治家、博愛家、地理家、探檢家、等の集會を開催して遂に萬國アフリカ協會(Association Internationale Africaine)即ち

A.I.A.の創立を見るに至れり。

該會は亦遠アフリカ探檢を奬勵し、利源及び經營を調査し、驛站、市場、城塞等を設置するにありき、然るに各國の利益は均等なるを得ざるが故に協同して事に當ることを極めて困難にして殊に資金上の關係は永く本會をして持續せしむる能はざりき、然るに斯會の派遣に係る遠征隊の報告に依れば列强の所領殖民地間に就きて境界、其の他の重要事項の協定すべき事實の存すること明確と成りたればベルリンの公會(Conférence de Berlin)は開かれ(一八八四の十一月——一八八五の二月)貿易、航河殊に領土獲得に關する諸件を協定するに至りたるが、ドイツ人は盛に後國主義(Theorie de l'Hinterland)を唱へたり、爾來多少の紛議起りしも一千八百九十年以後に於て數回の協商行はれて領土の境界等は漸次に確定せられたり。

スタンリーの旅行後に於てコンゴ地方にベルジック王を主權者に戴ける中立國即ちコンゴ獨立國(Etat Indépendant du Congo)の創立ありしが、ベルリンの公會は之を是認したるを以て各國の探檢熱を惹起し、爭ひて領土の擴張を圖りし結果、奇異粗雜なる行動を敢てせしが、暫時にして常態に歸りて順序ある觀測、探檢施され、其の他純然たる學術的旅行もありて地理學の所領を發展せしめしこと蓋し大なるものありき。

コンゴ　コンゴ獨立國の創立せらるるや、スタンリーは再び當地方に來りて驛站の設置、河流の專有等に從事し、キスマンは七年間(一八八〇——八六)に三回の旅行を試み、左岸の支流に就て研究する所多く頗る効績を擧げたりき。

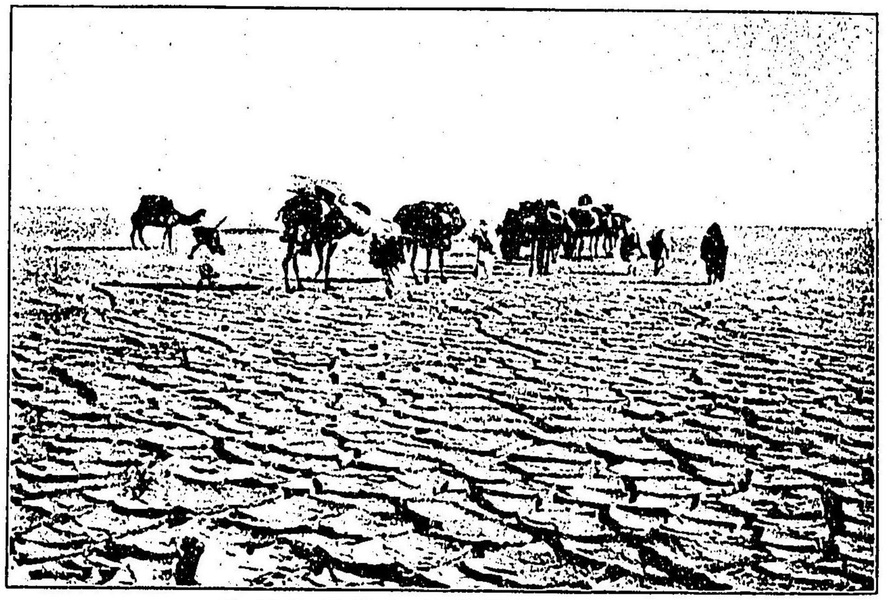
井スマン(Herrmann von Wissman)(1853—1905)はドイツの人なり、ポッケに伴はれてアンゴラに赴き(一八八〇)、カサイ(Kassai)河とルルア(Lulua)河との合點に近きルブク(Lnbuku)に到り、ヌヤンゲエを過ぎ、ザンジバルに出で單身大陸を橫斷せり(一八八二)、其の後ベルジック王レオポルド二世が送れる大遠征隊の長として再びルブクを訪ひ(一八八四)ルルアブルグ(Luluaburg)、ルエボ(Luebo)の驛站を建て短艇に乘じてカサイ河を下り同河が航河たるべきを示せり(一八八五)而して更にルブクより出立し(一八八六)、ツアパ(Tshuapa)、ルロンゴ(Lulongo)、ロマミ(Lomami)の水源を發見するを得ざりしもヌヤンゲエに達し、ルアラバ(Lualaba)に從ひてルクガに至り、タンガンイカ、ヌヤサの道を取りて東岸に達せり(一八八七)又ドイツ帝室委員としてはブシリ(Bushiri)を戴けるアラビア人の亂を平定し、ヌヤサ、タンガンイカの兩湖を經てビクトリア湖に二隻の汽船を運ぶの目論を遂げたりき(一八九〇——九三)、アフリカの內部、ドイツ旗の下にアフリカ橫斷、等の著書あり。

右岸の地に就きてはロシア人のユンケル(wilhelm Junker)はヒルン(Welle)河上流の地を探査し(一八八〇——八六)同河とウバンギ河の一源流なることは

グレンフェル(Grenfell)(一八八四——八五)幷にファンゲール(von Gele)(一八九〇——九一)に依りて査明せられ、スタンリーはアルヒミの大森林を探檢し(一八八八)、ルメール(Lemaire)の遠征はカサイ、コンゴ及びザンベジの水源地を踏査したりき(一九〇〇)。

サブォル ニアンド ブラザの創建に係るフランス領コンゴ方面にはスタンリーブールの滸にブラザヴィイユの建設(一八八〇)ありしより以來バレー(Ballay)フールノー(Fournean)(一八八九)、クランペル(Paul Ciampel)(一八八九—九一)、メイストル(Maistre)(一八九二)、ミゾン(Mizon)(一八九〇—九三)等の探檢を重ねしが、フランス領アフリカ調査所(Comité de l'Afrique Française)は此等の探檢を擁護したり(一八九〇)、又ドブラザの指揮の下にショレー(Cholet)及びフールノー(Fourneau)はサンガ(Sangha)に(一八九〇)、ポネル(Ponel)は上流サンガを(一八九二)探査し此の外にペルドリゼー(Perdrizet)(一八九五——九八)、リオタール(Liotard)(一八九六)の探査等ありき。

チャーデ クランペルの歿後(一八九一)、ミゾンはヨラに達し(一八九〇——九



砂泥の剝製と南買隊[リビア沙漠]

草原と運搬隊[東アフリカ]

二)、メイストルはチァーデに赴き(一八九二)、シァリに到り、ロゴネを越え、ベヌエを經て(一八九三)ニジェルに戻りたり、ジァンチー(Gentil)はチァーデ湖に注水する河流の可航性を研究し(一八九五—九七)、ザハラ經過のフーロー=ラミー(Fourean Lamy)(一八九八—一九〇〇)、スーダンより來るべきジョアラン(Joalland)の二隊にチァーデ湖畔に於て會すべくコンゴ方面を出でしが、ブルトンネ(Bretonnet)及びベアーグル(Béhagle)の横死せるを聞き、之が復讐を謀り三隊の聯合を待ちて遂に怨敵ラバー(Rabah)を打取りて地方の平和を回復し得たり(一九〇〇)、先之マルシァン(Marchana)はウバンギとニールとの連絡を目的として途に上りファショダ(Fachoda)に出でしがニールの上流アビシニア等を經て歸國したり(一八九五—九八)。

東アフリカ　ソマリランド地方へはヴスメ(Baudi di Vesme)、カンデオ(Candeo)、ロベッチ(Briochetti=Robecchi)、ボッテゴ(Vittorio Bottego)(一八九二)等のイタリア人並にアメリカ人スミス(Donaldson Smith)(一八九四—九五)等の旅行あり、アビシニアに關してはカベンヂシ(Cavendish)(一八九六—九七)、マクドナルド(Macdonald)

オースチン(Austin)、ゴルビー(Wolby)幷にチェチ(Ceechi)及びチアリニ(Chiarini)(一八七六—八二)、トラヴルシ(Travers)(一八八五)ボレリ(Borelli)(一八八五—八八)等あり高峰ケニア及びキリマヌヂァロに就きて登山を試みしもの少なからざりしが、マイヤー(Hans Meyer)は始めてキリマヌヂァロの最高點を極め(一八八九)、更に登山して高さを六千十米突と測定したり(一八九八)、又エステルライヒ探檢隊のテレキ(Teleki)及びフーネル(Höhnel)はケニアの雪線に到達するを得ざりしが(一八八七)、マッキンダー(Mackinder)は成功してケニアの海拔は五千二百米突以上ならざることを報じたり(一八九九)。

西アフリカ 當方面に就きてはフランス人の活動盛なりき、ガリエニはニジェルに二回(一八七九、一八八一)の探査を試みしが、カロン(Caron)及びルフォール(Lefort)(一八八七)、ジェーム(Jaime)(一八八九)も豫察に從事し、ビイヨー(Vuillot)及びブリゼー(Blizet)はチンブクツの西に若干の新湖を發見し(一八九四)、フランスギネアとシエラレオネとの境界を確定する際にニジェルの水源は確定せられ(一八九五)、ツーテ(Toutée)少佐はダホメイよりブッサの瀑流及びチビフィルカ(Tibi Firca)に旅行し(一八九四—九五)、ウールスト(Hourst)大尉はニジェルの中流幷に下流を探明したり(一八九六)。

ビンジェー(Binger)はニジェル河と象牙岸との間に有益なる旅行(一八八七—八九)を遂げコン山脈は消滅して高臺の地と變じ、ニジェルは流域の幾部を沿岸流コモエ、ブォルタ等に讓ることと成り、其の後數回の探査行はれてニジェル河の大彎曲の內部を詳にするを得、モンテイユ(Monteil)はバンマコとセイ(Bay)との間を踏査したり(一八九二)、又沿岸の森林地方にはマルシァンの二回の旅行(一八九一—九二、一八九三—九四)あり、オスタン(Hostains)及びドローヌ(d'Ollone)の探査あり(一八九八—一九〇〇)、ニジェル以東、チァーデ湖に至る間にはハルテルト(Hartert)、スタウヂンゲル(Staudinger)(一八八六—八七)、ロビンソン(Robinson)及びラリス(Wallace)等の旅行ありしが、ドイツ領のカメロンにはステッチン(Stettin)(一八九三)、パッサルゲ(Passarge)及びユヒトリツ(V. Uchtritz)、ケルンハイブ(Quernheim)(一八九七)等の探檢ありき。

サハラ フラッテー(Flatters)大佐の遠征が不幸にして終焉を告げし以來(一

八八一)、モンテイユ(Monteil)はチャーデ湖よりトリポリアに趨きて沙漠を横斷し(一八九二)、此の外旅行者少なからざりしが就中最も著しきはフーロー(Foureau)の探檢旅行(一八八八四—九六)なりとす。

フーロー(Ferdinand Foureau)(1850—)はアルジェリアサハラに旅行し、ウアルグラ(Ouargla)に至りフォー(Fau)と共にエドリル(Oued-Rir)地方を發見し(一八七八)、サハラの科學的研究に身を委れ、エルグ(Erg)及びアマダドチンゲール(Hamaan de Tinghert)を經て南アルジェリアとタシリドアザエー(Tasili de Azdier)との間を探檢し更にサハラを横斷しウアルグ(Ouargh)よりウンデー(Zinder)を經てチャーデ湖に達せり(一八九八——一九〇)、有益なる著書數多し。

マグレブ　**フーコー**(de Foucault)は非常なる辛苦を嘗めて爲し得たる趣味多き旅行(一八八三——八四)をアトラスの南面に試み、**トムソン**(Thomson)はマグレブの南部及びアトラス山脈を地質的及び地理的に觀察し(一八八八)、其の他にラマルチニエール(La Martinière)、**フッシャー**(Th. Fischer)等の旅行ありしが殊にスゴンザック(Segonzac)(一八九九——一九〇一)はリフ(Rif)に關する事項を報道したり。

南アフリカ　ポルトガル人は西岸のアンゴラと東岸のモサンビクとを連絡せしめんと欲し、**ピント**(Serpa Pinto)はクバンゴを探査し、ザンベジをビクトリア瀑布まで溯りトランスヴァールに到り(一八七八—七九)、**カペロ**(Brito Capello)はイブェンス(Ivens)と共にモサメデースを出發し(一八八四)、シレ、ヌヤッサ地方に於けるルアブラ、ザンベジ間の未知の地を縱横に踏査して延長三千粁の旅程を了へてキリマネルに着し(一八八五)たるが尙ほ**アンドラダ**(Paiva de Andrada)の征旅(一八八五——八七)も記するに足れり、此の外にイギリス人又はドイツ人が實行したる探檢はザンベジ、ヌヤッサ間の地、ザンベジの南并にカラハリ及びナマランドの不毛地に關せり。

マダガスカル　本島の地理的知識に就きては**アルフレッド**、**グランディエー**(Alfred Grandier)(一八六五—六九)の呈供に基づけるものに多きが、宣教師**リッテンベルヒ**(Rütenberg)は北部を通過し(一八七八)、**カター**(Catat)、**メイストル**(Maistre)及び**フーカール**(Foucart)は東岸并にタナナリブの南東方面を探り(一八八九——九一)、**ゴーチエー**(E. Gautier)は二回の旅行(一八八九—九二、一八九六—九九)に殆ど六年を費して中

部幷に西部を踏破し、南部の地にはバスタール(Bastard)(一八九九)、ギーヨーム、グランヂエー(Guillaume Grandier)等の往訪ありたり。

第二十世期　前期の續に過ぎざるも探査愈、繁く愈、詳しく各方面に亘りて狀況復雜を極むるも、要するに補充補足的にして地圖の改良、事實の精査を旨とし驚天動地的の新發見は今後出現することなかるべし、而して一千七百八十八年以來遂行したる事業に就きては偉大の勤勞を費したるのみならず、自然若しくは人爲に基づける困厄に對し幾多の生命を犧牲に供せしが、効果空しからずしてアフリカ洲をして明界たらしむる上に於て殆ど目的に達したりと云ふべきか。

一千九百一年エスパニア及びフランスの委員はエスパニア領ギネアの境界を定めたるが、其の後イギリス及びドイツの委員はドイツ領南西アフリカの東境を、ドイツ＝ベルジック委員はキブ(Kivu)湖地方を、ドイツ＝イギリス委員はウガンダ、ドイツ領東アフリカ、等の境界を測り、ドイツ＝フランス委員はカメルン殖民地の南境を調査し、各地に就きて精確なる知識を得しこと少なからず、殊にランファン(Lenfant)はニジェルの沿岸を踏査し、ヘゼマン(Hösemann)はガメルンのカンポ(Campo)河口よりヌゴロ(Ngoro)に達し、ヌゴロ河はサンガ(Sanga)と會してコンゴに入るを確めたり。

一千九百二年トマン(Thomann)は象牙岸の實測圖を製しパヴェル(Pavel)はベヌエ(Benue)河畔のガルア(Garua)よりチャーデ湖畔に進みてガルアに歸り遂にヅアラ(Duala)に出でたり、而してエステルライヒ人ヰッケンブルグ(Wiekenburg)がヂブチ(Djibuti)よりアビシニアに入りイギリス領東アフリカのラム(Lamu)に出でたるは重要視すべし(一九〇—〇二)レフレー(Loeffler)大尉はフランス領コンゴに於てロム、サンガ、バールサラ、ロゴネ、等の水脈に就きて踏査を試みたり、又フランス人ボザ(Rob. du Bourg de Bozas)はアビシニアよりルドルフ湖の北西を過ぎバールエルヂェベルを渡りて西の方コンゴ河口に達するを得たり。

一千九百三年フランス人シュヴァリエー(A. Chevalier)はクールチー(Courtet)、ドコルス(Decors)、マルトレー(Martret)と共にウバンギとチャーデ湖との間に於け

る諸國を旅行して經濟的調査を實施し(一九〇二—〇三)、イギリスのバター(A. Butter)はネグスの使員と共にイギリス領とアビシニアとの境界に關する資料蒐收の爲、而エチオピアに旅行したり、イギリス人コットン(Powell-Cotton)は人種學及動物學に關する旅行をイギリス領東アフリカ幷にスーダンに試みしが(一九〇二—〇三)、其の他の旅行者にはサハラにルケン(Requin)、ヴォワノー(Voinot)、ルソー(Rousseau)、ギイヨー=ロアン(Guillot-Lohan)、ペイン(Pein)、ベセー(Besset)等あり、ダンプにツベル(Rud. Zabel)、リベリアにヒュブネル(A. Hubner)カメロン地方にロンベル(Rombeg)、ノイマン(Neumann)、ライヒハルド(Reichard)、バウエル(Bauer)、ワルドフ(Y. Waldow)等あり、又ララス(Abel Larras)の率ひたる探檢隊は陸に於てはタンジェル(Tanger)、ララシ(Larache)、アルジラ(Arzila)、スパルテル(Spartel)岬附近に三角測量及地形的調査を行ひ、タンジェルとラバト(Rabat)の三角測量的連絡、アフリカ岸とエスパニア岸との測地的連絡を爲せるが而に於ても亦頗る得る所ありき(一九〇〇—〇三)。

一千九百四年ルヴァー(Levat)は而オラネー(Oranais)、而マンプに旅行し、イン

ララス

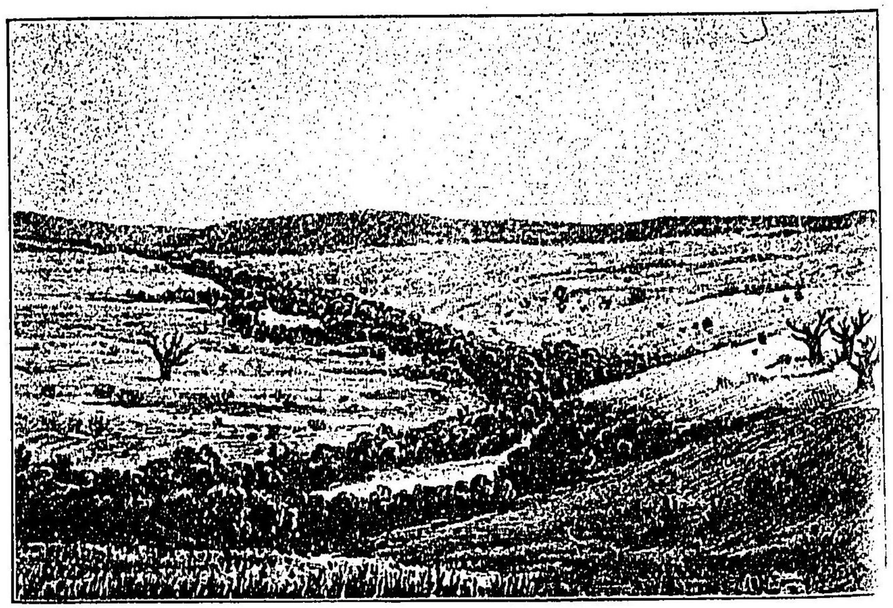
サラー(Insalah)を發せるラペリーヌ(Lapperrine)はチンブクツーより來れるテニオー(Theveniaut)とチミサオ(Timissao)にて遭遇せり、又ラペリーヌ及ヴィラット(Villatte)はチニアウイン(Tiniauin)よりアハガル(Ahaggar)山塊ムイディル(Muidir)高原の西を經、アドラル(Adrar)の花崗岩高原を始めて探檢せるが、マチウイジウール(Méhier Mathuisieuls)はトリポリの內陸に於て三年に亘れる考古學的踏査を實施したり(一九〇二—〇四)、デスプラーヌ(Desplagnes)はニジェルの東岸に於てソンゲイ國の舊都クキャ(Kukija)の遺址を發見し、マゼラン(Mazeran)、ルブレベク(Le Blévec)はキネガル及ニジェル河を尋ね、フランス=ポルトガルのギネア遠征隊、ドイツ=イギリスのトゴ境界遠征等も行はれ、ツェヒ(Zech)、ゼーブリード(V. Seeblied)の兩人はドゴ地方にて少なからざる効績を擧げ、プトカンメル(V. Puttkammer)はドイツ領ボルヌに到り、エリオット(Elliot)、モル(Moll)、グラウニング(Glauning)、スチーベル(Stieber)、チンメルマン(Zimmermann)等も一千九百四年のアフリカ旅行者として知らる、又ルメール(Ch. Lemaire)はコンゴ自由國にありて上ヌル(Haut Ouellé)及ラドの介在地を踏破し(一九〇二—〇四)、實測を遂げて精

ルメール

圖を製したり。

東アフリカに關してはウーリヒ(Uhlig)等はキリマヌヂァロ地方を調査し、ビクトリア湖の東岸に於て新火山岩を發見し、ホブレー(C. W. Hobley)も亦此の地方に赴けり(一九〇三—一〇四)、又デービド(David)はルエンゾリ山に登り、ピエール(Pierre)はコンゴ河の彎曲部よりニール河に達し、エジプトスーダンの郵便局長リッデル(Liddell)はバールエルセラフ(Bahr-el-Seraf)の東を進み、バタノ(Patano)及びオグリエチ(Oglietti)、アッサブ(Assab)灣よりアビシニアの內部に向ひたるが、英米遠征隊はハルツームより白ニール、ソバット及びバロを溯りてアビシニアの高原に出でイタン(Itang)よりハリングトン(Harrington)大佐はアッヂスアベバに赴き、マクミラン(Mac Millan)はソバットとロドルフ湖との間の地を探査したる後、ニールを經てエジプトに歸りたり、此の外ワシントンに於けるカーネギー(Carnegie)協會より特派せられたるマクス、ミュラー(W. Max Müller)は上エジプトエビアを調査し、ベルジック人ラッド(Lattes)はルアラバ(Lualaba)河の可航部が北緯九度十分と五度二十分との間に限れるを確定し、ブルツコフ(Alfred Voeltzkow)

バオバブ及びエウホルビアの疎林［東アフリカ］



廊林（forêt-galerie）［西アフリカ］

疎林草原

草木生存の狀態には千差萬別あり、森林あり、草原あり、疎林草原あり、密生あり、疎生あり、稀生あり。

「バオバブサヴァヌ」(Savane à baobab)はアフリカのスーダン地方地にコンゴ及びザンベジ兩河の間にあり、草地に巨樹バオバブ(Adansonia digitata)がアブラヤシと共に疎林を爲すを特徴とし、眞の「サヴァヌ」は東アフリカに於ける大湖の沿岸にあり、草地の中に巨大のエウホルビア(Euphorbia abyssinica)を主としバオバブ、カラカサアカシア(Acacia spirocarpa)、等の點在するを觀「パルムサヴァヌ」はマダガスカルにあり、西部より内部の一區に亘りては乾生的の椰樹(Hyphaene coriacea)ありて南西部には仙人掌科の植物現はる。

廊林

「パンタナル」(Pantanals)(Forêts-galeries)即ち廊林は疎林草原の變態なり、降水少量にして時期の偏せる土地にありては樹木の生育困難なるが爲め高草の地を爲せるものなるも河流の存するあるときは其の兩岸に近き小區域に限り稍〻濕潤なるが爲め樹木は繁茂して恰〻渡り廊下の如き觀を呈す、東スーダン地方のバールエルガザル(Bahr el ghazal)所屬の各支流又は西アフリカに於けるコンゴ河の支流カサイ、等の沿岸にあり。

はマダガスカル島に航して各部を巡察し、コレン(Collin)は主として同島のタナナリボ近傍に於て氣候學及び測地學的作業に從事し(一九〇三——〇四)、白色人の足跡は黑大陸及び島嶼部にも益〻普からんとせり。

一千九百五年スゴンザック(Segonzac)侯はジャンチー(Louis Gentil)及びフロットロクブェール(R. de Flotte Roguevaire)の幇助に依りてマグレブのブレッドエスシバ(Bled es Siba)地方に學術的旅行を爲し、ビュシェー(Buchet)は北部の實測を遂げ(一九〇四——〇五)、ディー(A. H. Dyé)は大西洋岸に水路的調査を施したり、サハラ方面に就きてはゴーチエー(E. F. Gautier)はシュドー(Chudeau)、エチエンノー(Etienneau)等と共にツアト(Tuat)、アーネット(Ahnet)高地、タネスルフト(Tanesruft)を經てインウジル(In ouzil)に達して西サハラを横斷し、且其の經過したるサハラは沙漠に非ずしてスーダン的のステップなることを提言し、フライセントマリー(Flye Sainte Marie)はツアトに於けるチンミ(Timmi)泉地より西の方テンヅフ(Tenduf)の南に進みたり(一九〇四——〇五)、ツーシャトル(Touchard)大尉は穿井隊を率ひてイガルガル方面に任務を果したり(一九〇三——〇五)、カメロン地方にはフラ

ンスのジュリアン(Julien)ドイツのクンド(Kurd)の境界確定事業の外にグローニング(Glauning)の水路調査、ドミニク(Dominik)の踏査ありしが、フランス領象牙岸の知事クロゼル(Clozel)は一千二百粁の内部に入り、モルネー(J. M. Mornet)はフレスコ(Fresco)よりイギリス領の黄金岸に達する長三百粁間の澤湖を研究し、ヘルマン(Hermann)はニジェリアとカメルンとの境界を測定したり、コンゴ自由國にありてはジャック(Jacques)は上流コンゴの可航性を調査するの目的を以て國の南部に旅行を爲したり、フォール(Faure)はツブリ(Tubri)沼に依りてビヌエとチャーデ湖との連絡を實行し、ヴァイユ(M. Vaille)はオゴヴ(Ogowe)地方に、フロベニウス(Leo Frobenius)はカサイ(Kassai)河の流域に、ポーエル コットン(P. H. G. Powell-Cotton)はニールの上流よりアルキミ(Aruwimi)流域のスタンリーワルド(Stanley-Wald)に達したり、而してペンク(Albrecht Penck)はザンベジのモシワツニア(Mosiwatunia)瀑、東アフリカ及び上エジプトに旅行し、ドイツ領東アフリカに赴けるコッホ(Robert Koch)はツェツェ(Tsetse)の毒并に海岸熱等を研究し、カンニングトン(W. A. Cunnington)はヌヤッサ及びタンガンイカの兩湖に就きて生物の調査を爲し(一九〇四——〇五)、ギボンス(Hill Gibbons)はイギリス領東アフリカ内にて調査せる所あり、ローゼン(Rosen)等はアビシニアに入りエジプトスーダンを旅行せるリッデル(Liddell)が更にボル(Bor)とソバト(Sobat)間の交通に就きて調査せる等、此の年に於ても探檢事業を行ひしもの少なからず。

一千九百六年に至りアレクサンダー(Boyd Alexander)及びゴスリング(G. B. Gosling)は三年(一九〇四——〇六)に亘れる重要調査を了へたり、ニジェリアのベヌエ(Benue)河畔に於けるロコヤ(Lokoja)を出發し、チャーデ湖に達し、シャリ(Schari)河口より短艇に乘じて之を溯り、其の南源流を探り、其の支流バミンギ(Bamingi)を北緯約七度半のブッグル(Buggur)まで探査せる後、更に他の支流たるグリビンギ(Gribingi)を溯りウバンギ(Ubangi)との分水嶺を越えてトミ(Tomi)の河口に達しウバンギを上流に向ひて探究し又ウエルレキ バリ(Uëlle-Kibali)を溯りてファンケルクホーフェンビール(Vankerckhovenville)に達したり、此の地に於て長時の休息を爲せる後、アレクサンダーは北に向ひてニールとの分水嶺を過ぎ白ニールの支流たるイェイ(Yei)を下り、其の河口附近より陸路ニール河畔のガ

アレクサンダー

バシャンビ(Ghaba-Schambi)に到り紅海のボートスーダンに出でて歸途に就きたり、本遠征は原來動物學を主とせしも、天測、地景、水誌、住民等に關する事項の調査をも併はせ行ひたるが故に地理學的踏査として重視すべきものなり、

一行はクロードアレクサンダー(一九〇四)及びゴスリン(一九〇六)を失ひしが奇獸オカピ(Okapi)を携へて歸國せり(一九〇七)、ブエー(Bouet)は象牙岸のサッサンドラ(Sassandra)より黃金岸の北緯六度三十分まで之を横ぎり、家畜及び昆蟲の刺衝に基く病毒に就きて研究する所あり、シュバリエー(Auguste Chevalier)はフランス領西アフリカの天然林を調査し、シュドー(Chudeau)はチャーデ湖に於ける旅行を繼續し、シンデル(Sinder)、テサウア(Tessaua)、タフア(Tahua)及びマンカビ(Mankaoi)を經、ニジェル河畔のニアメー(Niamey)に達し、ニジェル及びチャーデ湖の英佛の境界は兩國の委員に依りて測定せられ、一隊はオシー(O'Shee)、一隊はチロ(Filho)之を率ひたり而してチロはランドロアン(Landroin)及びガイヤール(Gaillard)と共にソコト(Sokoto)に來りローザンヌ(Lauzanne)はコンニ(Konni)に達せんが爲に沙漠を横ぎり、オードエン(Audoin)は從來未知の邊境を調査じヴィニオン(Vignon)はドッソ(Dosso)、タンカリ(Matankari)及びソコト間の不明地方を探査したり、又ランドロエン(Landeroin)は土人の習慣及び歴史に關する文書を集め、メルカデエル(Mercadier)は遂にケビ(Kebbi)、アルグング(Argungu)及びソコト地方を旅行せり。

コット(Cottes)及びフェルスター(Foerster)等の率ひたる一隊は南カメルンとフランス領コンゴとの境界を決定し、ドコルス(Decorse)は駝鳥の飼養及び裝飾用の羽毛を供すべき鳥類研究の爲フランス領西アフリカに赴き、ケース(Kayes)よりニオログンブ(Nioro Goumbou)、ソコロ(Sokolo)を經てサエル(Sahel)に出でチンブクッに達し、ニジェルの彎曲部を横ぎりてドリ(Dori)に赴きバンバ(Bamba)附近より西に向ひてバンディアガラ(Bandiagara)に至り遂にケースに歸着せり。

デスプラーニ(V. Desplagne)はシャニオロー(Chagnolleau)及びドルドビール(d'Ollerville)を伴ひて上ギネアに考古學的旅行を試みて好果を得、ドミニク(Dominik)及びシュロッセル(Schlosser)はカメルンのヌヨン(Njong)の中流地方及びヅメ(Dume)河畔に住するマカ(Malia)種族の獨立せるものに就きて報告し、チュボワ(Félix Dubois)は南オランよりニジェル河畔のガオ(Gao)に旅行したり。

ヘーリング(Haring)幷にホワイトロック(Whitelock)の率ひたる英獨の各遠征隊は約五百粁に亘るヨラ(Jola)より十字河に至るまでのカメルンの境界を調査し、ドイツ殖民省はヘッセルト(Hassert)を長として探檢隊をカメルンに送り、カメルン山彙及び其の北幷に北東に於ける地方の地理を探査せしめ、ラペリーヌ(Laperrine)はツアト(Tuat)よりタオデニ(Taodeni)に到る沙漠旅行を報告し、ルバルビエー(Louis Le Barbier)の率ひたる一隊はセネガルよりチンブクツに至りて商業及び農業に關する調査を行ひ、マンジェン(Mangin)はボルク(Borku)地方に數回の旅行を試みたり而して嘗てナハチガルが達せしイン(Jin)泉地の南東なるウン(Wun)泉地に達し、バールエルガザル(Bahr-el-Ghasal)を探檢し、本河はナハチガルが云へる如く往時チァーデ湖の排水河たりしものなりと論じたり(一九〇四—〇六)。フレイデンベール(Freydenberg)も亦チァーデ湖幷にバールエルガザル(Bahr el Ghazal)に就きて精査を遂げたるが、ナハチガル及びマンジェンの說と異なり、バールエルガザルを以てチァーデ湖に注水せしものと認め、地質的往代には一大內海ありてシァリ河を始め、チベスチ、ボルク、ワダイ等より流れ來れる諸水は悉く此の內海に注水せしものなるべしと提言したり。

モル(Moll)及びゼーフリード(V. Seefried)の率ひたる東カメルン境界遠征は其の事業を了へ、モルはサンガ(Sangha)の上流及びロゴネ(Logone)の西源地方を調査し、フォールラミー(Fort Lamy)に赴き遂にロゴネ、ツブリ(Tuburi)ベヌエ(Benue)の順路を取りて歸れり。

北アフリカの西部より中部に亘りてはパルリー(Paul Pallery)はマグレブの西岸に於て多くの石器時代の遺蹟を發見し、スチーンスビー(H. P. Steensby)はカールスベルヒ(Carlsberg)資金に依りてアルジェリア幷にチュニジアに人類地理學的旅行を爲せり、シアルムタン(Alfred Charmetant)は里昂商業會議所の使命を帶びてマグレブに經濟的の旅行を爲し、アルジェリアの境ウジダ(Udschda)に至りてオラン(Oran)に歸り、タンジェルに赴き、之より沿海のカサブランカ(Casablanca)及びマッガン(Mazagan)を訪ひ、アゼンムール(Azemmour)、サッフィ(Saffi)、アブダス(Abdas)平原、アーマル(Ahmars)地方、ジマ(Zima)鹹湖、ヂェビレー(Djebilet)山脈を經てマラケシ(Marrakesch)に至り南西に向ひてアトラス山脈に進み再び海岸のモガ

ドル(Mogador)に出でたり、チボア(Félix Dubois)は幾多の官廳學術團體の囑託に依りてアルジェリアサハラに旅行しサハラの自然及び經濟的關係を尋ね、ブラン(G. B. M. Flamand)はアルジェリア總督府より派遣せられて南オランに地質水理の調査を行ひ、ジァンチー(Louis Gentil)はウヂダ(Udscheda)地方及びアルジェリアの國境地方に地質旅行を爲せり、コルチエー(Cortier)はチングルト(Tinghert)地方を精査し、デショー(De Chaud)は經濟研究の爲め南オラネー(Oranais)に赴き、ビウシー(Bussy)はエルエド(El Oued)よりトリポリの國境まで旅行し、ツートシャール(Touchard)のツッグール(Tuggurt)よりタッシリ(Tassili)に赴けるあり、ビアンチ(Emilio Bianchi)はトリポリアに旅行したり。

北部アフリカの東部に關してはアリオー(Ch. Alluaud)はエジプト、ヌビア、エジプトスーダンに赴き、ガンノー(Clermont Ganneau)はエレファンチーヌ島に考古學的探檢を爲し、カンニングトン(Cunnington)はエジプトのファユム(Fayum)地方に於けるビルケットエルカルン(Birket-el-Karun)湖を調査せり。

イタリアは二々の遠征隊をエリトレア(Eritrea)に送り、其の一隊はガリナ(Francesco Gallina)及びパリベニ(Robert Paribeni)他の一隊はノビレ(G. B. Nobile)及びアエルドラヴェ(E. Avetrani)等を率ひたり、又コルドファン(Kordofan)の南西なるダルホムル(Dar-Homur)は四度ロイド(Watkiss Lloyd)の旅行する所となり(一九〇四—〇六)、メイヒー(Méhier de Mathuisieulx)はフランス文部省及びパリー地學協會の使命を帶びてシバ(Siwa)泉地に旅行し、ニューヨーク博物館はオスボルン(Henry F. Osborn)等をして北ファユムに於ける哺乳類の化石を調査せしめ、ザッシ(Moritz Sassi)は白ニール地方に地質調査を行へり。

ルフシンゲル(J. R. Luchsinger)は南エチオピアのアヂスアベバ及びステファニー(Stefanie)湖の間に於ける諸湖を探檢せり、スクアラ(Sukua'e)を訪ひスアイ(Suai)湖に達し附近に於て三湖を尋ねたるが、其の二湖即ちホラアッビアタ(Hora Abbiata)とホラシャハルラ(Hora Schahalla)とは鹹湖なりき、ビラッチ(Bilatti)河を下りて河口のマルゲリタ(Margerita)湖に達しガンヂウレ(Gandjule)湖を過ぎり遂にアヂスアベバに歸れり、又ニッスル(Franz Nissl)は大なる困難を犯してハラル

(Harrar)よりアヂスアベバに歸還し、イタリア地學協會はオスチニ(Ostini)、ラワ(M. Rava)及びタンクレヂ(A. M. Tancredi)等をして北アビシニア殊にタナ(Tana)湖地方を探檢せしめたり。

バーシヴァル(C. Percival)及びコミン(D. Cemyn)は二ールの西源流に就きて探檢を遂げたるが、一面にはバールエルアラブ、ソバット、アコボ(Akobo)、ピボル(Pibor)等を踏査し他方にはバールエルガザルの河網を明瞭ならしめ、ロイド(W. L'oyd)はコルドファン(Kordofan)を踏査して良圖を製したり(一九〇四—〇六)。

カルルテルス(Douglas Curruthers)は東岸よりアルベルトエドワード、キブ、タンガンイカの諸湖を經てコンゴまで三千二百粁を旅行し、ランドル(H. Savage Landor)も亦東より西に本大陸を横ぎり、ザイネル(Franz Seiner)はビクトリア瀑布より南西アフリカに赴き以てドイツ殖民協會より提供せられたる南東及び南西アフリカの連絡に利用し得べき通路に關する問題を解決し、フォルベルク(Vorwerk)はトゴ、カメルン、ドイツ領南西アフリカ等に向ひて經濟事項調査の爲め旅行せり。

次に赤道アフリカに關するものを記せばアブロー(Avelot)はオゴエ(Ogowe)地方に、ダエ(M. T. Dawe)はウガンダにイエーゲル(F. Jäger)はドイツ領東アフリカに赴き、ランファン(Lenfant)はフランス領コンゴに新旅行を試みたり、此の外モル(Moll)の率ひたるカメルン=フランス領コンゴ境界劃定隊、東アフリカに於けるドイツ=イギリス國境委員等は其の業を終り、十二年間中央アフリカにありたるエザーリー(Poulett-Wetherley)はロンドンに歸りて其の結果を公にし、アブルツ(Abruzz)公はルエンゾリの最高峰を極めたり。

南アフリカに於てはハーヂング(C. Harding)はザンベジの水源を、シュルツェ(L. Schultze)はナマランド(Namaland)及び中部カラハリを探檢したるが、ケリー(F. C. Kerry)はトリスタンダクニャ(Tristan da Cunha)島にクネーベル(Knebel)はカナリア諸島に赴けり。

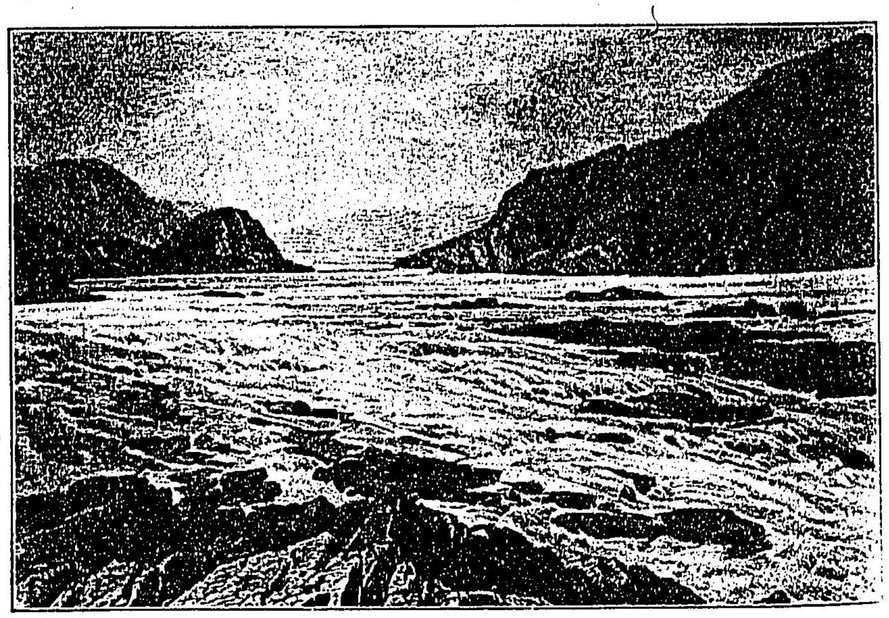
一千九百七年アルノー(Armaud)及びコルチエー(Cortier)はアハッガル、アドラル等の地に於て旅程一千二百二十粁を了へ、カチー(Armand Cathy)は殖民海事振興會よりモーリタニアに派遣せられ、セネガルに對する經濟政治の關係等

を調査し、アンマン(Ammann)はニジェルの上流地方を旅行して經濟事情を調査したり、デウシェーニュフールネー(Duchesne-Fournet)はフランス殖民省の命に依りフランス領西アフリカに經濟的探檢を行へり、先ダカル(Dakar)に赴きカヨル(Cayor)を訪ひセネガルを横ぎりバケル(Bakel)に上りファレメタル(Falémétal)及ビバンブーク(Bambouk)を經、カユ(Kayes)よりスーダンに赴きバマコ(Bamako)及ビクリコロ(Koulikoro)を探檢せる後、南に轉じマンヂング人の住地を經、ブレ(Buré)を過ぎシギリ(Siguiri)に達し之よりチンキッソ(Tinkisso)の沙漠帶を横ぎり、ツマネア(Toumanea)及ビチンボ(Timbo)を經てコナクリー(Konakry)に達したり、ボルドー(Bordeaux)はチァーデ湖よりワダイのアベシェル附近に進み、ヨーロッパ人未踏の地を過ぎて北東のエネヂに達し、尚ほナハチガル以來往訪せし人なきボルクのアインガラッカ(Ain-Galakka)に至り(一九〇六—〇七)、アヤス(Ayasse)はチァーデ湖畔のヌギグミ(Ngigmi)よりアガデム(Agadem)及ビビルマ(Bilma)に赴きて地質を調査し、ストリュンペル(Strümpell)は南アダマワ、マオデオ(Mao Deo)及ビファロ(Faro)の西、ヨラ(Jola)附近の共獨の境界の南、チァブシ(Tschalschi)山脈の東即チ東經十二度乃至十二度半、北緯八度二十分乃至九度の地を探査し、ラスマン(Günter Teszmann)の引率せるムバンヨ(Mpangwe)遠征隊は其の事業を終へ、フィリポー(Paul Philiprot)はフールニエー(Edouard Fournier)、シャコルナク(Chacornac)、ゴジョン(Gojon)、ラン(Larpé)マチュー(Mattieu)等と共に象牙岸の內部に鑛物調査を了へし後、北西カメルンに旅行し、バメンダ(Bamenda)より東に向ひキデクム(Widekum)及ビビテク(Biteku)を經てバシャ(Bacho)に至り以てムンアヤ(Mun Aja)と十字河及ビモ(Mo)との間に於ける階段地の狀況を明かにし、プリュール(Pruel)はサンガ(Sanglia)の中流なるムドキ(M. Doki)に新旅行を試み、ムボコ(M. Poko)に沿ひてウバンギに進み、ウアーメ(Ouaimé)及ビナナ(Nana)に於て天測を行ひたり、ロールバハ(Paul Rohrbach)はカメルン山彙の北及ビ北東に於ける火山地方を訪ひ、ブエスゲン(Moritz Buesgen)幷にイェンチ(F. Jentsch)はカメルン沿岸の森林を調査し、スタイン(Stein)はカメルン知事の命を受けサナガ(Sanaga)の北方、東はムバム(Mbam)西はヂバンバ(Dibamba)に至る直徑約百五十粁の不明地を探檢し、レーデルマン(Ledermann)及ビローゼンベルヒ(F. Rosenberg)はカメルン內部の生物調査に赴き、ランファン(Lenfant)は

ランクルノン(Lancenon)及びモル(Moll)と共にフランス領コンゴのロゴネ(Logone)サンガ(Sangha)、ロバイ(Lobai)、ウアーム(Uahm)其の他の諸川の流るる地方を縱横に旅行して通路に適當なる水流を調査し、ライ(Lai)よりサンガ及びカルノー(Carnot)に至る連絡はロゴネの支流たるペンデ(Pende)の谿谷は最も之に適すと報告したり、又ルヴァー(David Levat)はマグレブ、アルジェリア及びサハラを探檢し、マンスフェルド(Mansfeld)はカメルンのヌサクペ(Nsakpé)附近に於ける死海の調査を試み、モイゼル(M. Moisel)はカメルンに旅行しビクトリアよりブエア(Buea)ヨハンアルブレヒツヘーエ、ニニング(Nining)、ムボエ(Mboe)平原、ムボポステン(Mboposten)、チャン(Dschang)、バメンダ(Bamenda)、バリ(Bali)、バブンゴ(Babungo)、オカ(Oka)及びバンソ(Bansso)を過ぎてバムン(Bamum)に到着せり。

尙ほ赤道アフリカの探檢を記さんにベック(Beck)及びリッペルト(Lippert)はビクトリア湖中に於けるセセ(Sese)諸島に赴きて睡眠病を調査し、ベル(Bel)はフランス領コンゴのムボコソンゴ(M'Boko Songo)に至りて銅其の他の地產を調査し、ボンニー(Eugène Bonny)は大湖地方に二年を費し、ウサンビロ(Usambiro)、ウルンヂ

ビクトリア湖畔



イエルラ(Yellala)瀑流［コンゴ河］

ビクトリア湖畔

上ニール及び上コンゴの水系を探査するの目的を以てスタンリーは三人のイギリス人フレデリックバーカー(Frederick Barker)、エドワード及びフランシスポコック(Edward and Francis Pocock)を伴ひ、從者、案内者、衛兵、人足、等より成れる約三百人の一隊を率ひ、航湖用の小船「レヂーアリス」(Lady Alice)の組立に供すべき材料を携へてバガモヨを出發せしが、ムブアブア(ウサガラ)に到達する以前に於て五十人の逃亡者を出だし、強風、暴雨、疾病、等はウゴゴ地方を通過する際に我が隊に仇し、エドワードポコックは熱病に罹りて幽界の人と成りて、更に五十員の減損を生じ、ビクトリア湖の合流の一なるリゾンゾ河畔に於て三日間の爭鬪に二十一人を失ひしを以て遠征隊の總員は百九十四人と註せられ、二月末に於てウグレヱ湖のカゲヒイ港の東に達したり、此の地に於てスタンリーは「レヂーアリス」を組立て衛兵十人を率ひて湖上に出で岬、島、灣、港、等を探査し、ウカフに至り國王ムテサに面接したる後、三十隻の小舟に送られてビクトリア湖を横斷したり。

イェルラの瀑流

スタンリープール(Stanley-pool)即ちスタンリー湖を出づるやコンゴ河はリヰングストン以下の瀑流區に入りブラッザヴィイユとマタヂとの間(二七五粁)に於て三十二ヶ處の瀑流と幾多の奔流とを爲し、或は三百乃至八百米突の峽谷を流れ、或は圓形の沸釜(Chaudrons)と成り、右折左曲、敲條の沸、衝突の波、渦流、飛流、靜灣、安灣、形を變し勢を異にし、泡沫を生じ、鳴響を起し、毎秒二十五米突を走り、水深く九十米突に至り、イェルラ(Yella'a)の瀑流也に鬼神の沸釜渦流沸流の堀り下げたる深百二十米突を過ぎたる後は怒を鎭めて宏大なる三角灣を緩流し、緣嶼砂洲を廻り、バナナを右にバドラカを左にせる幅十一粁、深サ三百米突の河口に依りて大西洋に出で沖合遙に四百五十粁までの海水に暗黝色を與へ、六十粁までに淡黃色を附し、二十二粁までを淡水ならしめ、流水の深さは三百六十米突を保ち、進潮は三角口に來侵して河水を高からしむるも逆流を生ずるに至らず、コンゴ河の水勢の偉なる思ふべきなり。

(Urundi)、キヅ(Kisu)とビクトリアとの間の地方を調査し、歸路ウガンダを通過し、ブラウン(J. Penman Browne)はイッツリの上流に於ける侏儒を調査し、ブルエル(Bruel)はオゴヱの左岸の一支流中に於けるアレンベ(Alembe)島の經度及び上オゴヱ會社とヌヂョレ(N'Djolé)代理商館との境界を定め、カエタニ(Livio Caetani)はアヂスアベバより出發して南部エチオピアに向ひ、グラゲ(Guragbe)ガラマ(Galama)の二地方を過ぎ、ルドルフ(Rudolf)湖畔を過ぎり、歸路はカッファ(Kaffa)及びヂンマ(Djimma)地方を經、オモ(Omo)河に沿へり。

狩獵及び商業の目的を以て殆ど二年間イギリス領中央アフリカに滯在せるアングス(H. Crawford Angus)はシレ(Schire)以西の地理に就きて頗る得る所あり、ドルマン(M. R. P. Dorman)はコンゴを溯りてポンチエービィイユ(Ponthierville)に達しイチンブリ(Itimbri)、ウエルレ(Uelle)、ウバンギ(Ubangi)を訪ひ、ヂュジャール(Dujour)はヌゴコ(N'Goko)及びオゴヱの上流に於ける測地を爲し、フラアス(E. Fraas)はドイツ領東アフリカの地質調査に赴き、イェーゲル(Fritz Jäger)は東アフリカ地溝帶の火山地方を探査して歸國せり、同人は先ずエヤシ(Ejassi)地溝の爲に高めら

れたる閉塞湖沼地方に於てデアニ(Deani)及びレマグルート(Lemagrut)の二大火山を探檢し、次にゴロンゴロ(Gorongoro)地方、エヤシの北東に接する大火口地方に及びたり、又ジャック(Jacques)はヌヤンガ(Nyanga)の上流を探檢し、ラーデマン(Lademann)はドイツ領東アフリカのムパプア(Mpapua)に於て哺乳類の有益なる採集を行ひ、ポエル コットン(P. H. G. Powell-Cotton)はコンゴの東部よりニールの上流に赴きて侏儒(Pygmées)の研究に從事せしがオカピ(ギラフ、セブラ、猿を兼れ白犀の如き稀有の標本を得又は黑猫虎、蜜狸(honey badger)等の如き新種を發見したり(一九〇五—〇七)、ケランデル(Kérandel)はカルノー(Carnot)、フールアルシャンボー(Fort-Archambault)の間にルエル(Rouelle)及びブイイー(Bouillez)はチャーデ湖地方に、ウジロー(Ouzilleau)及びヘケンロート(Heckenroth)はサンガ(Sangha)の上流にペイロー(Peyrot)はオゴエ地方に活動したり、ダンマルクのマウリツェン(Maurizen)はカモロンドー=ルアラバ(Kamolondo Lualaba)の可航部を調査し、メクレンブルグ公アドルフフリードリヒ(Adolf Friedrich)はワイス(Weisz)、キルヒスタイン(Kirchstein)、ミルドブレッド(Mildbread)、ツェカノフスキー(Cekanowski)、シュボツ(Schubotz)ラーフェン(V. Raven)、キーゼ(V. Wiese)等と共にドイツ領東アフリカに赴きビクトリア湖畔のブコバ(Bukoba)よりキウ(Kiwu)湖地方を經ルエンゾリ(Ruwenzori)山地方に至り遂にコンゴ及びウバンギの流域に達する豫定なり、コンゴ萬國鑛山森林會社はムツンゲン(Mutungen)地方にモフン(D. Mohun)等を遣はし、ポエル コットン(Powell-Cotton)はコンゴ國の東部を旅行して天然林中に於ける動物及び人種を調査し、殊にイツリ(Ituri)地方の侏儒を研究せり。

ドイツ及びポルトガルの東アフリカ境界測量に就きては シュローバハ(Schlobach)及びネウバート(August Neupartl)各、一隊を率ひて之に從ひ、スタル(Frederick Starr)はカッサイ(Kassai)及びバッア(Batua)河に沿ひて侏儒を研究し、テスマン(Teszmann)はカンポ(Campo)河の南に於ける不明地を探究し、エスパニア領ギネアのムパンヱ(Mpangwe)族を研究し、アメリカの探檢家にして狩獵家たるチエーダー(Richard Tjader)は中部アフリカに於ける四ヶ月の旅行を終へて歸りぬ、又イギリス領のウガンダの境界測量に關しては數隊之に從事し、英獨境界遠征隊のドイツ部には シュローバハ(Schlobach)加はり、コンゴ國とウガンダとの境界

協定はイギリス、コンゴ兩國より任命せられたるラドクリフ(Radcliffe)の引率に依りて行はれ、ヲイレ(K. Weule)はドイツ領東アフリカに九ヶ月を費して無事歸國し學術上得る所頗る大なりき、此の外ホワイトハウス(Whitehouse)はビクトリア湖の測量に前後七年を費して其の地圖を完成したり。

アイルマー(L. Aylmer)はキブヱヂ(Kibwezi)よりイクサ(Ikutha)を過ぎイギリス領東アフリカなるキツイ(Kitui)に旅行し、其の際アシ(Athi)、タナ(Tana)兩河間の不明地に入りて好結果を得たるのみならず、チバ(Tiva)河をイクサ(Ikutha)より河口まで探檢し、フランス文部省よりコンゴに派遣せられたるベル(J. Marc Bel)は學術經濟的の調査のみならず、レオポルドヴィユよりフランス領の海岸に通ずべき鐵路の研究を行へり、ベルソン(Berson)、エリアス(Elias)、ムント(Mundt)等は高處の氣象觀測の爲ウガンダ鐵道に依りてボートフローレンス(Fort Florence)に入り湖上及附近に於て觀測を行ひベルソン、ムントの兩人は先ダルエスサレム(Daresalem)に歸りしがエリアスは尚暫時シラチ(Schiraz)に止まれり。

イギリス及コンゴはアルベルト湖及アルベルトエドワード湖地方調査の爲ブライト(Bright)及バスチアン(Bastian)の統率の下に一遠征隊を送れり、蓋し此の地方の大部は從來全く世に知られざりき。

一千九百八年グロー(Gros)の引率せる測地森林隊はフランス領象牙岸に向ひて出發し、グリヴェル(Gruvel)は復フランス政府の命を受けて西アフリカの漁業を調査し、ギールメン(Guillemain)はカメルンのオッシヂンガ(Ossidinga)地方に於て鐵鑛のみならず、雲母、鹽泉、硫化鉛鑛、金、等の存在を確め、ハッセルト(Kurt Hassert)はトルヒヴケ(Franz Thorbecke)と共に北西カメルンに於ける十三ヶ月間の旅行を終りたるが、目的はカメルン諸山、マネングバ(Manenguba)系の山岳、其の北及北東に續く高地の自然的狀況幷に產源、生物、住民、等の研究にありき、一行はビクトリアに入り先カメルン諸山を探檢しヨハンアルブレヒツヘーヒ(Johann-Albrechts Höhe)に進み之よりバルエ(Balue)山脈、バクンヅ(Bakundu)凹地、バルンヅ(Balundu)平野を過ぎ、マネングバ山脈中のホルスト(Horst)及ブルカン(Vulcan)山を調査したる後に天然林に及びたりき、而して最後に北カメルン

のバフム(Bafum)地方を調査し東に轉じてマウヱ(Mauwe)湖を過ぎ、バンソランド(Bansoland)及びラミダトバンヨ(Lamidat Baujo)に入り、チカルランド(Tikarland)バムン(Bamun)國を過ぎ再びバメンダ(Bamenda)に達し好雨季に際してバリ(Bali)チント(Tinto)、ヨハンアルブレヒツヘーエを過ぎ、海岸に向ひて歸路に就き、ムンゴ(Mungo)の水路を利用してヅアラ(Duala)に搬來し遂にハンブルグに歸着せり(一九〇七——〇八)。オットー(Robert Hottot)、プートレン(Poutrin)及びギナール(Guinard)等はフランス領西アフリカの住民に就きて人種、土俗等を調査し、デスプラーニ(Desplagnes)はニジェル地方に於て考古學的及び人種學的旅行を繼續し、ガナタ(Ghanata)即ちガナ帝國の舊都の地を決定せりと稱す、此の國は西紀三百年頃フルヒ(Fulbe)人に依りて建設せられしものの如く、其の中心はニジェルの西に横はり今日までチンブクッの西北西約四百粁、沙漠の緣邊に位せるウアラタ(Ualata)を以て其の首府たりし處とせるが、デスプラーニはツバ(Tuba)の北北西、バナンバ(Banamba)の西方、ニジェルより約七十五粁の地なりとせり(一九〇七——〇八)。チロ(Tilho)は他のイギリスフランス境界委員と共にチャーデ湖の探檢を行へり、同人は先づリチャード(Richard)及びフィリッポー(Phillipot)と共に本湖の東岸より西岸のコマヅグワウベ(Komadugu Waube)の口まで航行し次にシャリ河口の北に於ける水面を探りぬ、其の間にオードヱン(Audoin)はバールエルガザルを探檢し、ローザンヌ(Lauzanne)はクカ(Kuka)及びクルア(Kulua)間の西岸及び北岸に於ける各地の座標を定め、ヴィニョン(Vignon)及びメルカヂヱー(Mercadier)もチャーデ湖附近に於て同樣の事業を行へり、シャブァリヱー(Auguste Chevalier)は西アフリカに赴きコナクリーより先づフタヂァロン(Fouta Djallon)の山地を訪ひニジェル及びカバリー(Cavally)を下り、キシヅグ(Kissidougou)及びベイラ(Beyla)を過ぎ、上ササンドラ(Haute Sassandra)に達し暫時ビンジェーブイヱ(Bingerville)に滯在するの豫定なりき。

バーキンソン(Parkinson)、オーヱン(Owen)、ビルド(Byrde)及びレイトン(Leighton)のリベリア探檢に從へばセントポール(St. Paul)河の水源は從來信ぜられしよりも東に横はり、セントジョン(St. John)河の上流はヌオン(Nuon)にしてカワラ(Cavalla)は嘗てフランスの探檢家が唱へし程には西方に彎曲せずと云ふ。

ツェドリッツ伯(Graf von Zedlitz)はエリトレアの首府マッサウア(Massaua)に至り北の方ケレン(Keren)に赴き之より南東アビシニアに入りハルツームに達し以て動物學的探檢を行はんことを計畫せるが果して實行せられしや否やを詳にせず。

ブルース(David Bruce)の率ふる遠征隊は睡眠病調査の爲ウガンダに派遣せられ、ウガンダ保護國の北東部ルドルフ湖とニールとの間に於てダーレー(H. A. C. Darley)はマランゴル(Marangole)より普通の道を取りてマゴシ(Magosi)に赴き次にタラシ(Tarash)河を横ぎりララメット(Larameti)に進み、歸路にはモロト山(Mt. Moroto)の北なるタークエル(Terkwell)、ジヒ(Jiwe)及びドドシ(Dodosi)を經過したり。

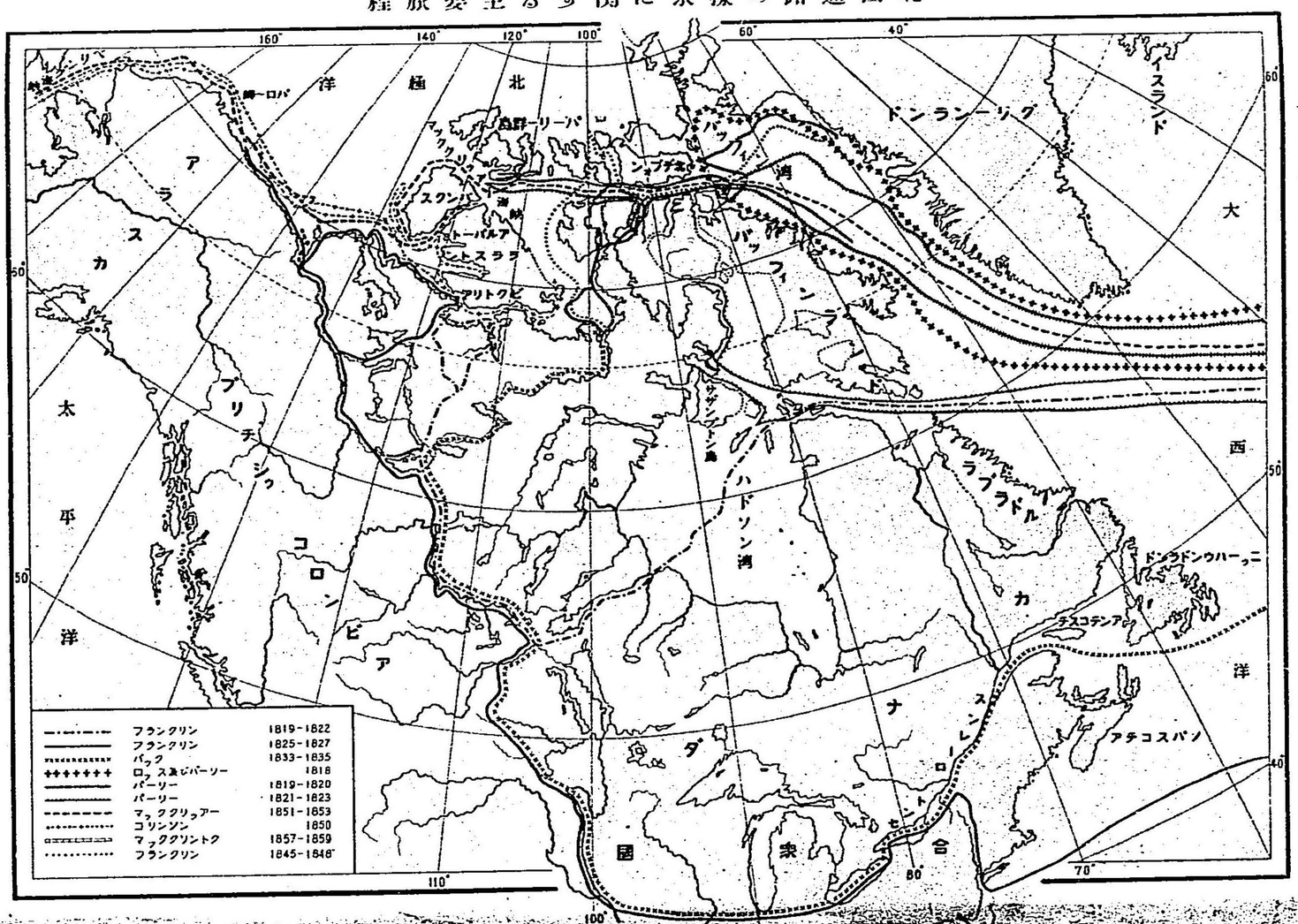
デンニゲル(Denniger)はダルエスサラアムを發しルフィヂ(Rufidschi)河を探檢して綿及び米の栽培に適するの地を調査し、イタリア中央氣象臺長バラッツォ(Parozzo)は東アフリカの海岸及び內部に於ける「モンスーン」の研究に與り、ロンドンに於ける人類協會及びイギスリ博物館はトルデー(E. Torday)等をしてコンゴ國の上流クキル(Kwilu)及びルルア(Lulua)河間の不明地方の人種學的調査を行はしめたりき。

南部アフリカに關してはビュルニエー(E. Burnier)のセシェケ(Seshéké)よりレアルイ(Lealouyi)までを記載せるあり、エングレル(A. Engler)はトランスバール及びローデシアに植物地理學幷に植物學的研究を爲し、ホール(Hall)はマショナランドの舊蹟殊にツィンバブエ(Zimbabwe)殿堂に就きて調査する所あり、ペヒ(Rudolf Pöch)は絶滅せんとするブシマン族研究の爲に南アフリカに赴き、ウセグリオ(Carlos Usseglio)はベイラ(Beira)とザンベジ河口との間に於ける沿岸地を測量し、バレース(L. A. Vallace)はローデシアの北東部に旅行し、キリアムス(Ralph Williams)はベチュアナランド保護地に於けるオカワンゴ(Okawango)は一大河にして其の水量はビクトリア瀑布附近のザンベジに讓らず、本河の注ぐオカワンゴ沼は南と東とにクルマン(Kurumman)、マチャベ(Machabe)及びボロ(Boro)の三排水口を有するを報告せり、又フィッシャー(Eugen Fischer)は南西アフリカに人類學的調査を行ひ、ジャコッテル(C. Jacotter)は南アフリカ土人の言語を研究し、レッソー(H.

de Lae soe)はモサンビークに於けるルンヂ(Lundi)及サビ(Sabi)河探檢の結果を公にし、ピールソン(H. H. W. Pearson)はワルフィシ灣よりキンドフーク(Windhuk)に植物地理的旅行を試みたり。

アフリカの島嶼に就きてはクネーベル(W. v. Knebel)のカナリア諸島に地質調査を行くるあり、ルモアーヌ(Paul Lemoine)のマダガスカル殊にアンブル(Ambre)岬よりアントシヒビー(Antsohiby)まで地質を調査せるあり、マルトンヌ(Ed. de Martonne)はマナンジャリー(Mananjary)よりフィアナランツオア(Fianarantsoa)までの旅行に就いて報告し、アレクサンダー(Boyd Alexander)はサントメプリンシペ及アンハボンに地質調査を行ひ、ガロワ(Eugène Gallois)はマダガスカルに赴き、ヘルゲセル(Hugo Hergesell)はテネリフ(Teneriffa)附近の貿易風地方に考古學的探檢を行へり。

北西通路探檢に主要なる旅程


北極洋
ヨーロッパ
ノルウェー海峡
ノルウェー
スウェーデン
ロシア
ドンランド
ドンランド
ドンランド

第六　兩極地域

A　北極方面

ポルトガル人又はエスパニア人が保有せし航路以外に於てヨーロッパとアジアとを連絡すべき海路を新舊兩大陸の北方に探求するに當りて北極地域の探檢は開始せられたり、然るに問題の解決が漸次に進捗するに從ひて大西洋よりアジアの東端に趣くにアメリカの北よりするものとアジアの北方に依れるものとの二途あるべきを推知するに至れり、されば遠征は自ら北西通路に關するものと北東通路に屬するものとの兩種を爲し而して高緯度の地に往復せし結果は更に極地に到達せんとの希望を起して第三種たる到極旅行を生せしが、地質、海洋、博物、氣象磁氣、極光、氷山、氷壁、等に關する學術上の研究は第四種の科學的征旅を現出せしめたり。

北西通路　ベネチアの商賈ギオヴァネッチ カボタ(Giovanetti Caboto)イギリス的稱呼はジオン カボット(John Cabot)なりがブリストル(Bristol)を出でてテラヂプリマビスタ(Terra di Prima

カボット

Vista)(ラドルならん)の海岸幷に(ニューファウンドランド)の地に達せし後(一四九七)、其の子セバスチアン、カボット(Sebastian Cabot)はグリーンランドの西岸に沿ひて北航し北緯六十七度三十分即ち(デービス)海峡の北端に達し(一四九八)歸航の際にハドソン灣に入り、バッカラオスの地(Terra di Baccalaos)(鱈の地の義にして(ニューファウンドランド)に當る)フロリダ等に到れり、之より先にポルトガル人(ジョアン)コルテレアル(Jugão vaz Corterea)は北航を試みしことありしが(一四六四)、其の子ガスパルコルテレアル(Gaspar Corterea)はセントローレンスの河口を一の海灣なりと誤認してカーナダ(Cā nadā)(此處には何もなしとの義なり、後日に至りジャック、カルチエーの一行が同處に到りし際、土人が聞覺えのカナダなる繰返したるに因みて當地方にカナダの稱あるを致せりと云ふ)と叫びしが、アニアン(Anian)海峡(ハドソン海峡)を經てハトソン灣に入り印度に到達すべき自由航路を發見したりと速斷し(一五〇〇)、翌年再航を試みしも難破の厄に逢ひたれば、兄の踪を尋つねんとしてミゲル、コルテレアル(Miguel Corterea)も死歿したり(一五〇三)、斯の如くしてポルトガル人はテララボラトリス(Terra Labsratsris)即ちラブラドルを發見せしに過ぎざりしが、他に印度に到達するの航路を領有するに至りて中止せり、又フ

カルチエー

デービス

ハドソン

ベラフィン

ランス人のカルチエー(Jacques Cartier)は四回の旅行に依りてニューファウンドランド幷にセントローレンス沿岸地方を踏査したり(一五二四—三五—四一)、イギリス人は舊大陸の北方に於て東航を試みしが、再び西路の探求に當り政府の幇助と國民の後援との下に遠征は盛に行はれ、プロビシャー(Martin Frobisher)はグリーンランドの南端を過ぎてバッフィンランドに赴き(一五七六)、更に二回(一五七七、一五七八)の旅行を企てたるも地理學上の効果多からざりき、デービス(John Davis)は第一回の旅行に於てデービス海峡を發見し(一五八五)、第二回の旅行(一五八六)は不結果に終りしが、第三回の旅行にはグリーンランドの西岸に於て北緯七十二度十一分に達したり(一五八七)、ハドソン(Henry Hudson)はグリーンランドの東岸方面(一六〇七)、ニューヨーク灣、ハドソン河(一六〇九)等を探査して斯學に資する所少なからざりしが、ハドソン海峡を發見したる後、ハドソン灣頭に不幸なる最期を遂げたり(一六一一)、而してはバイレット(Robert Byleth)(ロバート、バイロット(Bylot))はバッフィン(William Baffin)と共に二回(一六一五、一六一六)の旅行に依りてミール(Mill)島、フォックス海峡等を發見し、スミス海峡に於ては北

緯七十八度十分に達して地理上に貢献すること大なりしのみならず、捕鯨上に資する所多かりしが、デービス海峡の北方に海路(ランカスヌー海峡)の存在を疑ひしも同水路は氷の爲に永久に閉塞せらると宣言せし結果、第七及び第十八の兩世期にありてはグリーンランドの近海は僅に捕鯨者の往來するを觀るに過ぎざりき、但し此の間にありてフォックス(Luke Fox)はハドソン灣が内海なるを確定し(一六三一)、ヒアーン(Samuel Hearne)はコッパーマイン(Coppermine)河を探査し(一七六九—七二)、クック(James Cook)はベーリーング海峡より入りて北アメリカの北西部を探り(一七七八)、マケンジー(Alexander Mackenzie)は尙ほ一層廣く該地方を二回(一七八九、一七九二)旅行したり。

一千八百六年に捕鯨家スコレスビー(William Scoresby)がスピッツベルゲンの北方に於て北緯八十一度卅分に達せし以來、好奇心の漸く復興せし際、サージョセフバンクス(Sir Joseph Banks)の助力ありてバロー(John Barrow)の提案は採用せられ、ジョンロッス(John Ross)はパーリー(William Edward Parry)と共に探檢の途に上ばりしも、ランカスター灣(海峡を誤りて灣と認むの入口に達せしに過ぎざりき(一八一八)、輿論は痛く此の勇なき行爲に反對したるを以てパーリーはリッドン(Matthew Liddon)を伴ひ「ヘクラ」(Hekla)號及び「グリッパー」(Griper)號の二隻を率ひ、ランカスター海峡を經てバロー(Barrow)海峡に赴き、メルビル(Melville)島を發見し遂に西方バンクス島(Banksland)にまで進みたり(一八一九—二〇)、又ライオン(Geo-Francis Lyon)と共にハドソン灣の北方より入りて西航を試み「ヒュリー」(Fury)及び「ヘクラ」(Hekla)海峡等を發見し(一八二一—一八二三)たるも、次回の旅行(一八二四—二五)は不成功に終りたり。

パーリー(Sir William Edward Parry)(1790—1855)はイギリスのバス(Bath)に生る、副司令として ジョン ロッス の遠征に加はりし後(一八一八)、一千八百十九年には自ら司令と成りサビン(Sabine)及びビーチー(Beechy)を率ひて「ヘクラ」(Hekla)號に坐乘し、隨伴艦「グリッパー」(Griper)號の指揮を リッドン(Matthew Liddon)に委れ、八月二日を以てランカスター海峡に入りプリンスレジェント(Prince Regent)海峡を見てベーリング海峡に赴くに適する通路なりと斷じ西航を試みしも、氷塊の爲にポートボーエン(Port Bowen)に於て止められ、パローン海峡方面に戻りしが、再び西向して北のセオルジア即ちパーリー群島中の數島を發見し、ヰンターハーボア(Winter Harbour)に於て拔群なる冬籠を實行したる後、歸途に就きたり(一八二〇年九月)、第三回の旅行(一八二一—二三)には自ら「ヒュリー」(Fury)號

に坐乘しリヨン(Geo-Franceis Lyon)の指揮せる「ヘクラ」(Hekla)を率ひハドソン灣の北方よりヨン峽灣とイグルーリック(Igloolick)島とに冬籠を爲せしが、其効を得ずして歸復するの外なかりしも亦探査上得る所少なからざりき、第四回の旅行(一八二四——二五)に於てバロー(Barrow)井にプリンスレジエントの兩海峽方面に活動してボートボーエンに冬籠を爲せしが「ヒウリー」を失ひしに拘らず各種の觀測を完了するを得たり、因に記す、パーリーは北西通路に關する前記四回の旅行以外に於て一千八百二十七年には「ヘクラ」號に坐乘してアルデン島に赴き、同處より二隻の橇舟を用ひて北極に到達せんと試みしが、氷塊の流致(Derive)、變形又は博物學上に資すべき新知識を齎來せるに過ぎざりき、爾來ニューヘブライツに於ける派遣官(一八二九——三四)、海軍機器局長、等に歷任したるが尙ほ盛に北極到達に關する論文を公にしたり(一八四五)、パーリーの如きは第十九世期の始めに於ける光輝ある探檢家にして果斷、有爲、忍耐、等の美質を有せるが、就中探檢隊に司令たるの特技を仰へし點に於て優越せりと云ふべし。

此の外にフランクリン(John Franklin)(一八一八—二七)、ビーチー(Beechy)(一八二七)、バック(George Back)(一八一九——二七)、リチャードソン(Richardson)、ケンダル(Kendall)、等が北アメリカの北岸を調査せるありしも十餘年の精力が不結果に終りし際なりしかば、前回の失敗を償はんと熱望したるジョンロッスの提案は

ジョンロッス

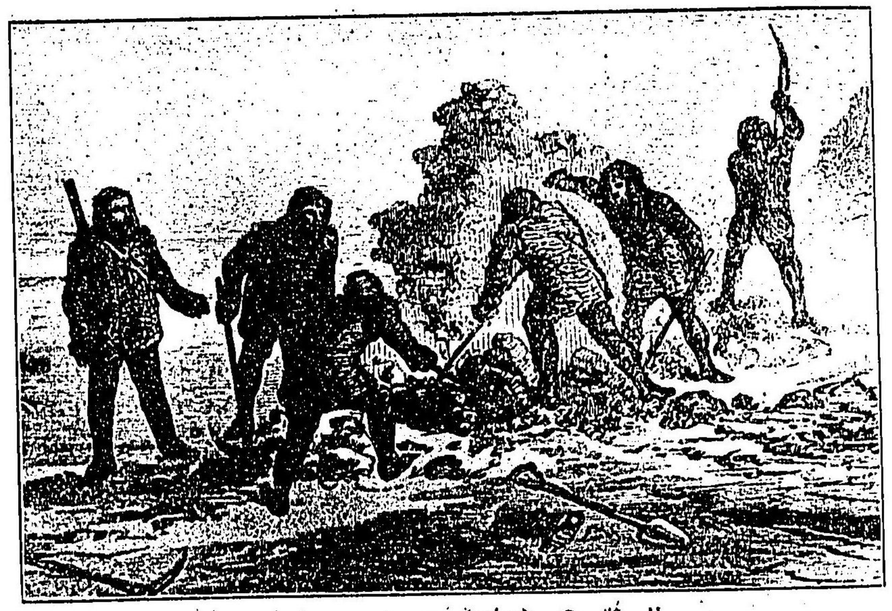
フランクリン

政府の採納する所と成らざりき、されば彼は自ら資を投じ、ブリックスブース(Felix Booth)の助力を受けて遠征隊を組織せしが、ジームスロッス(James-Clark Ross)を伴ひ、汽力に依れる「ビクトリー」(Victory)號に乘じ四次の冬籠を爲して探檢を試みしが、ブーシアフェリックス(Bouthia Felix)半島中に於て磁氣の北極(北緯六九度三四分四五秒四經九四度五四分二三秒)を測定したるの外著しき新事實を世に紹介するを得ざりき(一八二九—三三)、然るにジームスロッスが南極方面に於て好果を收めし爲め北方に於ける探檢事業に活氣を添へたれば、一千八百四十五年を以て「エレブス」號及び「テロル」號の二隻を率ひ北西通路の探査に上ぼれるフランクリンの運命に就きて不安の念の起るや(一八四八海陸を撰ばず搜索を試みしも)の少なからずして、所謂フランクリン探索紀(一八四八——六〇)には陸路に依れるリチャードソン(Richardson)(一八四八)を始めとし、ジームスロッス(一八四八)、レー(John Rae)、ムーア(Moore)、グリンネル(Henry Grinnell)、ケンネディー(Kennedy)、ベロー(Bellot)、ヘプバーン(Hepburn)、ベルチャー(Edward Belcher)(一八五三)、コリンソン(Collinson)(一八五〇——五四)、等二十有餘の遠征隊ありしが、就中マッククリントック

マッククリウアー

は不幸なる遠征の遺物を齎し歸りて悲劇の終末を告げ(一八五七—五九)、マッククリュアーはベーリング海峡より入りて西航を試みて實用上に價値なきも三百五十年來の宿題たりし所謂北西通路の存在を認め得るに至りたり(一八五〇—五四)、然れども通路の全部を航行したる名譽は之をアムンドセン(一九〇三—〇六)に歸せざるを得ず。

マッククリュアー(Robert John Le Mesurier Mac Clure)(1807—1873)は サー ロッス の フ、ランクリン捜索遠征に加はりしが(一八四八)、インデスチゲートル」遠征(一八五〇—五四)の指揮者として北西通路を發見したり、茲に概要を述べんにベーリング海峡より入りて北に進みしが次いで僚艦「エンターブライズ」の司令たるコリンソン(Collinson)に離れバロー岬を廻航し、プリンス・オブ・エールス海峡に於て氷に閉され、冬籠(一八五〇—五一)中橇行探査を施してバンクスランドの島なるを確めしも航行不能の結果として同島の北東岸に二回(一八五一—五二、一八五二—五三)の冬籠を爲したる後、斷然乘船を捨て徒行して西歸せんと爲せしに僥倖にも四來のオースチン(Austin)遠征の橇行隊に邂逅したるを以てメルヴィル島の南方を過ぎりてバロー海峡に出でランカスター海峡を後にしゴドハフンに寄りイギリスに歸着せしが(一八五四)、艦長オスボルン(Osborn)は「北西通路の發見」を著作して マッククリュアー の旅行を記述したり(一八五六)、其の後



ケールン (cairn) の發見

麝香牛 (Ovibos moschatus)

ケールンの發見

北西通路の探求に好望ありと認めたるイギリス政府は南極方面に於て大に活動し來れる多幸の「エレブス」及び「テロル」の二隻を光輝ありて優評を擔える海軍士官ジョンフランクリンに委托してランカスター海峡を經、左右の彎曲に意を留むることなく直進してベーリング海峡に出づべしと訓示したり、フランクリンは百二十九人の乘組と三年間の必需品を登載し、一千八百四十五年の五月二十六日を以て出帆せしが、同年の七月二十六日にバッフィン海の七十四度四十分に於て遠征の二艦が北走するを目擊したりとの某捕鯨船の一報を最後として一千八百四十八年を迎ふるや遠征隊の運命に就きて不安の念は起りたり、フランクリン夫人は勿論、イギリス政府、合衆國、私人等に至るまで甚深なる同情を表し、行方を明にせん、捜索に力を致さんと東より西より、陸路に海路に幾多の遠征隊は組織せられ、準備に於て指揮に於て遺憾なきに拘らず、好果を奏するに至らざりき、さればレヂーフランクリンが最早夫の生存に望みを絶ちたるもせめては悲劇の跡を詳にせんとの熱誠に感動せざるものなかりき、之より先、一千八百五十四年に於てエスキモーが疲勞を極めたる白人を見しのみならず、遠征隊の遺留品なるべしと鑑定せられたる器物を所持せりとの事實に基づきてキングヰリアムランドの南方を探査するの要ありと捜索旅行者の一人なるジョンレー(John Rae)が主張せしことありしを以てマッククリントクは此の最後の探求を試みんと提身し(一八五七)、レヂーフランクリンが財産を擲して購入したる暗車式のヨット「フォックス」(Fox)號に坐乘してバッフィン海に赴き八ヶ月を經てランカスター海峡に達したるが、以後の行路は遮然にもフランクリンのソレと同樣なりき、一千八百五十九年の二月にはブーシアフェリックス半島に於て遠征隊の遺留品を所持せし土人に逢ひ、四月には他のエスキモーより厄難談を耳にするを得又遺骨、器具、橇等を蒐集し、キングヰリアムランドの北端に於て遠征隊の遺書を包藏せる「ケールン」(Cairn)即ち積石塚を發見(五月六日)したり、フランクリンは遠征の前途に望を嘱しつつ一千八百四十七年六月十一日を以て病歿したることより、翌年の四月に至り敗血症の襲擊に堪えざる遠征隊は二ヶ年以來氷塊の捕囚と成りし船を捨て徒歩にてバック(Back)の河口に達せんと志せしも塡氣と饑餓は疲勞に加はりて終に慘憺を極むる全滅を觀るに至りたる次第はマッククリントクが一千八百五十九年の九月に歸國報告したるに依りて明瞭と成りたり。

マッククリウアーは支那海に在ること數年(一八五六——六一)にして將官に進みポーツマスに於て死す。

国に記す、**コリンソン**はマッククリウアーに接せんと勧めつつ海峡の北方に於て七二度二三分の高緯に達し(一八五〇)、翌年にはプリンスオブエールス海峡に入りドルフィン(Dolphin)海峡を經、ケンブリチ灣に達しバーリー遠征の最四點を去ること僅に五十七浬の地に到り、三回の冬籠を爲してフランクリンの捜索に盡瘁し悲劇の地に最も近く接せしも遂に得る所なく、空前の長途を極海に航行したる後、歸國したり(一八五四)。

マッククリントク(Sir Francis Leopold Mac Clintock)(1819—1907)はアイルランドのダンダルク(Dundalk)に生る、海軍に入り(一八三一)て尉官たりし頃、フランクリンの捜索事件起りてジェームスロッスの遠征隊に加はり「エンタープライズ」に乘り込み(一八四八)大に橇の便なるを了れるが、ボースチン(Austin)及びオンマネイ(Ommanney)に隨行して(一八五〇)八十日間に八百二十哩の突征(Raid)を試み「インントレピッド」の司令としてパトリック公島及びメルヴィル島の一部を發見せし際(一八五三)にも百五日間毎日平均十二哩半の橇行を遂げたり、さればフランクリン夫人が自費を以て最後の捜索隊を派遣するに當り擯嘱せられて指揮者と成り(一八五七)キングヰリアムランドに於て一千五百四十二哩を橇行して普く細査を遂げ不幸なるフランクリン一行の遺物を蒐収して任務を完うし、「北極海に於ける「フォックス」(Fox)號の旅行」を公にしたり(一八五九)、海

マッククリントク

軍に復歸するや累進して將官と成り(一八七一)、極地の探檢と終始してサージジョージナーレス(Sin George Nares)が率ひたるヤスカブリ遠征の爲に劃策せし所少からず。

アムンドセン

アムンドセン(Roald Amundsen)はノルゲの人なり、一千九百三年の七月を以て四十七噸のスループ形「ギエア」(Gjöa)號に坐乘してクリスチアニアを發し、一千九百六年の春に至りてサンフランシスコに歸着せしが、此の間に於てキングヰリアムランドの海岸に二回(一九〇三—〇四、一九〇四—〇五)越年して磁極を探求し、第三回の冬(一九〇五—〇六)はアラスカの北岸に於けるキングポイント附近に於て之を過ごしたり。

北東通路

往時ノルトメンはオテル(Other)の指揮の下にドビナ河口に達したりしが(八七〇)、其の後世の忘るる所と成りき、然るにヘルベルスタイン(Herberstein)がロシア圖を公にして(一五四九)白海を極洋の支海とし、オブ河が支那の一湖に注ぐものとせるや、イギリス人は之を利用して極東に達せんと欲し、キルロービー(Sir Hugh Willoughby)は始めて北東通路の航行を企て、北岬を廻りてノワヤゼムリァに達し(一五五三)、次いでチァンセロル(Richard Chancellor)は白海を經てアルハンジェルスクに至り、バーロー(Sterlen Burrough)はメゼン河口、ワイガット(Waigat)島ノワヤゼムリァの南島等に赴き(一五五六)、ペットアルンツ

(Arthur Pett)はユゴル(Jugor)海峡を通過するに至れり(一五八〇)、其の後オランダ人ナイ(Cornelis Naj)及び**バレンツ**(Willem Barents)は該海峡を經てサモイエード(Samojeden)半島に到り、バレンツはノワヤゼムリァの西岸を航して其の北端に達せり(一五九四)、翌年ユゴル海峡は復た氷結せるを以てリイプ(Corneliff Rijp)、ヘエムスケルク(Van Heemskerk)、バレンツ、等の遠征隊は北岬より北方に向ひて道を求め熊島、スピツベルゲン(Spitzbergen)島を發見せり(一五九六)、又ハドソンはスピツベルゲンとグリーンランドとの間にてアジアに到るべき航路を探れるも、ヤンマイエン(Jan Mayen)島を發見せしに過ぎざりき。

ロシア人にはシベリア海岸の探査を試みしものありしが、就中デジネフ(Dejnev)は舊大陸の東端たる東岬即ちデジネフ岬に到達して(一六四八)、一千五百六十六年製の地圖にアニアン海峡(Freetum Anianum)ベーリング海の前名と記されしものを實見せしが、多く世に知られざりき、其の後オホータ海より北航して海峡に入りしも北アメリカの地に接近せしを覺らざりし、ベーリング(Vitus Behring)(一にBeeringに作る)は自己の名を海と海峡とに遺すを得て(一七二八)、グホ

スデフ(Gvosdev)はベーリング海峡及びアメリカの北西岸を確定せしが(一七三〇)、幾多の遠征者ありてシベリアの海岸幷に新シベリア島の地圖を漸次に大成するに至れり。

マリギン(Malygin)及びスクラトフ(Skuratow)はオブ河口に達せしが(一七三六)、ロシキン(Loschkin)はノワヤゼムリアを週行し(一七六〇—六二)、ロスムイロフ(Ro·muilow)は同島が二部より成れるを發見せり(一七六八—六九)、而して其の他の諸國も第十九世期に入りてヨーロッパの北方に幾多の探檢を試み、殊に一千八百五十八年よりは自然科學的探査大に行はれ、一千八百七十三年にはフランツヨゼフランド(Franz Joseph Land の發見ありたり、アジア方面に於てはリエホフ(Ljächow)のリエホフ島及びコテルノイ(Katelnoi)(一七七〇)、サンニコフ(Sannikof)のファッデエイエフ(Faddjejew)(一八〇五)、シロバッキー(Sirovatzky)、の新シベリア(一八〇六)の諸島を發見せるあり、ヘデンストレーム(Hedenström)(一八一二)、アンジュー(Anjou)(一八二二)はリエホフ諸島の探檢を行ひ、ケレット(Kellet)はウランゲルランド(Wrangel Land)を發見し(一八四九)、ベリー(Berry)は同地が

ノルデンシエルド

島なることを知るに至りしが(一八八一)、先之スエリゲの人**ノルデンシェルド**は「ブェガ」(Vega)號に乘じて始めて北東通路の全線を通航したり。

ノルデンシェルド(Adolf Erik Nordenskjöld)(1832—1901)はヘルシングフォルス(Helsingfors)に生れ、地質學を研究せり、一千八百五十八年より一千八百七十六年に至る間に於てスヒッツベルゲングリーンランドの四岸、カラ海、イニセイ河口、等に幾多の探檢を試みタに古來の宿願を解決するに至れり、旅行に要する費用はナンセンがイニセイ河口に向ふ時に出資せるヤクソン(Oskar Dickson)、シビリアコフ(Sibiriakow)の二商人の外、スエリゲ王オスカル(Oskar)よりも補給せられ、其の乘船「アエガ」はパランデル(L. Palander)の操縦の下に一千八百七十八年七月四日を以てノルゲのトロムセ(Tromsö)港を出發せり、カラ海を難なく航過し六週日を出でずしてチエリウスキン岬に達し之より東に進みて九月まで大陸の北岸に沿へる狹き自由水を航し得たるも四經百七十三度半下にありてベーリン海峡を距ること僅に百八十粁のコリウシン(Koliuschin)灣附近にて氷の爲に進航を妨げられて同處に越年し一千八百七十九年七月更に進行を始めてベーリング海峡に出で、南アジアを經て歸國したり、氏は北極洋旅行中各處に於て測量、探檢、等の業に從事せしを以て多くの日子を要し遂に越年せざるべからざるに至りしも、單に水通路を通航せんには四ヶ月以内にて足るべしと云ふ、然れども學術上多大の稗益を與へたる水通路は實業上に便利を呈供すべしと信ず

る能はざること尙ほ北西通路に於けるが如し、歸國後又西岸よりグリーンランドの內部を探査せり(一八八三)、「アエガ」號座乘アジア及ヨーロッパの巡航、グリーンランド等の著あり。

北極到達　北極の到達はグリーンランドの東(甲路)或は西(乙路)幷にベーリング海峽(丙路)の三途より試みられたるが、遂に乙路は成功を見たり。

グリーンランドの東方より到極旅行を企てしもの少なからざりき、第十九世期の前半に於てスコレスビー(Scoresby)(一八一〇—二二)、ブハン(Buchan)及びフランクリン(Franklin)(一八一八)、サビーン(Sabine)及びクレーブリング(Clavering)(一八二三)等が氣候、海洋、生物、振子運動等に就きて調査せる後、パーリー(Parry)なるものあり、橇に乘じてスピッツベルゲンより始めて北緯八十二度四十五分に達し(一八二七)、バイエル(Payer)及びワイプレヒト(Weyprecht)の率ひたるエストルライヒウンガルン北極探檢隊はフランツヨセフランドを發見し、八十二度五分に達せり(一八七二—七四)、其の後「フラム」(Fram)號に座乘し氷塊の流致を利用して八十六度十三分六秒に到れる**ナンセン**あり(一八九五)、尙ほ二十

分五十四秒を北進したるアブリッツ公遠征隊のカグニ(Cagni)あり一九〇〇、チャンプ(Champ)も到極旅行を試みしがカグニを凌駕すること能はざりしき(一九〇五)。

ナンセン(Fridtjof Nansen)はノルゲの人にして一千八百六十一年を以てクリスチアニア附近に生れたり、ベルゲン(Bergen)の博物館長と成り、南部グリーンランドを東岸より西岸に横斷し(一八八八)一千八百九十三年八月を以て「フラム」(Fram)號に坐乘しクリスチアニアを出發せり、同船はアジアの北西岸に沿ひて航行し、秋季に至りエホフ諸島の北(北緯七十八度四十五分)に於て「パック」(Pack)(氷塊原)に入り、冬季に於ては四方に誘致せられしが、北緯八十四度に於て同人は船を去り、徒步して一千八百九十五年四月七日を以て北極を距ること四百十五粁即ち北緯八十六度十三分六秒に達し而してフランツヨセフランドにて越年して八月十三日ノルゲのアルデ(Vardö)に歸着したり、又スフェルドルプ(Sverdrup)の指揮の下に一千八百九十五年十一月に於て北緯八十五度五十七分に達せる「フラム」號は八月二十日を以て歸國したり(一八九六)、グリーンランド横斷、夜及び氷の著あり。

附記す、一千八百八十六年、一千八百九十四年の二回にアジア、ロシアの北方に於ける群島を探査せるロシア人トル(Toll)は「サルイア」(Sarja)號に乘じて

東に向ひタイムイル灣を精査しタイムイル河口を探りチェリウスキン岬を廻り、新シベリア諸島方面に旅行せり(一九〇二)而して其の運命を知らんが爲に一千九百三年コルチャク(Koltschak)等アジアの北方に至りしも得る所多からざりしに似たり。

グリーンランドの西方より北極に達せんと試みし者も甚だ多し、アメリカ人のイングルフィールド(Inglefield)はスミス(Smith)海峡の入口に達し又イオネス(Jones)海峡の狀況を探れるが、始めて自由海説を唱道したり(一八五二)、ベルチャー(Sir Edward Belcher)はグリンネルランド(Grinnell Land)に達し、ケーヌ(E.K. Kane)は北緯八十度四十分の北に自由海の存在を報告せり(一八五三)、茲に於てアメリカはヘース(Hayes)をして探檢せしめたるが、同人は北緯八十一度三十五分に進みてスミス海峡の精査を行へり(一八六〇—六一)、次いでホール(Ch. F. Hall)は「ポラリス」(Polaris)號に坐乘してロブソン(Robeson)海峡に赴きて八十二度十一分に達し(一八七一)、イギリス人ナーレス(Nares)は同海峡に於て八十二度十五分(一八七五)、マーカム(Markham)は稍に依りて八十三度二十分二十六秒に達して自由海の存在を否認せしが(一八七六)、ロックウード(Lockwood)は橇を用ひて北緯八十三度二十四分五秒、西經四十度四十五分の地に到れり(一八八三)。

ナンセンが北極旅行に成功せし後、ノルゲ人スフェルドルプ(Otto Sverdrup)はエルスメアランド(Ellesme-Lmad)に少なからざる陸地を檢出して、北極地方圖にフランツヨセフランドの發見以來未だ匹儔を見ざる變動を與へたり(一九〇〇—〇二)、又アメリカ人ピーリー(Peary)はグリーンランドが一島なるを認めしのみならず、一千九百二年にはマーカムの到達點以北即ち北緯八十四度十七分に進み(一八九九—一九〇二)更に八十七度六分に達したり(一九〇五—六)、又「ダンマルク」(Danmark)號の遠征はグリーンランドの東岸に沿ひて北上し北緯八十三度三十分に達し、同地の島たるを確定せしのみならず、地形學上資する所多かりしも、主長エリヒゼン(Mylius Erichsen)の死を悲まざるを得ざりき。(一九〇六—〇八)、又ピーリーは第七回の旅行に於て北極到達を試み遂に目的に達するの榮譽をを得たり(一九〇九)。

ピーリー(Robert-Edwin Peary)は合衆國ペンシルファニアのクレッソンスプリングス(Cresson-Springs)に生る(一八五六)、技師として海軍に入り(一八八一)、ニカラグア運河の設計に關する地形測量に從事せしが(一八八五——八七)一千八百九十一年以來專ら新世界の北境に於ける海陸の探査に身を委れたり、ザスコ灣に赴き、インランドシスに百六十粁の蹈査を爲して豫行(一八八六)を試みたる後、夫人を伴ひ「カイト」(Kite)號に乘してグリーンランドの西岸マックコルミック(Mac Cormich)に到着し、之より橇行してホエールスンド(Whale Sund)イングルフィールド灣、ブンボルト氷河等を探檢し北東端のインデペンデンズ灣に達し、ピーリー海峽を發見してグリーランドの島性を明確ならしめ、同海峽の北方にメルヴィル及ハイルプリン(Heilprin)の二「ランド」の存在を紹介し、幾多の氷河に命名して本國に歸れり、之を第一回の旅行(一八九一——九二)とす、翌年「ファルコン」(Falcon)號に乘じ夫妻同道にて第二回の旅行を試みしも不成功に終りたり(一八九三——九五)ヨーク岬に二回一八九六一八九七の往復を爲したる後、第五回の旅行(一八九九——一九〇二)として「ウインドワード」(Windward)號遠征隊を率ひし際には、橇に依りて四經六十五度北緯八十七度十七分に達し「ルーズヴェルト」號に坐乘して第六回の北征を試みて北緯八十七度六分に到りしが(一九〇五——〇六)第七回の征旅(一九〇八——〇九)には一千九百九年四月六日を以て北極に到達して年來の宿願を解決したるの榮譽を得たり。

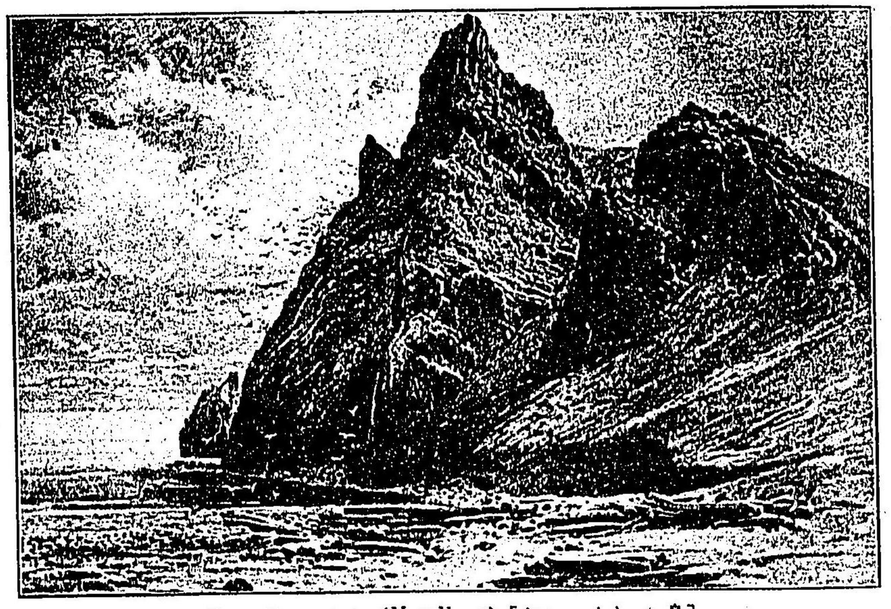
シェリダン岬に冬籠を爲し準備の調ひたる後、一千九百九年二月十五日を以て同

處を發せしが、遠征隊はアメリカ人五名、忠僕黑人ヘンソン(Matthew Henson)、エスキモー人十七名より成りて百三十三頭の犬、十九座の橇を有せり、コロンビア岬(北緯八十三度)を去りて氷塊に移りしが(三月一日)自由の水道ありて先進を妨ぐることを一週日(三月四日より同十一日まで)に及びたり、エスキモーが夜毎に俄造せる「イグルー」(Iglon)(氷雪小屋)に舍營しつつ北進し、八十七度に達せし頃に危ぐも突然現出したる「クルアフス」(罅裂)の間に墜落するの難を免れしが、北來の寒烈風は氷塊を南方に押戻したるを以て一行は約百哩の行程を損失したり、北緯八十八度に達せしとき船長パルトレットに別かれ僅に黑人ヘンソンと四名のエスキモーを伴ひて突征を試み、四月二日より二百二十二粁を氷原上に强行して同六日を以て北極に到達したり、天氣が其好なりしのみならず、氷面は堅く雪なく僅に粒狀を呈するに過ぎずして困難ならざりき、處々に結氷せる藍色の小池の散在するを望見せしが、溫度は最低零下三六、一にして最高は同二四、四と註されたり、北極に止まること三十時間にして歸途に就き、十七日間に七百八十粁を越えて四月二十三日にはコロンビア岬に到り、同二十七日には「ルーズヴェルト」號に乘り移り、七月十八日を以て同號は冬營地を離れたり。

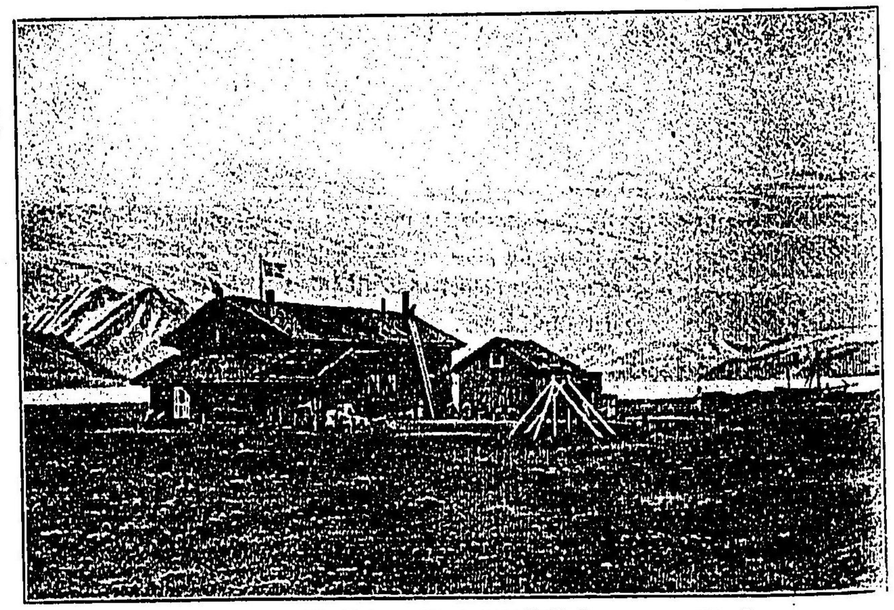
ロンドン地學協會々報所載に基づきてグリーンランドの西方より試みられたる到極旅行に關する梯點表を作れば左の如し。

年次	月	日	旅行者	北緯度	北緯分	北極よりの粁
一五八七	六	三〇	ジョン デービス(John Danis)	七二	一二	一八六六
一六一六	七	四	キリアム バッフィン(William Baffin)	七七	四五	一三六一
一八五二	八	二七	イングルフィールド	七八	二一	一二九四
一八五四	六	二四	キリアム モアートン(William Morton)ケーネスの遠征隊	八〇	三五	一〇四六
一八七〇	八	三〇	ホール(C. F. Hall)	八二	一一	八六八
一八七六	五	一二	マーカム(A. H. Markham)(ナーレスの遠征隊)	八三	二〇	七四〇
一八八二	五	一三	ロックウード(Lochwood)及びブライナード(Brainard)(グリーリの遠征隊)	八三	二四	七三三
一九〇〇	五	一六	ピーリー(R.—E. Peary)	八三	五〇	六八五
一九〇二	四	二一	ピーリー(R.—E. Peary)	八四	一七	六三五
一九〇六	四	二四	ピーリー(R.—E. Peary)	八七	六	三二二
一九〇九	四	八	ピーリー(R.—E. Peary)	九〇	〇〇	〇

ペーリング海峡に依りての試航に就きてはアメリカ人ドロング(Ch. de Long)は「ジャンネット」(Jeannette)號に坐乘して旅行せしが、不幸にして海流の爲に北西に壓致せられ、氷塊の壓迫を受けて北緯約七十八度の地點に於て沈没したり(一八七九—八二)此の旅行に於て新シベリア群島の北東部にジャンネッ



フォーゲルベルヒ (Vogelberg) [ヤンマイイエ島]



アドブェント灣 (Advent-Bay) 岸の旅館 [スピツベルゲン]

ト、ヘンリエタ(Henrietta)、ベンネット(Bennett)等所謂ドロング群島の發見ありたり(一八八一)。

極北陸地　本陸地を分ちて三部と爲す、ヨーロッパの北にヤンマイイェン島、ビーレンアイランド、スピッベルゲン、フランツヨゼフランド、ノワヤゼムリヤ等あり、アジアの北に寂寥島、新シベリア群島、ウラシゲル島等あり、アメリカの北に極北群島、グリーンランド、等あり。

ヤンマイイェン(Jan Mayen)島　ハドソンスタッチ(Hudsn's Tutches)(一六〇七)にしてヤンマイイェンが再び發見(一六一一)する所に係れりはイスランドの北北東五百五十粁に於ける無人の小火山島(四一三方粁)なるが山岳(最高處一九四三米突)多く氷河に被はる。

ビーレンアイランド(Beeren eiland)即ち熊島はスピッベルゲンの南にある無人島なり、氷島を發見したるバレンツは巨大なる白熊に因みて此の名を與へたるが(一五九六)、六百七十方粁の圓島にして極洋唯一の良錨地を有し、魚類に富めりと云ふ。

スピッベルゲン(Spitzbergen)火山諸島の義は**バレンツ**、**リイブ**及び**ヘエムスケルク**に發見(一五九六)せられ、爾來海獸捕獲者の往復少なからずして近時に於てはソルデンシェルド、其の他の北極探檢者の基點と成りしが、**コンエイ**(Conway)は

第一縱斷者たるの名譽を得たり(一八九六—九七)、數年を經て此の地に赴けるスエリゲ—ロシアの緯度觀測隊は學術上少なからざる効果を收めき(一八九八—一九〇二)、イザハゼン(G. Isachsen)(一九〇六)及びブルース(W. S. Bruce)は探査を試みたりしが、群島は二大島(西スピッベルゲン、北東地)四中島(プリンスカルル、エドガ、バレンツ、キングカルル)及び數多の小島より成りて北緯七十六度二十六分乃至八十度三十分の間に位し、約七萬方粁の地積を有し高山氷河に富みて純粹なる極候を有するが夏季には遊覽者少なからず。

ギレスランド(Giles Land)イギリス(Gillis)とも記すはオランダ人ギレス(Cornelius Giles)に由て發見せられしが、近年に至りて再び發見せられたり、スピッベルゲンの北東地の東にあるが一島なりや群島なりやは判然せず、恐くはフランツヨセフランドの屬島なるべし。

フランツヨゼフランド(Franz Joseph Land)はワイプレヒト及びバイイルの率ひたるエステルライヒ—ウンガルン探檢隊に由て發見せられ(一八七三)、スミス(Leigh Smith)は其の南岸を探査し(一八八〇—八二)ジャックソン(Jockson)は三年(一八九四—九七)間滯在せしが、同人に從へば本群島の西部はオランダの人ギレスの視覺に觸れしものの如し、又オランダ人が第十八世期に於て公にしたるユルツェン(Urtsen)の書に基づきて主張する所に從へばロウレ(Cornelius Roule)が發見せしノワヤゼムリアと同經度にて北緯八十四五度に位し數多の島嶼より成る陸地は本群島たらざるべからず、二大島ジヒー(Zichy)及びキルクツェク(Wilczek)其の他數多の島嶼を包含する本群島は玄武質にして二十二萬方粁の地積を有し、スピッベルゲンに似たる地勢を呈し、リヒトホーフェン山(一五三〇)を以て最高處と爲す、低度の寒流に洗はるるが故に氣候寒烈にして僅に地衣蘚苔の產するあるのみ。

ノワヤゼムリ(Nowaja Zemlia)即ち新地は第十一世期に於てノブゴロッドの獵夫の認むる所と成りしが、キローピーに再び發見(一五五三)せられたる陸地なり、北緯七一度三一分と七七度との間に位し九萬一千方粁の地積を有す、マトッチキン(Matotchkin)海峽に依りて南北の二島に分たるるを知りたるロスムイスロフ(Rosmysloy)(一七六八—六九)の外、ルトケ(Lütke)(一八二一—二四)、パフツソフ(Pakhtusow)(一八三二)、ノシロフ(Nossilow)(一八八七—九二)等來訪せしもの

少なからざるも内部の探査は未だ充分ならずして地脈はウラルに連續するが如し、植物に乏しきも水産動物に富めるが故に外人の來漁すること少しとせず、定住者は僅少にして七十人内外に過ぎざるが西岸のマトチキンシャルに於ける平均温度は二月の零下二二度、七月の四、五度、年の零下八、三なり。

エンソミイエド(Ensomiied)即ち寂寥島はノルゲの人ヨハンセン(Johansen)の發見に係りて北緯約七七度、東經約八五度に位する小島(二〇二方粁)なり。

新シベリア群島はリエホフ(Ljächow)諸島、新シベリア(アンジュー)諸島、ドロング諸島の三部に分かれ約二萬六千方粁の地積を有せり、其のリエホフ諸島はワギン(Wagin)に依りて發見(一七一一)せられ、リエホフ(Ljächow)に依りて始めて踏査(一七七〇)せられしが、其の後コテルノイ(Kotelnoi)(一七七三)、ファヂエイエフ(Fadjeiew)(一八〇五)、新シベリア(一八〇六)の各島發見せられ、ヘデンストレーム(Hedenström)(一八〇九—一一)、アンジュー(Anjou)(一八二八)、ブンゲ(Bunge)及びトル(V. Toll)(一八八五—八六)等の來訪探査するありき。

ウランゲル(Wrangel)島はドロングの發見(一八六七)に係りてベリー(Berry)島なることを眞實なりとせり(一八八一)。

アメリカ極北群島は二列に分かれ、南列は西の方バンクスランドに起りて東の方バッフィンランドに終り、北列はバーリー群島を組成せり。

バンクスランド(Banksland)は本群島の最西に位する島にして(北緯七一—七四、西經一一四—一二五)バーリーの發見に係りマッククリュアーの踏査を受けたり。

アルバート(Albert)、**ワラストン**(Wollston)、**ビクトリア**(Victoria)の三ランドはプリンスエールス海峡の東にありて一大島を爲すべしと認めらるるも北東の海岸に未探の地あり。

プリンスエールスランド(Prince Wales Land)及び新ソンマーセットランド(New Somnerset Land)の二島はブーシア半島の北西及び北にありてキングキリアムランド(King William Land)は同半島の南西にあり。

バーリー群島はプリンスパトリック(Prince Patrich)、メルヴィル(Melville)、ベサースト(Bathurst)、ノースデヴォン(North Devon)の四大島、其の他若干の島嶼を包括せるがフランクリン捜索紀の頃(一八四八—五四)に順次に發見せられたり。

バッフィンランドは群島の最東部に位するも一大島にしてコックバーン、プリンスキリアム、ノースガロエイ、カンバーランド、ペンニー等の數ランドに分稱せらる、島内に未だ踏査を經ざる地多きのみならず海岸にも尚ほ不明なる處少なからずして東岸は高壁なるも晋人の居住を拒まざるが如し、氣温はグリーンランドに比し一層低下にあり

並しバフィン海には寒流ありて陰霧、氷塊夥しく航行し得るは僅に東岸の沿海あるのみなり。

グリーンランド(Greenland)の發見は西紀一千年の頃イスランドの漁業者が近海を往來せし際にして、當時多少の移住者ありき、一千百三十五年には北緯七十二度五十五分に達し、一千二百六十六年にはランカスター海峽に達せるものありたるも第十三世期の末に至り航通は中絶したり、然るにイギリス人フロビシャー(Martin Frobisher)は三回(一五七六—七七—七八)の旅行に依りて再び本島を檢出せしより以來、北西通路探索熱の流行に伴ひてデービス(John Davis)は西岸の七十二度十二分の地に達して荒涼地(Land of Desolation)の名を與へ、ハドソン(Hudson)は東岸の北部に、バイロット(Bylot)及びバフィン(Baffin)は西岸の北緯七十八度にまで赴き、オランダ人は西岸を精査せりと云ふ、其の後ワルー(Walloe)はゴタアブ(Godthaab)より東岸のネネゼ(Nenese)島に(一七五一)エゲード(Paul Egede)は西岸の北緯七十二度四十八分、東岸の六十度九分まで調査せるが(一八〇六—一三)、スコレスビー(Scoresby)は北緯六十九度三分より七十五度まで探檢してスコレスビー　峽　見し(一八二二)、クラベリング(Clavering)及びサビイン(Sabine)、グラー(W. A. Graah)(一八二八—三二)等も各得る所ありしが、ブロスブイル(Jules de Blosseville)の坐乘せるフランス船ラリロワーズ(La Lilloise)號は其の行術を知らず(一八三三)。

一千八百六十九年より翌年に亘れるドイツ人の探檢は七十七度一分に達したるのみなず、フランツヨゼフ峽灣を發見せるが、北緯六十六度以南の東岸はダンマルク人ホルム(Holm)之を探査せり(一八八三—八五)、而してノルデンシェルドはダン(Dan)岬附近に(一八八三)、ライデル(Ryder)はスコレスビー海峽に(一八九一—九二)、ナトルスト(Nathorst)はフランツヨゼフ海峽を研究せしも(一八九九)、七十七度以北の東岸は殆んど全く知られざりき、反之西海岸地方はノルデンシェルド、リンク(Rink)、ドリガルスキー(Drygalski)(一八九二—九三)の旅行の外、北極に達せんとする旅行者の通過頻繁なりしを以て、其の狀況は比較的よく知られたり、北岸に就きてピーリー(Peary)は一千八百九十二年フンボルト氷河の南に於けるマクコルミク(Mc Cormick)灣を出發し、北緯八十一度

三十七分、西經三十四度に達して本地が島なるべきを豫想せり。

グリーンランドの內部に就きてはパールス(Claus Enevold Paars)(一七二八)ダラグル(Lars Dalager)(一七五一)の失敗の後、ヘース(Hayes)ありて「インランドシス」氷層に達したるが(一八六〇)、此の頃レー(John Rae)、キンバー(Whymper)(一八六七)も又當地に活動せり、次いでノルデンシェルド及びベルググレン(Berggren)(一八七〇、八八三)ピーリー(一八八七)は「インランドシス」を調査し、ナンセンは東岸のウミヴィク(Umivik)より西岸のゴタアブに出でて南部の橫斷に成功し(一八八八)以て內部が氷に依りて蔽はるるを確めたり。

此の後二十餘年の間にグリーンランドの海岸は漸く探檢するもの多かりしが、殊にアングマグサリク(Angmagsalik)及びセルミリク(Sermilik)の二峽灣に於けるクルウゼ(C. Kruuse)(一九〇一——〇二)、タシウサク(Tasiusak)峽灣及びヤコブスハーフンス、アイスストローム(Jakobshavns Eisstrom)氷河に於けるエンゲル(Engell)、メルビル(Mevlille)灣、ヨーク(York)岬間の測量を目的とせるエリヒゼン(Mylius Erichsen)等あり、一千九百三年ブルウン(D. Bruun)は考古學的旅行を西岸に試みて百ヶ處以上の古蹟を發見し、エリヒゼン(M. Erichsen)も亦地理學に資する所ありたり(一九〇三——〇四)、一千九百五年に至りてはタルビッツェル(W. Thalbitzer)は西岸のヂスコ(Disko)及びエゲデスミンデ(Egedesminde)地方を調査して東岸に出でんとし、ジェルラーシ(A. de Gerlache)の指揮せる「ベルジカ」號のオルレアン(Philippe d'Orléans)公の遠征隊はフランツヨゼフランドよりグリーンランドの東岸に向へり、而してエリヒゼンは東岸に沿ひて北上し北緯八十三度三十分の地點までを探査して當地方の島たるを確認したり。

本島は二百萬方粁以上の地積を有し、北アメリカの北東部を占め北緯五十九度四十五分乃至八十三度三十分の間に亘れるが、大西洋北部の陷落は東岸をして三千五百米突まで隆起せしめし結果、氷雪の被覆たる「インランドシス」の發生を促し、西方に於て僅に八萬八千餘方粁の露地を遺こすに過ぎず、寒極の一に當れるも九月に海拔二千五百米突に於て零下四十五度南西岸の一部には植物の茂生を見ざるに非ずして「ホカ」(Phoca)の產に富めり。

グリーンランドの北西に當りスミス、ケンネディー、ロビソン等の海峽井にケーヌ

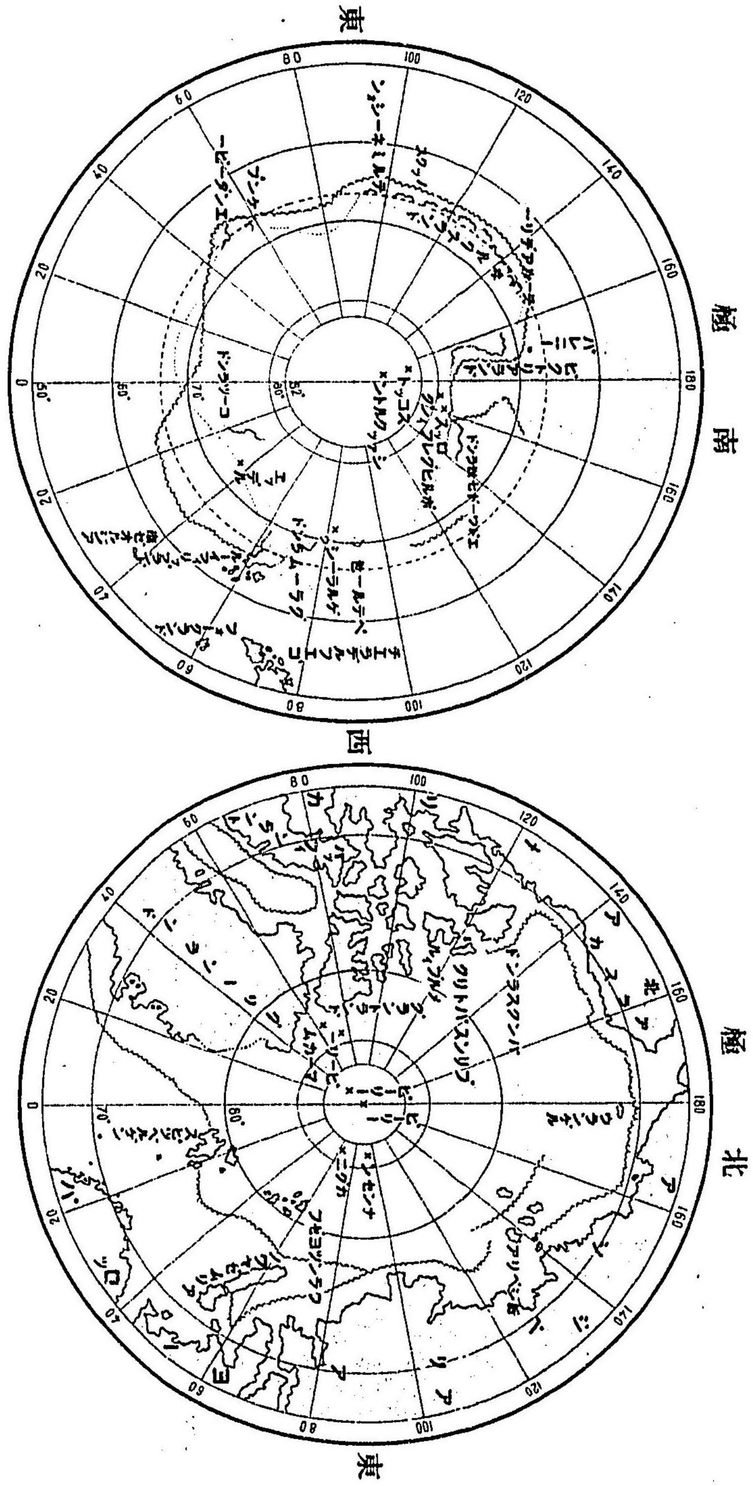
海を挾みてグラント(Grant)、グリンネル(Grinnell)、エレスメーア(Ellesmere)等の數ランドより成る一大島あり、アルドリック(Aldrich)はグラントランドの北岸を踏査して北緯八二度一六分の地點に達し(一八七六)、オットスヴェルドルプ(Otto Sverdrup)は同ランドの南岸を探査し(一九〇〇—〇二)、ピーリー(R.—E. Peary)は北岸及び西岸を踏査したり(一九〇五)。

グラントランドの南西に當りナンセン海峽を隔ててピーリーがゼザップ(Jesup)ランドと名づけ(一八九八)、スヴェルドルプがアクセルハイベルヒ(Axel Heiberg)ランドと命ぜし陸地あり、其の西にエレフリングネス(Ellef Ringnes)ランドあり。

尙ほピーリーはグラントランドの西方の海上に新陸の存在を報じたり(一九〇六)又北東にはピーリー海峽を隔ててハイルプリン(Heilprin)、メルビル、くッヘン(Hazen)等の數ランドより成れる一島あり、其の合衆國岸のモリスセザップ(Morris Jesup)岬は世界最北の陸點(八三度二九分)と認めらる。

B 南極方面

南極方面に於ける探險遠征は所謂南大陸の存在を確めん爲に創始せられしが、或は好奇心の誘致する所と成りて南極到達の希望を充たさんと圖り或は研究心の促催する所と成りて各種科學の進歩に資すべき材料、事實



等を蒐集せんと務むるに因り繼續せられて今日に至れり。

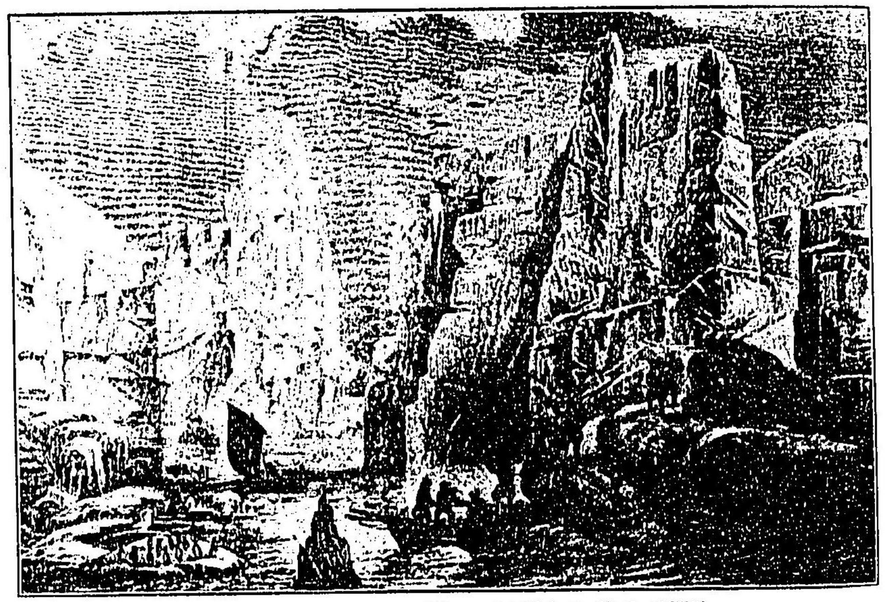
極南探檢 當方面に於ける旅行者はオランダ人のヂルクゲルリッツ(Dirk Gherritz)が南極圈を越えざりしも南緯六十四度に達したりとする説あり南シェットランド(South Shetland)諸島を發見(一五九九)せるを始めとし、クロゼー(Crozet)諸島を檢出せるマリオン(Marion)(一七七二)、ケルゲラン(Kerguelen)島に於けるケルゲラン(Yves J. Kerguelen Tremaree)(一七七二)ありて有名なるクック(James Cook)は一千七百七十二年より一千七百七十六年までの間に於て三回南極圈を通過し頗る發見せる所ありき。

クックは「レゾリューション」(Resolution)「アドベンチュア」(Adventure)の二船を率ひてケープタウンより出發し、南進して東經七十度南緯六十七度十五分に達せる後、東進しニウジーランドに歸着せるが(一七七二——七三)次回の旅行(一七七三——七五)に於ては南緯七十一度十分、西經百六度五十四分下に於て「パック」及び氷壁の妨ぐる所と成りしも、前進を續け、一千七百七十五年には南ジョージア(South Goorgia)島、サンドヰチ(Sandwich)諸島に至りて歸れり、而して第三回の旅行(一七七六)に於てはエドワード公(Prince Edward)諸島、ケルゲラン諸島を精査せり。

クックの報告は南極方面の旅行を奬勵するの價値なかりしにや、四十年間新旅行を企つるものなかりき、一千八百十九年に至り捕鯨者スミス(William Smith)は南シェットランドの眞の發見者たるの名譽を得しが、ロシア人のベリングハウゼン(Bellinghausen)が南ジョージアを踏査し、サンドヰチ諸島に活火山を認め、ペテル一世(Peter Ier)ランド及びアレクサンデル(Alexander)ランドを發見したる際には未探檢地域を周航し適處に於て南極圈を打越え南進を試みたるも氷塊の密集、强力の暴風等に妨げられ、南緯六十九度四十五分以上に到達するを得ざりき(一八一九—二一)。

ベリングハウゼン

爾來毎歲南方の高緯度に對して遠征を試みし者なきにしもあらざりしが、多くはオット獸其の他の海獸を捕獲するを目的とせしを以て地理學上に貢献する所少なかりき、ポエル(Powell)は南オークニー(South Orkeney)に赴き(一八二一)、エッデル(James Weddell)は南ジョージアの南方に於て南緯七十四度十五分に達し自由通路の存在を主張したりき(一八二三)、次いでビスコー(Biscoe)はエングービーランド(Enderbyland)、グラームランド(Grahamland)、ビスコー諸島を



テール アデリー(Terre Adélie)の發見(1839)

エレブス(Elebus)火山[ビクトリアランド]

(一八三〇—三二)ケンプ(Kemp)はケンブランドを(一八三四)バレニー(John Balleny)及ビフリーマン(Freeman)は南緯六十六度四十四分下にて火山質のバレニー諸島を發見したり(一八三八)、然れども此等の遠征には勇進猛邁に缺くる所なきやを疑はしめ、就中エッデルが南往上に於て最惠の好機を逸したるは事實なりと認めらる。

其の後、有名なるガウス(Gauss)が地磁氣に關する書を著はしたる際(一八三八)南極地方の探檢を以て學術上又は實用上に有利なるを主張せし結果、フランス、アメリカ、イギリスの如き、海事思想に富める大國民中に興論を喚起するに至れり。

フランスのデュモ・デュルビイ(Dumont d'Urville)は「アストロラーブ」(Astrolabe)及ビゼレー(Zélée)の二隻を率ひて遠征を試みラテールルーイフィリップ(La terre Louis-Philippe)及ビジョエンビイユ(Joinville)島(一八三八)、ラテールアデリー(La terre Adélie)及ビラテールクラリー(La terre Clarie)(一八四〇)を發見したり。

アメリカのキルクス(Charles Wilkes)は五隻の船を以て遠征隊を組織し、東

經九十五度乃至百六十六度の間に於てアメリカの南方にパルマーランド(Palmer Land)を發見し、オーストラリアの南方、アデリーランドの西方に幾多の陸地を遠望してキルクスランドと概稱せしが、其の存在には多少の疑なき能はず(一八三九——四二)。

ジェームスロッス

イギリスの**ジェームス　ロッス**(James Clarke Ross)は「エレブス」(Erebus)及び「テロル」(Terror)を率ひて南往し、ビクトリアランド(Victoria Land)を發見し、活火山エレブス(三七六八)及び消火山テロル(三三一七)の麓を通過したり、然れども五十乃至百米突の高さを有する氷壁の前途に横はるありて七十八度十分以上に趣くを得ざりき。

ジェームスクラークロッス(1800—1862)は ロンドンに生る、ジョン ロッス(John Ross)(一八二九—三三)、パーリー(Parry)(一八一九—二七)と共に北極探檢を試みしが、更に「エレブス」(Erebus)「テロル」(Terror)の二船を率ひて南極旅行(一八四〇——四三)を爲せり、ケルゲランを發見、タスマニアに暫時滯留したる後、一千八百四十一年一月一日を以て南極圈を超え南緯十九度十五分、東經百七十六度七十五分に於て「バッグ」に入り、南緯七十二度三十分に於てサビイン(Sabine)山を發見し、アダール(Adare)岬より南に進みし時、磁針の傾角が八十七度なるを認めしを以て磁石の南極は南緯七十六度東經百四十五度二十分と計算せられたり、而して此の月十二日イギリス女皇の名に依りて一大陸地即ちビクトリアランドを占領し、七十八度四分下に二大火山を見たり、其のエレブス(三七六八)は活動せるも、他の一たるテロル(三三一七)は否らざりしと云ふ、此の時高さ五十米突の氷壁の海水中より屹立しありしを以て前進する能はず乃ち之に沿ひて東進し東經百六十七度に至り、磁極に到着せんと試みしも、二百五十五粁以内に近づく能はざりき、此の年より翌年に亘れる冬季の間ロッスはオーストラリアにありしが、翌年新旅行の途に就き南緯七十八度九分三十秒、四經百十六一度二十七分に達し、フォークランドに長らく滯在せり、一千八百四十二年の第三旅行に於てはジョエンヴィイユ島の東岸を見、幾多の小島を發見しエッデルの航路に從ひて南緯七十一度半に達し、豐富なる科學的の獲物を携へ本國に歸着したり(一八四三)、其の後「エンタープライズ」(Enterprise)及び「インベスチゲートル」(Investigator)の二船を指揮してフランクリンの捜索に赴けり、著書あり、南方及び南極洋に於ける發見及探檢旅行と云ふ。

好奇心が他の方面に向ひし結果にやロッスの後は三十年を無爲に經過せしが、一千八百七十四年に至り「チャレンジャー」(Challenger)號はナーレス(Narcs)の指揮の下にケルゲラン、ハード(Heard)、マクドナルド諸島を調査して南緯六十七度五分に達せしが、金星觀測を目的とせるドイツ船「ガッゼル」(Gazelle)號はイ

ギリス及びアメリカ二國の船と共にケルゲランを精査し、ダルマン(Dallmann)はグラームランドの北西岸に於てカイゼルキルヘルムス島を發見せり、次いで「ヤソン」(Jason)號の船長ラルゼン(Larsen)はルーイフィリプランドとグラムランドとが離隔せるを確めて南緯六十八度十分、西經六十度に進み、歸途二ヶの活火山即ちクリステンゼン(Christensen)及びリンデンベルグスッカーフート(Lindenbergs Zuckerhut)を發見し(一八九二——九三)ヘルタ(Hertha)號の船長エフェンゼン(Evensen)の南緯六十九度十分、西經七十六度十二分に達せるあり、ノルゲ船アンタルクチク(Antarctic)に乘り込みしボルヒグレフィンク(C. Egher Borchgreuink)はバレニー島、アダール岬、ゴッス海、等を視察し(一八九五—九六)ドイツの深海測量船「ファルヂビア」(Valdivia)は一千七百三十九年に知られたるブーベー(Bouvet)島の再發見を爲したり(一八九八——九九)而してドジェルラーシ(de Gerlache)の坐乘せる「ベルジカ」(Belgica)號は一千八百九十八年一月を以てスターテン(Staaten)島を去り、南シェットランド島を訪ひ二十の地點にて科學的採集を行ひ、アレクサンデルランドの西に於て南極地方第一回の越年を試み、學術上益せし所大なりき(一八九七——九九)ボルヒグレフィンクは「サウザーンクロッス」に坐乘して再度の探檢を行ひて當時人類到達の最南點たる七十八度五十分の緯線に進みヨーク島を發見し磁極の地を測定したり(一八九九——一九〇〇)第二十世期の初年に當りては三大探檢隊ありてドイツはドリガルスキーの下に「ガウス」號を派遣し(一九〇一——〇三)スエリゲの遠征隊はノルデルシェルドの指揮を受け(一九〇一——〇四)イギリスのスコットは「ヂスカバリー」號に坐乘して(一九〇一——〇四)所定の方面に活動したり。

ドジェルラーシ(de Gerlache)は三檣船「ベルジカ」(Belgica)に坐乘してアンブェール(Anvers)を出帆し(一八九七年八月十八日)マガリァネス海峽に入りプンタアレナス(Punta Arenas)及びウシュアイア(Ushuhaia)を經過し、一八九八年の一月を以て巡航に就きたるが、ジェルラーシュウ海峽を發見したる後、ヂルクゲリッツ(Dirk Gherritsz)パルマー(Palmer)等の地を探査し、西に航して南緯七一度三一分、西經八五度一六分の地點に達せしも二月五日を以て終に氷の爲に圍まれ、十三ヶ月間を氷雪の中に過ごしたり、南緯七〇度、西經一〇二度の地點に於て離氷

し(一八九九年三月十四日)、同年三月二十八日を以てプンタアレナスに歸着したり、本旅行はチエラデルフエゴの南方に於ける海陸に關する地圖を正確に爲したるのみならず、各種の科學的觀測を實行せしめしが殊に大膽なる冬籠りは學術研究上に一新生面を開きたり。

ボルヒグレフィンク

ボルヒグレフィンク(Egbert Borchgrevink)はノルゲの捕鯨船「アンタルクチク」に乘り込みてオーストラリアの南方に巡航を試みしが(一八九四——九五)、サー ジョージ ニューンス(Sir Georges Newnes)の保護の下に遠征隊を組織し、サウザーンクロス」(Southern Cross)號に坐乘してアダール岬に赴き(一八九九年二月)、越年の後、數箇處に上陸を試み、七八度五〇分の地に進み、地質學上興味あるヨーク島を發見し、其の他、ネルソン島、ジェルラーシュ海峽附近の地に地衣蘚苔の生存するを見、又磁極を南緯七三度、東經一四六度の地に測定したり(一八九九——一九〇〇)。

ドリガルスキー

ドリガルスキー(E. Von Drygalski)は遠征隊を率ひて「ガウス」(Gauss)號に坐乘し一九〇一年八月十五日キールを發し翌年二月三日を以て「バック」に入りしも北東に誘致せられ、キルヘルムランドのポサドウスキー(Posadowski)灣に於て氷の爲に圍まれ、附近の消火山ガウスベルヒ(Gaussberg)に於て各種の觀測に從事したる後、一千九百三年の二月を以て離氷し、好結果を齎らして歸途に就きたり(一九〇三年六月)。

ノルデンシエルド

オットノルデンシェルド(Otto Nordenskiold)はノルゲの三檣船「アンタルクチク」(Antarctice)に坐乘してゲテボルグ(Göteburg)を十月十六日(一九〇一)に發し、ファークランド諸島、南シェットランド諸島等を經て翌年の一月に至りてオルレアン海峽に入りアンタルクチク海峽を通過したり、スノーヒル(Snow-Hill)島を冬籠りの地に撰みて天候險惡なりしに拘らず豫定の探査觀測に從事しつつありしが、不幸にして「アンタルクチク」號が難破せし爲の再度の越年を強ひられ、プリンスグスタブ海峽を發見し(一九〇三)、アルヘンチナの砲艦ウルグアイの救助を受けて一九〇四年の一月を以て歸來するを得たり、本旅行は意外の障害を蒙りしも當該地方に於ける地圖の改良を始めとし地質學、氣象學、其の他、海洋學、細菌學、等に貢獻する所尠少なからざりき。

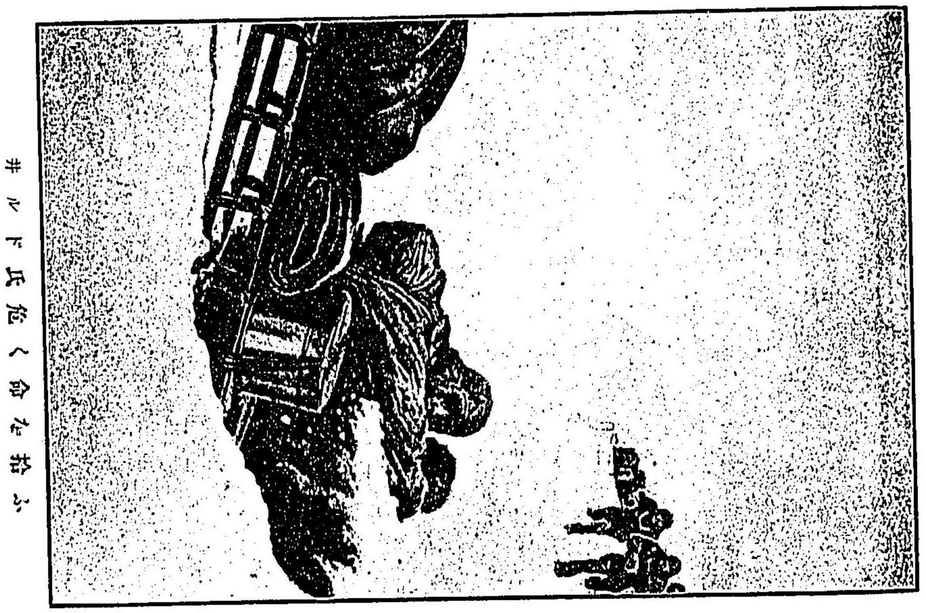
スコット(Robert Scott)はイギリス國官民協同の援助に依りて組織せられたる遠征隊を率ひて「デスカバリー」(Discovery)に坐乘し一九〇一年八月六日を以てカウス(Cowes)港を發してビクトリアランドに向ひたり、翌年(一九〇二)の一月中にアダール岬、クロジエー岬、等を訪ひ東方に航してアンタルクチードの一部たるべき陸地を發見してエドワード七世ランドと命名したり、二月八日を以てマクムルド(Mc Murdo)灣に瀕する東經一六六度、南緯七七度の地に本營を置き、各方面に向ひて探檢隊を派遣せんと決せらる、スコットはキルソン博士、シャクルトン(Shakleton)と共に橇に乘じて南向し九十三日間を非常なる難苦の中に一千五百七十粁の行程を了へ、南緯八十二度十七分に達し同八十三度までの地を遠望するを得たり(一九三〇年二月)、東方に於てはアルミテージ(Armitage)の一隊は本營を距ること二百二十粁、南緯七八度、東經一五七度の地點に於て登山(海拔約三千米突)を試み、沿岸山脈の間より宏大なる積雪高原を望見したり、一九〇三年にはフェラー博士の堆石、化石、等の發見あり、ロイド中尉、ベルナッチ博士の「インランド、シス」研究あり、バーヌ中尉の東經一六一度、南緯八〇度に達するあり、先之一九〇三年一月に「モーニング」の船長コルベックの來訪を受けたる探檢隊は一九〇四年一月に於て再び「モーニング」、「テラノブァ」の二隻の來訪を受けしが幸にして「デスカバリー」は二月十九日を以て離氷し、リッテルトンに歸着したり(一九〇四年三月二九日)。

此等三大探檢の外、スコットランドの遠征隊の指揮者たるブルース(Bruce)は「スコシア」(Scotia)號に坐乘してエッデル(Wedell)海の調査に從事したり(一九〇二—〇四)、加ふるにオットノルデンシェルド救助の爲にジルデン(Gylden)、シャルコー(Charcot)等の渡來もありて一千九百一年より一千九百四年頃までは南極探檢史上注目すべき一期なりとす、而して一千九百六年にはアルヘンチナの「エルオーストラル」(El Australl)號の出發ありき、**シャクルトン**(Shakleton)の南極を距ること百七十九粁の地に達するあり(一九〇七—〇九)、シャルコーは數名の專門學者を率ひて「プルコワパ」(Pourquoi pas)號に坐乘してテールルーベー(Terre Loubet)に向ひ出發するありき(一九〇八)。

検隊に加はりてスコットを助けしことありしが、再度の探検に熱衷しニューファウンドランド製の小形「ポーカ」船 Phoquier)「ニムロッド」(Nimrod)就に乗込みてイギリスを出發したり(一九〇七年八月七〇)、ニューシーランドを經てアンタルクチードに向ひエドワード七世の地を探査せんと試みしもロッスの大氷壁は依然として存し之に接觸するを許さざりき、されば探検隊はロッス島の四岸、ロイヅ(Royds)岬附近に冬營地を撰み數群に分かれ部署を定めて各種の觀測、準備等に從事したり、而して冬季事業の最たるものはエレブスの登山なりき同山は四重式噴火口を有し其の中位にあるも煙孔を爲し、海拔は四千七十米突と測定せら而してシヅグルトンは自己三名の同伴者と共に南群を組織し四頭の「ポニー」を率ひて南極に到達せんと本營の地を十月二十九日に出發したり、アレクサンドラ山脈を右方に望み、ビアードモーア(Bear Jmere)氷河に沿ひて南進しエドワード七世王高原に達せしが二ヶ月に亘る徒行を爲したる後、力盡きて南極を距ること百七十九粁拔、海三〇六三米突、南緯八十八度二十三分の地を終點として歸途に就かざるを得ざりき(一九〇九年一月九日)、又四群はプリンスアルベルト山脈、フェラル氷河、等の地を研究し、北群は磁極を南緯七二度二五分、東經百五十五度、海拔二二一三米突の地と測定したり、如斯してシヅグルトン探検隊は豫定に及ばざるも一大成功を以てポートリヅデルトンに歸着したり(一九〇九年三月二十五日)。

極南陸地

本陸地に就きては未だ探検を完了するに至らざれども中央に大陸ありて周圍に若干の島嶼ありとするは恐らくは非實ならん、而して



井ルド氏危く命を拾ふ

シヅグルトン一行極の引揚に努力す

南極を距ること百七十九粁（約四十五里）

シアックルトンはワイルド(Wild)、アダムス(Adams)及びマーシアル(Marshall)の三人と共に第一隊を組織し、九十九日分の食糧を備へ四頭の「ポニー」(駒)を率ひ十一月三日(一九〇八)を以て滞留地ハットポイント(Hut Point)を出發し、先に設けたる倉庫南緯七九度三六分東經約百六十八度に達し(十三日)、東經百六十八度の經線に沿ひて南進し、南緯八十一度四分の處に到りて「ポニー」一頭を屠り、其の肉を他の品に合はせて貯藏場に納め、二十六日を以て「ザスカバリー」遠征の最南點に着すれば地形は波浪狀を呈して廣漠と成りしも、雪光烈しく之が爲め明を失ひし「ポニー」二頭を射殺せざるを得ざりき、南緯八二度四五分、東經約百七十度の地に貯藏場を設け、南々東に進みしが、十一月末には南東に延びたる新山脈の前途に横はるを見たり、然れども幸にして宏大なる氷河長一二〇哩巾四〇哩を發見し、之に依りて高臺に攀入りしも(六日)、行途極めて困難にして危險頗る多く一頭の「ポニー」は底知れずの深隙に陷りて身を失ひ(七日)、同行の人々も積雪の隧蔽せる氷隙に陷りしこと一再ならず、壓ゝ携へ來りしアルプ繩に依賴するの必要ありき、斯の如くして十二月十八日には二千餘米突の高さに達したり、又八十五度十分の地に到りて食料、機械、宿營材料の外、凡てを貯藏場に殘し置き、一人毎日の食糧を一「ポンド」とせり(一食は少量の「フーシュ」(Hoosh 牛脂、粉狀「ビスケット」、エマージェンシーの混成品)より成りてランチには少量のチョコレート、茶、カカオ、ビスケットを用ひたり)然るに一面には丘又丘の地を行くなれば勞働頗る多く百八十一瓩の橇を引揚げしこと幾回なるを知らず、二十六日には二千八百米突の高さに達せしが、尚ほ漸次に隆起して十二月末には三千二百米突の地に到りしに、南の寒風吹きて大雪を伴ひ溫度は零度下三十八度乃至五十七度に降だりたり。

空氣の稀薄、寒風の暴威、等一として吾人を苦めざるものなきも最も苦痛に感ぜしは食物の缺乏なりき、年は改まりて一九〇九年と成りしも身體の衰弱を回復するの資に乏しく極地を距ること遠からざるに之に達するの望みなかりき、一月二日の如きは十時間力行したる四人に對し小鍋一杯の食料と二片の「ビスケット」、一椀の「カカオ」！決死の前進は行ひ易きも益なく、好果を携へて生還するの難あるのみ、精力を盡し、努力を極めて然る後歸途に就く外なしと決し、一月九日を以て前進最後の日と定めぬ、午前一時風止む、同二時起床、同四時前進、同九時南緯八八度二三分の地に達す、女王旗と國旗とを樹立し國王の名の下に高原を占領す、嗚呼南極を距ること僅に百七十九粁！

ブーヒー(Bouvet)諸島は火山質のアーチ、トムソン(Thompson)、ドキッチ(Lindsay)の三群島にチリ、ブーヒーの群島見し(一七三九)に係りて南緯五〇度乃至五四度經度七度乃至一二度に成りしが、後はこれを求めて得ざりしも(Moore)、ムーア見し(一七七五)に係り中心をすると火山質の島嶼にしてレッツ(Norris)、ノリッチ(一八〇八)、「ブラッキ」(一八一二)、ムーア見し(一七七五)に係りて南緯五〇度乃至五四度經度七度乃至一二度に成りしも、後はこれを求めて得ざりしもブラッキ(一八一二)、ムーア見し(一七七五)に係り中心をすると火山質の島嶼にしてレッツ(一八一二)、ノリッチ(一八〇八)、「ブラッキ」(一八一二)、ムーア見し(一七七五)に係りて南緯五〇度乃至五四度經度七度乃至一二度に成りしが

七五)、ヒスパニアの「ソオン」號本島にサンペド(一七五六)が望見せしことあるは事實なるが如し。

南**オークニー**(South Orkney)群島は南緯約六十一度にありてコロネーション(Coronation)及びラウリー(Laurie)の二島并に若干の小嶼より成れり、最高度(一三二一或は一六四三)はコロネーション島にあり、スミス(Smith)に依りて發見(一八一九)せられたる本群島はエッデル(一八二二)、ヤウガン ヤウル アイイユ(一八三八)、等の來訪を受けたり。

南**シェットランド**(South Shetland)群島は大西洋の南界、南緯六一六三度、西經五五——六五度に位し、南西より北東に走れる火山質の列島スミス、リヤンゲストン、ホルソン、ジオオンなり、スミスの發見(一八一九)する所にして第十九世期の初年には捕鯨船の寄航せしもの多かりき。

テールジョヱンブイユ(Terre Joinville)即ちジョエンブイイユ島は**テールルーイフリップ**(Terre Louis-Philippe)と共に同一の火山質地脈上にありてヤウヨン ヤウル アイイユ(Dumont d'Urville)の發見(一八三八)に係れり。

パルマーランド(Palmer land)は南緯六三——六五度、西經六二——六六度にあり、ジェルワーシウに依れば山岳多き若干の島嶼より成りてペルツカ海峽は之を二部に分てり、北部はパルマーランドの名を專にし、南部はダンコ(Danco)ランドと稱せらる。

いグラームランド(Graham land)は捕鯨者ビスコーの遠征(一八三一——三二)に際して發見せられ、ブルセン(Larsen)(一八九四)、ノルデンシェルド(一九〇二)、等の探査を經たり、ホルン岬の南、南緯六三——六八度に位し、ルーイフィリップと同一の地脈上にあり、北東部にはダンコ(Danco)、オスカル(Oscar)、等のランドを分唱す、附近の島嶼にカイセルヰルヘルム(Kaiser Wilhelm)群島、アデレード島、其の他、群嶼にピット(Pitt)、ビスコー(Biscoe)、等あり。

アレクサンドルー世ランド(Alexander I land)はペリングハウゼンの發見(一八二〇)に係る一島にして南緯六八度五一分、西經七三度三十分を中位とす。

ジオアンブイイユ島よりアレクサンドルー世島に至る陸地は同一の地脈に屬し北東より南西に走り、約一千百五十粁に亘り、南緯六三——七〇度に位し、アメリカのチエラデルフエゴと相對せり。

ペテルー世(Peter I.)島は南緯六十九度、西經九十二度に位す、ペリングハウゼンの發見(一八二〇)に係る火山質の小島にして海拔は一千二百八十米突に達せり。

プリンスエドワード(Prince Edward)諸島はマリオン及びプリンスエドワードの二島の外、アーツロック(Boot Rock)、等を有す、マリオン及びクロゼーの發見に係れり(一七七二)。

クロゼー(Crozet)諸島はマリオン及びクロゼーの發見(一七七二)に係るが、最大島をポッセッシオン(Possession)と云ふ。

ケルゲラン(Kerguelen)島は一にデソラーシオン(Désolation)の義、悲島と云ふ、フランス人のケルゲラントレマレック(Kerguelen Trémarec)の發見(一七七二)に係れるが、火山質の島(三七〇〇方粁)にして嶼礁に圍まれ、最高峯ロッス山(一八六〇)は氷河を有せり、氣溫低く年平均二度、草木に乏しく僅に南極方面に往來する捕鯨船の來訪を待つのみなりしが

一千八百九十三年を以てフランス領と聲明せられ、ジアンスダルク港を囲む、製油地を設け又ロンガ島には綿羊の放牧を試みるに至れり。

マクドナルド(Macdonald)及び**ヒード**(Heard)の雙島あり、乙者は東西の長五十粁ありて海拔は一八二九米突に達す。

セントポール(Saint-Paul)及び**新アムステルダム**(Nouvelle Amsterdam)諸島はケルゲレンの緯線に屬せし「ヒッパトリア」號が歸航の際(一五二二)に發見せし所の火山質の島嶼(七二一方粁)なり、ケルゲレン群(一六一七——一九——三二)、イギリス群(一八四二——四四——五三)等の寄航あり、漸次に名を知られしが、オーストリアの耳環「ノバラ」(Novara)はセントポールを精探し(一八五七)、イギリスの耳環「ピアル」(Piarl)は新アムステルダムの圖を製したり(一八七三)、フランスに屬するも定住者なし。

マカリ(Macquarie)島はオセアニア洲極南の小島(四四〇方粁)にして超伏に富めるも雛耳の生育を見るに過ぎざるのみならず、獲獵に値せず、ウルカー(Walker)の發見(一八一一)に係り、當時のニューサウスエールスの知事の姓に因みて命名せられしが、ペリンダベンの來訪(一八二〇)を受けたり。

カムベル(Campbell)島は「ペルセフォネ」號の長ヘズルスト(Hazelburgh)に發見(一八一〇)せられし不毛の小島なるも二千噸に鎖地を佔ふ。

オークランド(Auckland)諸島はブリストウ(Bristow)の發見(一八〇六)に係り南緯五〇度三〇分、東經百六十二度を中位とせり、往昔は抑鯨船の出入少なからざりしが、現時はニュージーランドの政府が漂流者救助の目的を以て食物、其の他の商品に關する貯藏庫を設くるに過ぎず。

南極圏以内にある陸地即**アンタルクチード**(Antarctide)に就きて記さんに

エンダビー(Enderby)島はビスコーの發見(一八三一)に依りて世に紹介せられ雛主の名に因みて命名せらる、南緯六六度、東經五〇度を中位とするも存在に疑ふべき理由あり。

ケンプ(Kemp)島はエンダビー島の東、南極圏下にあり、一八六三年に發見せられき。

タミネーション(Termination)ランドは南緯六五度、東經九五度に於てアメリカ人ポルクスに發見せられしも(一八四〇)、「ナンシー」は再見するを得ざりき(一八七四)。

ノックス(Knox)、**バッド**(Budd)、**トッテン**(Totten)、**サブリナ**(Sabrina)、**ノース**(North)等の各ランドは相連續して所謂**ウイルクスランド**(Wilkes Land)を成せるが如く報告せられしも(一八四〇)、爾來此等の新陸地を再發見するに至らざるが故に其の存在を疑ふに至れり。

ルイ世ランドは「ガッス」號の發見に係れるが南緯六七度、東經八五——九五度に位し、ガッスベルヒ(Gauss berg)と云ふ消火山あり。

テールクラリー(Terre Clarei)はポルポイズの發見(一八四〇)に係り、南緯六五度、東經一三〇度に位し、其にポルポイズ(Porpoise)灣を擁す。

テールアデリー(Terre Adelie)は前者と同時に發見せられしが、沿岸は山岳に富み積雪の袋に蔽はる、リッチャルド(Rieggold)岬までの陸地を加へて一陸と見做せば前面